
銀河伝説 鋼鉄の咆哮

C - 62

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」「および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河伝説 鋼鉄の咆哮

【著者名】

N4770V

【作者名】

C-62

【あらすじ】

西暦2205年、新たなる侵略者に歴戦の名艦、宇宙戦艦ヤマトと修復竣工されたSDF-1 マクロスが立ち向かうが…

プロローグ（前書き）

初めまして、C 62と申します。このたび宇宙戦艦ヤマト 超時空要塞マクロス 機動戦士ガンダムシリーズのクロス小説を書く事になりました。

はつきり言ってどうなるのか作者次第ですので、気長に楽しんでいただければ幸いです。
それではお楽しみ下せこませ。

プロローグ

無限に広がる大宇宙…

そこは様々な生命に満ち溢れる世界…

我々の地球もまた、そのほんの一部に過ぎない…

22世紀末以来、度重なる異星人の侵略を宇宙戦艦ヤマトの活躍によつて退けた地球は今、繁栄の一途をたどっていた。

だが、史上最大最強の侵略者がその魔の手を伸ばしつつある事を人類は今だ知らない…

時に西暦2205年6月…

地球の守護神宇宙戦艦ヤマトと修復新造されたSDF-1マクロスが新たなる侵略者に立ち向かう！そしてニュー・タイプ部隊として知られるロンド・ベルと協力して戦う彼らの運命は！

第1話 ミステリアス・プレート（その1）

A · D · 2205 6 · 1 15 : 00 火星空域 ヤマト第1

艦橋

西暦2205年、宇宙戦艦ヤマトは艦長 古代進の指揮の下、第3輸送船団護衛艦隊旗艦として、太陽系から4・3光年離れたアル

ファ・ケンタウリ星系第4惑星リンボスからの帰途についていた。

「火星空域を通過した。相原、地球連邦軍本部に打電してくれ、

“ 我が艦隊は明日AM11：00に帰還予定”とな。」

「了解…でも古代さん、連絡先はそこだけでいいんですか？何か大事な所を忘れてません？」

通信班長の相原義一の一言で、古代はいぶかしげな表情で彼に聞いていた。

「何だ？他に連絡するといひつてあるのか？」

「とほけないで下さいよ！大事な婚約者の所でしょーが！」

「お前なあ…口を開けばそればかり！少しば自分の心配しろつての！」

第1話 //ステリアス・プレート（その2）

古代の発言で、第1艦橋の中は笑い声で満ち溢れていた。勿論、古代としても婚約者である森ユキの事を忘れていた訳ではなく、この航海を最後に輸送船団護衛艦隊から、地球本星第1軌道艦隊に配置換えされたのを機会に気持ちの整理をしておこうとあえて触れてはなかつた。

それよりも気になるのはリンボスで発見された一枚の古いプレートの事であった。そのプレートはリンボスの科学者から言わせると、かなり古い物で少なくとも50万年以上の物で、その頃にはすでに文明が栄えていたのではないかとの事だ。

（もしこれが事実ならば、人類の歴史を変える物かもしれない…とにかく科学局の真田さんに見てもらえれば何か分かるかもしれない…）

古代がそう考へていると隣の操縦席にいる航海班長の島大介が話かけてきた。

「おい古代、どうしたんださつからボーッとして…さては愛しいユキちゃんの事でも考へてたのか？三ヶ月ぶりに顔を合わせるんだ、それはアノ事でも…」

「お、おい島～！お前まで俺をおちよぐのか～！」

古代の発言で再び第1艦橋の中は爆笑の渦に満ち溢れていた。

第1話 ミステリアス・プレート（その3）

同日 同時刻 東京 連邦軍本部

その頃、森 ユキは連邦軍本部で忙しく仕事をこなしていた。ここ最近は地上勤務に専念しており、以前のように宇宙に出ることもなかつたものの、それでも三ヶ月おきに帰つて来る古代とは順調に愛を育み、この一週間後には念願だつた結婚式を挙げることになつていた。

そんなユキの後ろからいつもの如く、アナライザーがそつと近づき盛大に彼女のスカートをめくつていた。

「ちょっとアナライザー！いい加減にしてよ～っ！」これは司令部なんだからそういう事止めてつて何度も言つてるでしょ～が～！
「イヤー ユキサン今日モ一段トオキレイデ！」
「ダメよアナライザー！そんなとぼけた事言つても無駄よムダ！」
「アツソウデスカ！人ガセツカクイイ話ヲ持ツテキタノニ聞キタクナインデスカ？」

アナライザーが親切心でユキに何か言い出しそうになつた時、彼女は先手を打つて先に切り出していた。

「もうとっくに知つてゐわよ～ヤマトが明日の午前中に帰還するんでしょう？私が何年この仕事していると思つてんの～」
「……ハア～アナタノ仕事ブリニハ参リマシタ…」

アナライザーそれだけ言つとす”す”とその場を離れ、その様子をユキはクスクス笑いながら見送りながら考えていた。

(いよいよ明日、古代君が帰つてくる…早く顔が見たい…)

第1話 //ステリアス・プレート（その4）

A · D · 2205 6 · 2 11 : 00 東京湾上連邦軍宇宙港

翌日、ヤマトを含む護衛艦隊は定時に東京湾上の連邦軍宇宙港に着陸していた。

到着ゲートにはすでに大勢の人々が出迎えに来ており、ユキも古代の姿が現れるのをひたすら待ちわびていた。

（遅いなあ…艦長だからいつも最後に降りて来るのは分かるけど、たまには真っ先に降りて来てくれてもいいのに…）

ユキがそう思つていると後ろから誰かが彼女の肩を叩いてきたので振り向くとそこにはクローディア・ラサールと早瀬 未沙が立っていた。

「あら、どうしたの？あなたの大事な彼氏、まだ降りて来ないの？」
「あ、クローディアさん、それに未沙も…ひょっとして今から南アタリア島に？」

「ええ、本部での最後の打ち合わせが終わったので今から行くんです。」

「まあ、もつともあのタヌキ親父艦長は本部のお偉方と今夜は飲み会だらうけどもね！」

クローディアの発言で一同が笑い声を上げているところに古代がようやく姿を現していた。

「古代君！お帰りなさい！」

「ただいまユキ！あ、それにクローディアさんに早瀬君もお久しぶ

りです！」

「お疲れ様古代君！久しぶりに会うけど相変わらずね！それよりも
今夜はたっぷりユキと二人、たっぷりお楽しみなさい！じゃあね～
～！」

そう言つとクローディアは未沙を連れて真っ赤になつた二人を置いてさつさとその場を後にしていった。

「クローディアさん、言つだけ言つてさつさと行つてしまつた…全く余計な事言つて…」

「や、そうよね～変に氣を使つちゃつて…」

第1話 //ステリアス・プレート(その5)

同日 11：30 地球連邦科学局

それから30分後、古代とユキは科学局にいる真田 志郎を訪ね、リンボスの科学者から預かっていたプレートを彼に手渡していた。

「どうでしよう真田さん、このプレートを見て何か感じませんか？」
「いや…特に何も感じないが…何か気になるのか古代？」

「ええ…リンボスの科学者はただの過去の遺物だと言つてましたが、僕には何か引っ掛かるものがあつて…もしかしたら何かのメッセージじゃないかと…以前にも似たような事がありましたよね、イスカンダルのスター・シャさんやテレサ…それに一年前の水惑星アクエリアスの存在を記した石版など…」

「ちょっと古代君、それはいくらなんでも考え過ぎよー…これはただの遺物にしか見えないじゃないの？」

古代の発言に横からユキが口を出していた。実際四年前にも宇宙の彼方からメッセージが入り、古代達ヤマトクルーは命令を無視してまでヤマトを発進させたのであった。

「まあユキの言つ通りただの遺物かもしれないしな…あまり考え過ぎると熱が出るぞ古代…とにかくこれは俺が預かつとくから後は任せろ。それより古代、せっかく帰つて来たんだ、少しほはユキにサービスしたらどうなんだ？そのうちユキに愛想尽かされるぞー！」

「さ、真田さん！？あなたまでそんな事言つんですか～～～！」

第1話 //ステリアス・プレート（その6）

同日 13:25 横浜中華街“明謝樓”

それから約2時間後、古代とコキは横浜中華街のレストラン“明謝樓”で食事をとっていた。ここは一人がデートする時に決まって立ち寄る場所の一つであった。ひとしきり食事も終わり、この店のオーナー夫婦が食後のデザートを持って二人の前にやって来た。

「古代さん、コキさん、いつもこの店を」「利用いただきありがとうございます！いかがでした今日の料理は？」

「ええ、とても美味しくいただきました。……それより今日は娘さんのミンメイさんは？いつもなら真っ先に姿を見せるはずなのに？」

古代が不思議そうに尋ねるとオーナーは慌てふためきながら
「あ、すいません！ちょっと奥の方が忙しいので私はこれで……」
と、そそくさと奥の方に向かつて行った。

オーナーが奥へ行つたのを確かめたその妻は小声で古代とコキに説明していた。

「実は…三ヶ月前に私達と喧嘩して家を出ちゃったんです…それも、“歌手になりたい、ミス・マクロスコンテストに応募して最終選考に合格したからそれに出たい”なんて言って…それを聞いた主人は手がつけられないくらい怒りまくつて…私も考え直すように言ってその場を何とか納めたら…その夜置き手紙を置いて家を出ちゃったんです…」

「え…それで今何処にいるか心当たりはあるんですか？」

「はい…実は一週間前に私の携帯電話にメールが来まして…今、

南アタリア島の叔父さんの店にカイフン兄さんと一緒にお世話をなつてゐる…心配しなくていいけどお父さんには内緒にして”と…」

その話を聞いた古代とヨキはいたたまれない気持ちになつていた。あれほど両親と仲の良かつたミンメイが家出してまで歌手にならうとは思つていなかつた。

「あらいやだ…こんな話するつもりなかつたのに…せつかく来て頂いたのに嫌な話聞かせて」めんなんせいね…」

第1話 //ステリアス・プレート（その2）

同日 21:00 東京都内 古代進のマンション

“明謝楼”を出た後、一人は横浜ベイエリアを散策し、その後都内にある古代のマンションに戻っていた。古代とユキは二年前の暗黒星団帝国との戦いの後、互いの傷ついた心を癒すかのように自然と同棲を始めたのだった。

古代は、ユキがバスルームにいる間に今度の配置換えに伴う人事異動に関する資料に目を通していた。

「ええと…俺はヤマト艦長と第1軌道艦隊司令を兼任…真田さんは副長で復帰…おっ！揚羽と土門が戻って来るんだ！おまけに土門の奴、生活班から戦闘班に動いてしかも戦闘班長つて…大丈夫か？それで後は…な、何だ？ユキまで復帰つて、しかも第1艦橋レーダーオペレーター専任つて…お～～いユキい～～これ一体どういう事だ～～～？」

古代はバスルームからリビングに戻つて来たユキに向かつて叫んでいた。

「ちょっと古代君、そんなに大声出さなくともいいじゃない…見ての通り私もまたヤマトに乗り組みますのでよろしくお願ひします古代艦長！」

「しかしながら一週間後に結婚するんだぞ、何も夫婦で同じ艦に乗り組むつてのはちょっと…」

「あらいいじやない！結婚しても仕事は続けるんだし、それに旧姓

の森ユキで通すから問題は無いはずよー。」「だけどなあ……」

それでも何か言いたげな古代の様子を見て、ユキは何も言わずに自分の唇を彼の唇に押し当てていた。

「…………ねえ…………そんな事よりも…………久しぶりに…………いっぱい愛してくれる…………？」

ユキの妖艶な眼差しに古代も根負けし、彼女の体を抱き上げると元で囁いていた。

「了解、お姫様…………今夜はたっぷり楽しめますよ…………」

その夜一人は情熱的な一夜を過ごしたといつ……

第1話 ミステリアス・プレート（その2）（後書き）

次回、マクロスキャラが本格的に登場の予定…

番外編（その一） 世界観設定 ヤマト・マクロス編

1 この物語で彼らが所属するのは“地球連邦軍”。どちらかと言うとヤマトシリーズに出て来る“地球防衛軍”的な感じ。

2 当然ながらヤマトクルーにも階級はあります。主なクルーの階級は以下の通り。

大佐：古代 進 真田 志郎

少佐：島 大介 山崎 横

平田 一 幕ノ内 勉

大尉：森 ユキ 南部 康雄

太田 健二郎 相原 義一

加藤 四郎 坂巻 浪夫

中尉：徳川太助 仁科春夫 赤城大六

少尉：土門竜介 揚羽武

3 今回の主な舞台は地球と、「ヤマト3」に出てきたアルファ・ケンタウリ第4惑星です。この惑星をOVA「YAMATO 2520」に出てきた「リンボス」と名付けました。（マイナー過ぎる作品なので誰も知らないと思つ…）

4 今作品限定でヤマトの全長を原作の265mから「実写版ヤマ

ト」の534m（映画パンフレットより）になります。（やうしないとガンダムシリーズの戦艦に比べると小さ過ぎて見劣りするんで…）同様にマクロスも少しサイズUPして1200mから1500mに延長します。

（劇中のマクロスは両腕にアームドバー&バーを接続した劇場版）

5 マクロスキヤラのロイ・フォッカーは以前、ヤマトに乗り組んでいたという設定。

：以上、世界観設定その一でした。多少の変更は少しづつ劇中で明かします。

番外編（その2） 世界観設定 ヤマト・マクロス編（前書き）

主に前回書き忘れた話です…

番外編（その2） 世界観設定 ヤマト・マクロス編

6 時代設定…この物語は「ヤマト3」及び「ヤマト完結編」後の設定です。但し「ヤマト3」第18話でガルマン・ガミラスのフラウスキー少佐が行つた太陽制御作戦は成功している設定のため、ボラー連邦との最終決戦がないおかげで土門と揚羽は生き延びています。（同様に平田さんも死んでません）

さらに「完結編」で起きるはずだった銀河大異変も起きて無いのでガルマン・ガミラスやボラーはそのままですが、アクエリアスの地球接近はあります。しかしこれも寸前で阻止成功。ヤマト自沈は無し。（完結編本編での古代の艦長辞任も無いため、沖田十三の復活も無し！ 少し強引かも…）

7 マクロスが地球に落ちて来たのは西暦2190年。修復まで15年かかったのはガミラスを始めとする異星人の侵略もそうだが、地球の大企業が同艦の修復を巡つて激しい競争をしていたため。（すごいリアルな展開）

8 今作品でのヤマトの艦載機はマクロスに搭載されたバルキリーVF-1シリーズ。当然劇場版に登場したスーパー・バルキリーも出ます！（それにしても、ヤマト復活編に出て来たコスモバルサーって何かスーパー・バルキリーに似ているような…）

番外編（その2） 世界観設定 ヤマト・マクロス編（後書き）

何か取つて付けたような設定でいいませんか……
次回、やっと第2話へ…

第2話 フーピー・トラップ（その1）（前書き）

この小説書くために初代マクロスをレンタルして見てますが、各話ごとにキャラの顔が違い過ぎて違和感ありまくり：

第2話 ブービー・トラップ（その1）

翌日、南アタリア島では修復新造されたSDF-1マクロスの進宇宙式が行われていた。この艦は15年前の西暦2190年、地球近辺に突然出現し南アタリア島に落下した全長1500mにも及ぶ巨大な宇宙船であった。

その当時、地球はガミラスからの攻撃を受け始めており、全力でこの艦の修復作業を進めていたものの攻撃が激しくなるにつれて作業は中断に追い込まれていた。

結局、修復作業が再開されたのは、ヤマトがイスカンダルから帰還してからであった。そして今、マクロスは宇宙に向け飛び立とうとしていた。

A · D · 2205 6 · 3 9 · 15 南アタリア島マクロスメインブリッジ

「早瀬中尉、グローバル艦長が式典会場に入られたそうです。」マクロスマインブリッジオペレーターのヴァネッサ・レイニアードが未沙に報告していた。

「式典開始まで後15分…艦長つたら今朝方東京から帰つてそのまま会場入りするなんてどういう事かしら？」

未沙が半ば呆れた表情で自席の端末を調整しながらボソリと呟くと、同じく隣席で調整していたクローディアが言い返した。

「どーせ朝方まで飲んだくれてたんでしょう？あのタヌキ親父艦長…」

「あなたじゃあるまいし…フォッカー少佐との朝帰り、ちょっとした有名人よ？」

「大丈夫！私もロイもまだまだ若いんだから一晩寝ないでも平気よ！それとも何？そんなに気になるんならあげるわよ？何ならのし紙つけて！」

「あ、あなたねえ…」

未沙が呆れた表情でクローディアに詰め寄ると、同じオペレーターのキム・キャビロフとシャミー・ミリオムが合意の手を入れていた。

「へえ～っ！中尉も男性に興味津々なんですねえ～知らなかつたわ～」

「えええ～っ！嘘お～っ！？」

「もうつ～！そんな事言つ暇あつたひそかに発進準備してちょうだい！」

「は～い～！解で～～す！～～！」

第2話 ブーピー・トラップ（その2）

同日 同時刻 月軌道

それは、突然の出来事であった。月軌道周辺に重力異変が発生し、おびただしい数の正体不明の艦隊がその姿を現していた。その大きさは小型でも2000m、大型ともなると4000m級であった。その艦隊の先頭に立つ旗艦のブリッジでは一人の巨人がモニター越しに前方に見える地球を凝視していた。

「あの惑星か？監察軍の連中が乗った艦が墜落したと言つのは？」

二人の男のうち、背の大きな隻眼の男が呟くと、もう一人の背の小さな赤い髪の男が手元の端末を操作しながら答えていた。

「はい…報告によれば、15周期前に監察軍の生き残りが乗った艦隊のうちの一隻があの惑星に墜落したとの事だそうで…」

「ふむ…ただの脱落艦かも知れないが万一と言つ事もある…直ちに先行艦隊を出し、前方の惑星を調査せよ…」

その隻眼の男…ゼントラーディ軍第67分岐艦隊司令ブリタイ・クリダニクは傍らにいた赤髪の副官の男…エキセドル・フォルモを通して命令を下すと、艦隊から一隻の小型艦が地球へと進路を取つていた。

「……ありますから、このUFO - 1 マクロスは、我が揚羽コンツェルンが心血を注いで修復新造された希望の星となる艦であります……」

南アタリア島の進宙式会場では、揚羽コンツェルンの総帥にして連邦議会の議長を務める揚羽 蝶人の演説が行われていた。その後ろでは居並ぶ来賓と共にマクロス艦長であるブルー・ノ・・グローバルが落ち着かないそぶりで演説を聞いていた。

するとそこに一人の士官が彼に近付き、そつと耳元で報告していた。

「艦長、月基地より入電です……月軌道周辺に重力異変と発光現象を確認……さらに未知の大艦隊出現……との事です……至急ブリッジに向かって下さい……」

「重力異変……15年前と同じだな……分かつた、すぐにブリッジに行こう……」

グローバルはすぐに決断するとその場を離れた。それと同時に演説していた揚羽会長が後ろを向いてグローバルを紹介しようとしていた。

「と言う訳で、栄光あるこの艦の艦長である……つてどこ行つてしまつたんだあの男……」

第2話 ブーピー・トラップ（その3）

同日 9：25 マクロスメインブリッジ

その頃、メインブリッジではある異変が起きていた。マクロス修復時に発見された異星人の防衛システムが突然作動を開始していた。

「何これ！閉鎖したはずのシステムが勝手に…！」

「そ、そんな事ある訳ないでしょ！？とにかく出力をカットできなイの！？」

クローディアの発言に未沙が、隣席の端末やスイッチ等を操作したもの、システムは相変わらず点滅を続け、さらに間の悪い事に艦首前方の主砲発射システムまでが作動を開始していた。そこにようやくブリッジにたどり着いたグローバルが慌ただしく一人に聞いただしていた。

「一体どうした！何が起きているんだ！」

「閉鎖したはずの旧システムが勝手に…艦首主砲発射システムまで動き始めて！」

クローディアが報告している間にも、艦首部分が左右に分かれ、その間をプラズマ粒子が輝き始め、その粒子エネルギーは臨界に達しつつあった。

「主砲が…発射されますっ！？」

クローディアが叫ぶと同時に主砲が発射され、その強大なエネルギー

ーの束はしばらく海上を走り、やがてそのビームは上空に舞い上がり衛星軌道周辺に近付きつつあつた二隻の小型艦に命中し撃沈していった。

同日 同時刻 月軌道周辺

「先行艦隊、撃沈されました！」

観測員の報告を聞き、パネルに映し出された映像を見たブリタイは即座に命令を下していた。

「やはりあの惑星に潜んでいたのか…全艦隊に発令！第一級戦闘配備！」

「了解！全艦隊戦闘配備！バトルポッド隊は全機出撃準備に入れ！」

第2話 ブービー・トラップ（その4）

同日 9：28 マクロスメインブリッジ

「主砲管制システム……元に戻りました……」

クローディアが呆然とした表情で報告すると同時に、ヴァネッサも監視衛星からの入電をキャッチしていた。

「監視衛星からの報告によると、主砲ビームは大気圏外400km地点で宇宙艦らしき物体を撃破。さらに後続の艦隊が接近中との事です！」

その報告に騒然となる中、グローバルはぽつりと一言呟いた。

「ブービー・トラップだ……どうやら我々は嵌められたようだな……」

「……ブービー……トラップ……それってどういう事ですか艦長……？」

「かつてこの星で250年ほど前に行われていた世界大戦で、旧ドイツ軍がよく使っていた手だ……戦場で目立つ物……ぬいぐるみや万年筆などに爆発物を仕掛けておき、それを敵が拾い上げると……という訳だ……大方、この艦もそんなものだろうな……」

グローバルはそう言うと胸ポケットからパイプを取り出し火を付けようとした時、シャミーが立ち上がるなりヒステリックに叫んでいた。

「艦長……ブリッジは禁煙です……！」

「わ、分かっとするわい！くわえてるだけだ！総員第一級戦闘配備！
並びにマクロス発進準備だ！」

「了解！全艦戦闘配備！本艦はこれより異星人との交戦に入る！」「
これは演習ではない！繰り返す、これは演習ではない！」

第2話 フーピー・トラップ（その5）（前書き）

今回は、ヤマトクルー側からの話です。

第2話 フービー・トラップ（その5）

同日 9：15 東京 連邦軍ドック ヤマト第1艦橋

東京湾上の連邦軍ドックに停泊中のヤマト第1艦橋では、第1軌道艦隊の業務引き継ぎと新たに配属になったクルーの顔合わせが取り行われていた。

「艦長、お久しぶりです！またお世話になります！」

土門 竜介が古代に着任の報告をすると、古代もまた感慨深げに土門に話かけていた。

「土門、またよろしく頼む。今度からは念願の戦闘班所属…それも戦闘班長だ。とにかく頑張ってくれよ！」

「はい！ありがとうございます！頑張らせていただきます！それに森さんとまた一緒に働くなんてうれしいっす！」

土門のその一言に古代以外のクルーから笑い声が上がり、その様子を見ていた島が土門にクギを刺していた。

「おい土門、あまりそんな事言つなよ！約一名嫌な顔をしている奴がいるからな、気をつけておけよ！？下手すりや射撃の的になるぞお～！」

その一言にまた一同から笑い声が上がるが、アナライザーガ士門に向けて言い放っていた。

「オイ士門！コキサンハ俺ノ女ダ！ヘタニ手ヲ出スンジヤネ！」

そう言つとアナライザーはコキの側に近付き、やおり彼女の制服のスカートを盛大にめくつっていた。

「もへへへアナライザー！いい加減にしてよへへへ！ねえ古代くうへへん、艦長としてアナライザーにその癖止めるよつにか言つてやつてよ～！」

「あ、いや……その……俺としてはだな……」これはもうヤマト艦内名物の一つだし……その……」「……」

「はい！？何か言いました？」

コキの鋭い視線に圧倒された古代は思わず咳ばらいした後アナライザーに命令していた。

「あ～あのうアナライザー……今後一切このような事はやらないようにな……」

「ハイハイ！分カリマシタコ古代艦長ドノ！」

アナライザーの一言で第1艦橋内は再び笑い声に満ち溢れていた。その時、航法レーダーを担当している太田健一郎が緊迫した表情で報告を入れていた。

「艦長！南アタリア島から放たれた高エネルギー弾が、大気圏外の所属不明艦に命中！さらに所属不明艦隊多数接近中！」

「何だつて！相原、連邦軍本部からの指示はあるか！？」

「はい、今入りました！ヤマト率いる第1軌道艦隊は直ちに出撃との事です！増援として、土星空域で待機中の主力艦隊が間もなくワープするとの事です！」

「分かつた！本艦は直ちに出撃する！土門、発進総指揮はお前に任せる！」

「了解！全艦発進準備！」

次々と指示を出す土門の声を聞きながら、古代は艦長席で一人想いを巡らせていた。

（また始まるのか戦いが……俺とユキが結婚を決めようとする度にいつもこの有様だ……）

第2話 フーピー・トラップ（その5）（後書き）

土門がユキに憧れている様子は他の一次創作でよく取り上げてますが、この小説でも取り入れました。

ちなみに、今回ユキの制服はヤマト本編で着用していたボディースーツタイプの艦内服ではなく、「永遠に」「完結編」で着用していたタイトミニのスーツです。（いくら何でも未沙や三人娘達には、ボディースーツを着せる訳にはいかないし、第一彼女達に似合つかどうか…）

第2話 ハーピー・トラップ（その6）（前書き）

リン・ミンメイの葬場です！

第2話 フーピー・トラップ（その6）

同日 9：25 南アタリア島進宙式典会場

南アタリア島マクロス進宙式典会場の一角にある控室では、式典後に開かれるミス・マクロスコンテストに出場する参加者がその出番を待つており、その中にはリン・ミンメイの姿があった。

ミンメイは幼い頃から歌手に憧れ、中学を卒業後高校に通いながら歌のレッスンを始めていた。そして三ヶ月前に両親に内緒でミス・マクロスコンテストに応募して最終選考に見事合格。その事を両親に伝えると当然の如く反対され、大喧嘩の末に家を飛び出したミンメイは南アタリア島の叔父夫婦の経営している中華料理店に転がりこみ、同じくミコージシャンを手指して家出していた兄のカイフン共々世話をになっていた。

「ミンメイ、もう少しでコンテストが始まるけど大丈夫なのか？」
「うへへん……何か緊張して来た……ちょっとトイレ……」
「ありやまた行っちゃったよ……本当に大丈夫なのか……これで三回目だぞ……」

カイフンがミンメイの消えた先を見ながら呟くのと同時に外からけたたましい轟音が鳴り響き、強い揺れが控室を包み込んでいた。

第2話 フーピー・トラップ（その6）（後書き）

今回、ミンメイとカイフンは劇場版同様兄妹の設定です。

本当はTV版仕様で反戦活動家として出演させて、地球の守護神たるヤマトに反感を持つ人物にしたかったのですが、ストーリーがややこしくなるので止めました。

次回、一条輝とロイ・フォックターがやっと登場…
輝は最初から軍人として登場です。

第2話 ブービー・トラップ（その7）

同日 9：31 南アタリア島基地格納庫

『デルタ一より基地航空隊へ！現在本艦は異星人と交戦中です！速やかに各機体の出撃準備を済ませ、直ちに出撃して下さい！』

マクロスメインブリッジの末沙からの指示により、新鋭可変戦闘機のバルキリーVF-1が出撃準備を急いでいた。

中でも航空部隊長である、ロイ・フォックナーはこれまで数多くの敵機を撃墜してきたエースパイロットであり、かつてはヤマトにも乗り組んでいた猛者でもあった。

（久しぶりの戦闘か……まだ腕は鈍つて無いだらうな……）

フォックナーがそんな事を考えていると、機内のモニターにこの度連邦軍に入隊したばかりの一条輝からの通信が入っていた。

『先輩！何か緊張して来ました！大丈夫ですかねえ？』

「下手に緊張しても仕方ね～だろ輝！もづきょつとリラックスしろ！」

『は、はあ……』

輝がなおも不安気なまま返事をすると同時に、再び末沙からの通信が入つて来た。

『こちらテルタ1！スカル大隊は直ちに出撃して下さい！』

「了解！スカルリーダーより各機へ！聞いての通りだ、これより出撃する！」

「了解！！！」

第2話 フーピー・トラップ（その8）（前書き）

未沙の父、早瀬提督の登場です。

マクロスTV版では「提督」の肩書を持つてたものの、実際艦隊を率いるシーンは無でした。

今回は、土方さんの後任として地球艦隊司令にしましたが、実力のほどはいかに……

第2話 フーピー・トラップ（その8）

同日 9:40 月軌道周辺

「ワープ終了！現在位置、月軌道より10宇宙キロ地点です！」

改アンドロメダ級戦艦ブルーノアを中心とする連邦軍主力艦隊は土星空域からのワープ終了と同時に情報収集を開始していた。

その旗艦ブルーノアのメインブリッジでは、未沙の父で艦隊総司令である早瀬 隆司中将が現時点での状況報告を見て溜息をついた。

（…………しかし、マクロスが先制攻撃をかけたと言つのはどうこう事だ……以前の会議で決定された事を忘れてた訳ではあるまい……）

この時点で、マクロスの旧システムが勝手に作動を始めた事を早瀬は知る由もなかった。

「提督、第1軌道艦隊旗艦ヤマト艦長古代大佐から通信が入ってます！」

「分かった、メインに繋いでくれ。」

通信員が操作すると、パネルには古代の姿が映し出されていた。

『お久しぶりです早瀬提督、お元気そうで何よりです！』

『うむ……ところでそちらでもキャラツチしていると思うが、敵の出

方が分からん……」こはひとまず様子を見てからだ……マクロスが無事に大気圏外に出るまでは充分警戒するようになつた。

『了解です！また何かありましたらこちらから連絡します！』

パネルから古代の姿が消えると同時に観測員からの緊張した報告があつた。

「提督！南アタリア島に敵の地上部隊が上陸！基地守備隊と交戦の模様！」

第2話 フービー・ラップ（やの8）（後書き）

劇中登場した改アンドロメダ級戦艦は、「ヤマト2」に登場したアンドロメダを拡大改良したもので、主な武装は「一連マルチモード波動砲」です。これは拡散・集束モードを任意で選択できると言つて、ある意味優れた兵器の一つです。

アンドレッヂノート級戦艦は、「復活編」に出ていた主力戦艦を拡大したもので、この戦艦にもマルチモード波動砲が装備されています。

次回、やっとマクロス発進ですが……

第3話 スペース・フォールド（その1）（前書き）

「ヤマト3」に一度だけ出ていた揚羽会長の登場です。この人、これから度々出で来ますが、かなりのトラブルメーカーになりそうな予感……

第3話 スペース・フォールド（その1）

A · D · 2205 6 · 3 9 · 44 マクロスメインブリッジ

マクロスメインブリッジでは、発進準備と島内にいる市民の避難状況の対応に追われていた。そんな慌ただしい状況の中、一人の男がブリッジ内に入つて来た。

「グローバル君、一体いつになつたらこのマクロスは飛ぶんだね！」「これはどうも揚羽会長…」

揚羽会長は入るなり、持つていした葉巻にライターの火を点けようとした時、シャミーが自席から立ち上がり叫んでいた。

「申し訳ありませんが、ここは全面禁煙ですッ！！」

揚羽会長はシャミーをジロリと睨むとグローバルに言い放つていた。

「グローバル君、こここのクルーは教育がなつとらんな！来客に見て口の聞きたが悪いぞ！」

「はあ……ですが……」

「言い訳は聞かんぞ！第一、この艦は我が揚羽コンツェルンが心血を注いで建造したのだ！南部重工で作られた出来損ないのアンドロメダ級やドレッドノート級…廃艦寸前のヤマトとは違うのだよ！もし私が連邦軍司令長官ならば、これらのクズ鉄艦はさつあと廢棄してマクロス級を数多く建造して……」

揚羽会長の発言を黙つて聞いていた末沙が口火を切つて反論していた。

「演説の最中申し訳ございませんが、本艦は現在警戒態勢の最中です！直ちにここから退出して頂けますか！？」

末沙の発言に揚羽会長は臆する事もなく、彼女を睨みながら反論に転じていた。

「貴様！口の聞き方がなつてないぞ！事と次第によつては貴様を含めたこの艦のクルーを全員クビに出来るんだぞ！名前を名乗れ！」

「…………早瀬未沙…………中尉であります。」

「早瀬…………あの連邦艦隊提督の…………娘！？」

末沙の名前を聞いた揚羽会長は言葉を失つていた。それに追い撃ちをかけるようにグローバルが切り出していった。

「…………とにかく、我々は発進準備中です。一般市民を守るのが我々の任務ですから。今ここでクビを切られれば、マクロスは発進出来ませんぞ！ここはとにかくおとなしくお待ち願えますかな？」

グローバルのその一言に揚羽会長はすゝりすゝりとブリッジを後にしていた。

第3話 スペース・フォールド（その2）

同日 9:51 地球衛星軌道

地球の衛星軌道周辺に接近していたゼントラーディ艦隊旗艦のブリッジでは、ブリタイとエキセドルが地上に展開中の部隊から送られて来た映像に見入っていた。

「一体何だ……この規律性のない土地の使い方は……全くの未開種族らしいなこの星の住人達は……やはりここに潜んでいたのかあの艦は……」

「はて……私の記憶にはあのタイプの艦には見覚えがありませんが……」
「何！？記憶に無いだと……記録参謀のお前がか？」
エキセドルのその発言にブリタイが驚いていると、レーダー要員から報告が入った。

「艦隊後方よりミサイル群多数接近中！」

「直ちに迎撃せよ！」

このミサイル群は月軌道周辺に展開中の地球連邦主力艦隊より発射されたもので、ヤマトの装備している波動エネルギートリッジ弾を改良し射程距離を大幅延長した代物であった。ゼントラーディ艦隊の一部は波動エネルギーの熱効果により大爆発を起こし、消滅していった。この様子を見ていたブリタイとエキセドルはしばらくの間、言葉を失っていた。

「な、何だ……今のは……」

「ま、まさか……幻と言われる反応兵器では……」

「馬鹿な……こんな未開種族が失われた修復技術や反応兵器を保有しているなどとは信じられん！」

「これはまだ相手を一方的に殲滅する訳にはいかなくなりましたな……ここはとにかく調べる必要が出て来たようですね……」

第3話 スペース・フォールド（その3）

同日 9:55 マクロスメインブリッジ

その頃、マクロスメインブリッジでは、発進準備が次第に整いつつあつた。

「メインエンジン、間もなく最大出力に到達…重力制御システム作動開始！」

「早瀬君、島内の市民の様子はどうかね？」

「はい！現在の所、95パーセントまでの市民がシェルターに待避しているようです！」

「そうか…島の人々が無事に待避完了してくれればそれでいい……」

「重力制御システム、最大出力に到達しました！」

「よし！マクロス浮上開始！」

「了解！マクロス浮上開始します！」

全長1500m、総重量2000万tの巨体は15年振りに大地を離れ、遙かなる空へとその艦体を向けようとしていた。だが艦自体に大きな揺れを生じるとブリッジクルーは床面に投げ出された。

「な、何があつたんだ！？」

グローバルが叫ぶと同時に、未沙が信じられないといった表情で前方を凝視していた。

「艦長！重力制御システムが…」

グローバルが艦首方向に目をやると、甲板を突き破り数本の重力制御システムが回転しながら空へ上昇していった。

「こんな馬鹿な事が… 総員ショックに備えろー地面に叩きつけられるぞ！」

グローバルが叫ぶと同時に、マクロスはもの凄い轟音とともに地表に叩きつけられていた。

「全員……怪我は無いか…？」

「はい……何とか…」

「とにかく、本艦の被害状況を調べてくれ……全くこの艦は酷い艦だな…」

「宇宙から落ちてきたものを拾つて使つかうです…」

第3話 スペース・フォールド（その4）（前書き）

一条輝とコン・ミンメイの初めての出会いです。

第3話 スペース・フォールド（その4）

同日 10:01 南アタリア島市街地

ゼントラーディ軍の攻撃により、市街地はもはや瓦礫と化していた。その中をミンメイはひたすら走り続けていた。シェルターに避難する途中、忘れ物に気付いた彼女は兄のカイフンと叔父夫婦に先に行くよう頼むと、進宙式会場にあるミス・マクロスコンテスト控室に戻っていた。

控室にたどり着き、化粧台の上に置き忘れた一枚の写真を手に取り持っていたポーチの中に入れたミンメイは、すぐに外に出てシェルターに向かおうとした時、バトルポッドの一群に取り囲まれてしまつた。

（ 私、もう駄目かも……）

ミンメイがそう思った時、一機の戦闘機が現れてたちまちのうちにそのバトルポッド群を撃破していた。その戦闘機のコクピッドが開くとパイロット……一条輝がミンメイに声を掛けていた。

「大丈夫ですか!? 早くこれに乗つて下さいーーー」

「えつ……でも……」

「いいから早く! 敵がまたやつて来るんだ!」

輝の催促にミンメイが従い、ナビシートに座ると前席の輝が自分のヘルメットをミンメイに手渡した。

「あの~私がこれを被つたらあなたはどうするの?」

「僕は大丈夫！すぐに発進するからしつかり掴まつて！」

輝がそう言つと同時にいきなり一機のバトルポッドが現れ、彼のバルキリーに攻撃を加えていた。輝はすぐに回避したものの、ビルの残骸に機体を打ちつけてしまつた。それでも輝はガトリング砲を擊ち続けると、ようやくそのバトルポッドは崩れ落ちていた。

「フーッ……やつとの事で撃ち落としたよ……それより後ろの女の子、大丈夫かな……」

輝が後ろに手を向けると、ミンメイは先程の衝撃で気を失っていた。
「ありや……氣絶しちやつてるよ……仕方ない、とにかく近くのシェルターに連れて……え、ええつー？」

先程撃墜したはずのバトルポッドの中から身長10m以上はあるかと思われる宇宙服を着た巨人が現れていた。

（……やつぱり……以前士官学校で教えられた通りだ……ってそんな場合じゃない！）

輝は反射的にガトリング砲のスイッチに手を伸ばし、押そうとしたものの反応がなく弾切れである事によつやく気が付いていた。

「や、やつぱー！」

輝がそう叫ぶのと、その巨人が輝のバルキリーに襲いかかるのと同時に一髪で駆け付けたフォッカー機のガトリング砲が火を噴き、その巨人はその場で息絶えた。

「せ、先輩！ありがとうございます！」

「なーに、いいって事よ…………しかし……ここまで“奴ら”が俺達人類にそつくりとはな…………」

第3話 スペース・フォールド（その4）（後書き）

次回、ヤマトキャララとマクロスキャラの本格的な絡みですが…どうなる事やう…

第3話 スペース・フォールド（その5）

同日 10:15 マクロスメインブリッジ

「技術部より報告です！重力制御システム再設置完了！並びに破損箇所の修復も完了したとの事です！」

「よし！直ちに発進準備を再開してくれ！」

グローバルの決断に未沙が不安気な表情で切り出していた。

「艦長、今度は大丈夫でしょうか……」

「心配する事はない……今度設置した物は地球上で製造された物だ早瀬君……いたずらに心配しても始まる訳でもあるまい……」

「そうですね……あ、連邦軍本部より入電です。“当艦は、大気圏外にて待機中の第1軌道艦隊と合流せよ”との事です……」

「分かった。それでは本艦は直ちに発進する一バルキリー隊に直ちに集結するように伝えてくれ！」

「了解！マクロス発進します！」

さすがに今度は何事もなく、マクロスはそのまま浮上させ宇宙へと進路を向けていった。

同日 10:20 南アタリア島上空

輝とフォックターの一機のバルキリーはマクロスからの通信で、南アタリア島市街地から飛び立ち今は上空6000m地点を飛行中である

つた。

「先輩！マクロスが第1軌道艦隊と合流するって言つてましたけど、確か旗艦は…」

「そうだ！ 地球の危機を何度も救つたあのヤマトだ！ そして昔、俺が乗つっていた艦でもあり、お前が乗艦を希望していた艦だ！」

「何処の誰かは知りませんけど、余計な事をしてくれたおかげでマクロスに乗る羽目になっちゃいましたけどね！」

輝のその一言のおかげで今まで氣を失つていたミンメイが目を覚まし、辺りをキョロキョロと見ていた。

「あの…………」は今何処なんですか？」

「あ、やつとお田代め？ 当機はただいまマクロスに向けて飛行中！」

「えへへへっ！ ？ 島には帰らないんですか～～～？ ！ 島のシェルターには私の兄と叔父夫婦がいるんですけど～～～！ ？」

不安気に輝に尋ねるミンメイに通信を聞いていたフォックナーが、彼女を安心させるように諭していた。

『シェルターなら問題無い！ あそこなら水素爆弾が落ちようが隕石が落ちようが大丈夫だ！ 戦闘が終わつたらこの私が島まで送つて行きますよ…』

「その方が余計危険ですが先輩！ ？』

フォックナーの発言にすかさず輝が突つ込みを入れると、当のフォックナーは咳払いをして輝を睨み返していた。

『あ～輝～！ 何か言つたか！ ？』

『い～え！ 別に何も！ …… あ、先輩！ 第1軌道艦隊が見えて来ま

したよー。」

輝が話題を逸らすとすぐやじまで、ヤマトを始めとする第1軌道艦隊が姿を現していた。

『よーしー。ちょっとやらヤマトの連中に挨拶でもしどくか！……こちらDF-1マクロス航空隊所属、スカル大隊のロイ・フォツカーダーだ！ヤマトの連中、聞こえるか！』

第3話 スペース・フォールド（その6）（前書き）

輝と未沙の初遭遇です。

第3話 スペース・フォールド（その6）

同日 同時刻 ヤマト第1艦橋&アマ・マクロスメインブリッジ

その頃、ヤマト第1艦橋では接近していくマクロスの姿をメインパネルに映し出していた。

「いやあ～でかいよな～ヤマトもでかいと思つてたけど、いつやつて見るとマクロスもかなりでかいよな～！」

砲術班長の南部康雄がメインパネルを見ながら溜息をついていると、隣席の相原がマクロスからの通信をキヤツチしていた。

「艦長！マクロスのグローバル艦長から通信が入っています！パネルにチョンジします！」

相原が操作すると、メインパネルにはグローバルの姿が映し出されていた。

「お久しぶりですグローバル参謀次官……すいません艦長！」

古代が慌てて言い直すと、グローバルは苦笑しながら切り出していた。

『いや構わんよ古代君……何しろ参謀本部に長く居過ぎたおかげで現場に慣れないで無理もない……』では経験の長い君の指揮に従うつもりだ。よろしく頼む……』

「い、いえ……」じりじりとよろじくお願ひします！

この一人の会話を聞いていたマクロスメインブリッジのシャミーはキムにこいつそりと話し掛けていた。

「やつぱりいい古代艦長って格好いいわ～～ファンになっちゃいそ～～！」

「あんたねえ……こんな時に何言つてんのよ……」

「だつてえ～格好いいのは確かでしょ～？ いつその事ファンクラブ作っちゃおうかな？ 当然会長はこの私で決まり！」

「はいはい……勝手にすれば……」

そんな中、ヤマト第1艦橋にフォックナーからの通信が入つて來ていた。

『「はじめマクロス航空隊所属、元ヤマト艦載機科クルーのロイ・フォックナー少佐だ！ ヤマトクルーの諸君、元氣か！？』

ヤマトのメインパネルにはフォックナーの姿があつた。第1艦橋の一同は思わず呆然とした表情で彼を凝視していた。

『「よつ古代一相変わらずだな！ 元氣にしてたか！？」

「フォックナー、お前まだ現役の戦闘機乗りをしてるのか！？ 何処かの艦の艦長か教官でもやつてるのかと思つてたが…」

『「な～に、前にも言った事があるだろうが！ 僕は生涯一パイロットでやつて行くつもりだつてな……ところで話は変わるが… 古代、ゆうベユキちゃんと… シタのか！？」』

フォッカーの発言にヤマト第1艦橋一同は元より、マクロスメインブリッジの一回の表情は凍りついていた。中でも三人娘は顔を手で覆いながら叫び、グローバルは思わず椅子からずり落ち、クローディアは内心舌打ちをしていた。

ヤマト第1艦橋では、ユキがこれ以上無いくらい顔を真っ赤にしながら艦長席の古代を見ると、普段着用しない艦長帽を田深に被っていた。

この様子をフォッカーは自機のモニターで見ながら思っていた。

(図星だな古代の奴……相変わらず分かりやすい男だ……こにはとにかく話題を変えるか…)

『 そうだ、俺の部下を紹介しよう! 今度ウチの部隊に配属された新人だ! 』

『 初めまして! スカル大隊所属の一条輝少尉であります! 古代先輩の事はフォッカー先輩からよく聞いています! 』

輝が敬礼していると、ナビシートにいるミンメイが身を乗り出していた。

『 あ~っ、古代さん! お久しぶりです! お元気ですか~! 』

『 ミンメイ! ? 何で君がそこにいるんだ! ? 』

『 あははっ! それは~色々あります~』

『 ちょっとミンメイ! 何が“あはは”よ! あなたご両親に……』

ユキが身を乗り出して発言しようとした時、未沙が通信に割り込んで来た。

『 ひづら テルター！スカルリーダー並びにスカル11番機、着艦していないのはあなたの方だけです！早くアームド01に着艦して下さい！』

『 先輩、誰ですか？』おばさん？

『 お…おば…！？』

輝の発言に未沙が絶句していくとフォッカーが笑いながら説明していた。

『 マクロス航空管制オペレーターの早瀬未沙中尉さ…しかし、早瀬も輝から見ればただのおばさんか～！』

フォッカーの発言で、ヤマトとマクロスの両クルーは呆気にとられていた。未沙は咳払いをして指示を何とか出していた。

『 とにかく！無駄話してなじでさうせと着艦して下さい…！』

『 了解！指示頼りますよ、お・ば・さ・ん！』

『 了解！そちらも死なない程度に気をつけて…それから古代艦長！あなたも指揮官らしくして下さい！それでも栄光あるヤマトの艦長ですか！？』

「 ……了解しました、早瀬中尉…」

通信が切れると、古代はどうと疲れた表情で思つていた。

(はあ……疲れた……これだからお固い女って……あれでコキより年下つて信じられるかよ……)

第3話 スペース・フォールド（その6）（後書き）

輝の末沙に対する「おせさん」発言でした。でも、マクロスTV版放映当時にこの二人が愛し合ひの関係になると誰も思ってなかつたはずです。

第3話 スペース・フォールド（その7）

同日 10:25 衛星軌道上ゼントラーティ艦隊旗艦

「敵大型戦艦、惑星軌道上に展開している艦隊と間もなく合流する模様！」

ゼントラーティ艦隊旗艦のブリッジでは、観測員がブリタイに報告していた。

「いかが致しますかブリタイ司令？」

エキセドルが、先程から腕組みをしたまま前方のパネルを凝視しているブリタイに切り出していた。

「うむ……あの大型戦艦には興味がある……ただ潰すには勿体ない……よし……あの戦艦を手に入れよう……その前に邪魔な敵艦隊を叩く！全艦隊砲撃用意！ただし、戦艦には当てるな！」

ブリタイの指示の下、展開していた艦隊から砲撃が開始されていった。

同日 同時刻 ヤマト第1艦橋

「高熱源体多数接近！敵艦隊からの砲撃です！」

「キの報告に古代は即座に反応していた。

「全艦隊！急速回避！島、右舷下方に転舵！」

「了解！右舷下方に転舵！」

島の的確な操作で、ヤマトは何とか危機を乗り切ったものの、第1軌道艦隊の半数以上の艦が砲撃で撃沈されていた。

「本艦の被害状況は！？」

『左舷装甲板大破！』

『左舷パルスレーザー3番、6番大破！！』

「機関室！被害は無いか！？」

機関長席の山崎燐が機関室に連絡を入れると、即座に副長の徳川太助から連絡が入っていた。

『波動エンジンには異常ありません！』

真田はとくに出て来たデータをチェックしていた。

「うむ……不思議だな……あれだけの砲撃にも関わらず、マクロスには直撃弾がない……もしかしたら敵はマクロスを無傷で手に入れれるつもりらしい……」

同日 10:29 マクロスマインブリッジ

マクロスでも同様の報告がなされ、グローバルはしばらく考えた後命令を下していた。

「クローディア君！進路を南アタリア島に向けてくれ！島に着陸すると見せかけて上空で空間転移に入る！」

「空間転移……フォールドですか？！それも上空で…？まだテストもしていらないのに…？」

「やむを得ないだろ？…このままでは敵にやられるだけだ！」

「でもこのシステムは異星人のものですよ！我々にはまだ未知の部分が…」

「クローディア君！最初はみんなそうだ！かつてイスカンダルから提供された波動エンジンだつてそうだったじゃないかね！？」

「了解しました…」

押し問答の末、クローディアは渋々了解し、フォールドの準備に入つた。

「全艦非常態勢！本艦はこれよりフォールド航行に入る…テフォールド地点は月軌道周辺に設定します！」

「動力システムチェック！降下態勢に入る！」

「ヴァネッサ君！ヤマトの古代艦長に打電してくれ！“本艦はこれより島上空でフォールド航行に入る。それまでの護衛を頼む”と…」「了解！」

マクロスは再びその艦体を南アタリア島に向け降下を始め、やや遅れてヤマト率いる第1軌道艦隊も降下を開始した。

「フォールドシステム作動まで後3分！現在位置、島上空3000m！」

「島上空2000mでフォールドを開始する…」

やがてマクロスは目標地點である島上空2000m地點に近付きました。

「フォールド突入秒読み開始…5、4、3、2、1、ゼロ…フォールド突入！」

マクロスを中心に赤い光が広がりつつあった。それは南アタリア島を包み、上空を護衛していた第1軌道艦隊も包み込み、その光は全てを巻き込んだまま消え失せて行つた。

同日 10:40 衛星軌道上ゼントラーティ艦隊旗艦

マクロスがフォールドした様子は、遠く離れたゼントラーティ艦隊でもキャッチしていた。

「な、何だ…地上付近でフォールドするとは…」
「さあ…彼らは何を考えているやう…」
「とにかく奴らのデフォールド地點を割り出せー」
「了解しました！」

第3話 スペース・フォールド（その8）

同日 11：01 マクロスメインブリッジ

宇宙空間にそれは突然現れた。フォールドを終了したマクロス、南アタリア島、第1軌道艦隊がそつくりそのまま出現していたのであつた。

マクロスメインブリッジでは、一時的に気を失っていたクルーがようやく目覚めていた。

「ゼ、全員無事か…？」

「はい…何とか…」

グローバルが未沙に尋ねると、彼女はふらつきつつ前方に目をやるとそこにはいるはずの無い第1軌道艦隊が姿を見せていた。

「艦長！ 前方に第1軌道艦隊が…おそらくフォールドの巻き添えになつたと思われます！」

「何だと…？ そんな馬鹿な…？」

グローバルが信じられないといった表情で前方を凝視していると、ヴァネッサが報告を入れていた。

「艦長！ 本艦下方に物体が…」

「当然だろ…ここには月面基地上空だ…」

「いえ…それよりも小さな物で…とにかくパネルに投影します…」

メインパネルに映し出されていたのは南アタリア島…それも周囲を

凍りついた海水が浮遊していた。誰が見てもマクロスのフォールドが全てを巻き添えにしたのは明らかであった。

「それにしてもこんな事になるとは……連邦軍本部とは連絡はついたのかねシャミー君？」

「何度も呼びかけてはいるんですが繋がらないんですぅ……」

「通信機器の故障ではないのかね？」

「いえ……第1軌道艦隊の各艦とは連絡がついています……」

グローバルとシャミーの会話にキムも加わり現状報告していくと、ヴァネッサが信じられない表情で加わっていた。

「あの……現在位置が判明したんですけど……」

「それで……今の位置は！？」

「それが……バーナード星系とアルファ星系のほぼ中間地点かと……」

「ええ～！？ そんなあ～」

「だからフォールドなんて……」

「艦長！～」

シャミー、クローディア、キム、未沙が口々に叫びとグローバルは一同を制していた。

「まあ待ちなさい。ここまで来れたんだ、もう一度フォールドすれば必ず帰れるはずだ……」

その時、艦長席のインター・ホンが鳴り響きグローバルが出てしづらか話していたが、やがて気落ちした様子で受話器を下ろしていた。

「機関室からだつたのだが……フォールドシステムが消滅したそうだ

…おまけにメインエンジンの出力が上がらんそつだ…

「や、そんなあ～」

「消滅つて…艦長…」

シャミーとキムが次々叫び声を上げると、未沙がそれを制していた。

「キムにシャミー、まだ望みはあるわー・マクロスがフォールド出来なくとも第1軌道艦隊はワープ出来るはず…だからあの人達にワープしてもらつて地球にある予備のシステムを取りに行つて貰えれば…」

未沙がそこまで言った時、ヤマトから通信が入つていた。グローバルが一連の出来事を古代に話していたものの、続いて彼が衝撃的な発言をしていた。

『実は……ヤマトを含めた第1軌道艦隊の波動エンジンの出力が上がらないんです…その原因が不明でワープ出来ず…切り札の波動砲も発射不能で……』

「そ、そんなの嘘でしょ…」

「それじゃ地球に…」

「帰れない…」

三人娘が口々に叫ぶのを聞きながらグローバルは溜息をつきつつ咳いていた。

「長い旅になりそうだな…」

第3話 スペース・フォールド（その8）（後書き）

フォールド失敗の巻き添えを喰らい、ワープも出来ず切り札の波動砲も撃てなくなつたヤマト……

という設定にしました。

一度くらい伝家の宝刀を使えなくとも構わないかと……

できればこの状態でラストまでお送りします！

古代進

「それだけは勘弁してくれ~」

第4話 リンボス・エクスプレス（その1）

A · D · 2205 6 · 3 12 · 46 地球衛星軌道上ブリタ
イ艦

地球衛星軌道上では、ブリタイ艦隊が今だ居座りを続けていた。近くには監視を続けている地球連邦艦隊が航行し、それを横目に見ながらブリタイは南アタリア島で繰り広げられた戦闘映像をチェックしていた。

「これは……この星の住人はマイクローンではないか！？」

「はい、そのようですね……どうやら我々は来てはならない場所にたどり着いたようです……」

「それはどう言つ事だ……？」

「“手を出してはならぬ場所には近付くな、手を触れたる者は必ず滅びる”と言い伝えが古くからあります。我々はもつこの星には関わらない方がよろしいかと……今後はあの戦艦だけにターゲットを絞るのがよろしいかと……」

エキセドルの忠告をブリタイは受け入れる他なかつた。下手に手を出せば自分達が滅びると思ったからであつた。

「とにかく、例の戦艦だけを追撃した方が良さそうだな……奴らのデフォールド地点は分かつたのか？！」

「はい、ここから約5光年離れた星系にいるものと思われます！」「よろしい！全艦隊直ちにフォールド開始せよ！」

ブリタイの指揮の下、ゼントラーディ艦隊はすぐさまフォールドして行った。

同日 12:51 地球衛星軌道上旗艦ブルーノアブリッジ

「敵艦隊、全艦フォールドした模様！」

旗艦ブルーノアブリッジでは、レーダー要員が早瀬提督に伝えていた。地球本星に手も出さずに早々に姿を消した謎の艦隊の行動に違和感を感じつつ、早瀬提督は内心安堵の表情を浮かべていた。

「マクロスの消息は分からぬのか？」

「はい……それに第1軌道艦隊と南アタリア島とも連絡がつきません……」

通信員の報告に早瀬提督は深い溜息をついていた。マクロスに乗っている娘の未沙の事を何よりも心配していた。

（こんな事になるのならマクロスに配属せぬのではなかつた…未沙…とにかく無事でいてくれ……）

第4話 リンボス・エクスプレス（その一）（後書き）

次回、雑誌「マクロスエース」に連載中のリメイク版マクロスに登場している技術士官のジーナ・バルトロウ少佐が登場！真田さんと一緒に何かやらかすかも！？

そしてあの名せりふが出てきます！

第4話 リンボス・エクスプレス（その2）

A · D · 2 2 0 5 6 · 3 1 7 · 1 4

マクロス艦内大会議室

太陽系から5光年離れたその場所では、マクロスを中心にしてヤマト率いる第1軌道艦隊が南アタリア島の残骸の回収作業を行っていた。また、島内にあつたシェルターに避難していた延べ8万人もの民間人もマクロスに収容されており、同艦と第1軌道艦隊の将兵と合わせると何と10万人規模の大所帯となっていた。

将兵はともかく、民間人の扱いをどうするか

マクロス艦内の大会議室では第1軌道艦隊各艦の艦長、並びに各セクションのスタッフが議論を交わしていた。

中でも、進宙式典に出席してフォールドの巻き添えになつた揚羽コンツェルン会長の揚羽蝶人は、強硬に地球への帰還を主張していた。

「……であるから、先程から何度も申し上げるように、一刻も早く地球に帰らなければならんのだ！お前達は何故それが分からんのだ！」

上から目線の揚羽会長の発言に、各艦の艦長は辟易としていた。

現場の苦労も知らないエリートがその場を搔き乱すのは止めるべきだと進言しようものなら、かえつて彼の怒りを買つため誰も発言を控えていた。

そんな中、今まで会議の席で端末を操作していた真田が沈黙を破り、

揚羽会長に切り出していた。

「会長、今すぐ地球に帰り着きたいお気持ちは分かりますが、ここはとにかく一番近いアルファ星系のリンボスに進路を取りましょう。ここからなら一ヶ月半で到達出来ます。そこでエンジンの修復をすれば地球には一ヶ月目に帰り着きますがね…」

真田の発言に揚羽会長を除く一同が感嘆の声を上げていた。だが揚羽会長は納得せず、反論に転じていた。

「……と言つ事は、あの企業に修復作業を依頼するとでも言つ事がね？我社の最大のライバルである“アナハイム・エレクトロニクス”に……冗談ではない！敵に塩を送るとしても言つのか！？我社が心血を注いで建造したこの艦を他社に修復をせるとでも言つのかね！？グローバル艦長、君の意見はどうかね！？」

揚羽会長に意見を聞かれたグローバルは既に態度を決めていたらしく、即座に切り出していた。

「私としては、アナハイムに頼つても構わないと思いますがね。この際自社がどうの、他社がどうのと言つてはいる場合ではありません。利用出来る物はしたほうがいいと私は思いますが？」

「私もグローバル君の意見に賛成だな…」

そう発言したのは、やはり進宙式典に出席し揚羽会長同様騒ぎに巻き込まれた連邦軍司令長官の藤堂平九郎であった。

「……とにかく、議論していくは何も始まらん…」これは一致団結しなければならんのですよ会長…

「……分かった……君らの好きにすればいい…」

ようやく揚羽会長の了解が得られると、藤堂は真田に切り出していた。

「早速だが真田君、アナハイム社に連絡をとつてくれるかね？」

「大丈夫です長官！ 実はこんな事もあろうかと、先程アナハイムには連絡をしておきました！」

この真田の発言を聞いていた古代は内心ガツツポーズをとりながら思っていた。

（さすが真田さんだ……いつも一步先を見据えている……これなら何とかなりそうだ……）

第4話 リンボス・エクスプレス（その3）

同日 18:28 マクロス艦内技術開発部

その頃、マクロス艦内にある技術開発部では一人の女性技術士官が目前のパネルに映し出されたマクロスの全体図を前にして何かを計算していた。

そこに会議を終えたグローバル、古代、真田の三人がやって来た。

「どうかねバルトロウ技師長、主砲は使えそうかね？」

グローバルに尋ねられたその女性技術士官…ジーナ・バルトロウ少佐は三人に敬礼すると、パネルに目をやりながら説明を始めた。

「はい…結論から申し上げると現状のままでは発射は不可能です…これを見て頂くと分かりますが、メインエンジンと主砲発射システムの間を特殊金属のパイプがフォールドシステムを介して繋がつていた訳ですが…」

「そのフォールドシステムの消滅で主砲が撃てなくなつた…と言う事ですね。」

ジーナの発言を古代が繋ぐと、彼女は頷きさらに続けた。

「ええ…これ程大きなエネルギーパイプの予備は艦内工場でも作れません…ですが、マクロスの船体がいくつものブロック構造で構成されているので、これを利用します…」

ジーナがパネルに映し出していたのは、各ブロックを組み替え、戦

艦の形から巨大な人型へと変わっていく映像であった。古代はこの映像を見て思わず口に出していた。

「何かこれ……大昔のロボットアニメに出て来そうですね……」

「古代艦長がそう思うのも無理ありませんわ……あれこれ動かしたらまたまこうなつただけでして……今後はこの変型を“トランスフォーメーション”と名付ける事にしました。」

「しかし……主砲を撃つ度にこれを行うのはいいが……これから建設する市街地に多大な被害が及びのではないかね？」

心配顔のグローバルに、ジーナは余裕の表情で答えていた。

「大丈夫です！多分こんなこともあるんじゃないかと思つて、市街地の建設は被害を少しでも出さないようにと企画しています！あ、それと単に主砲と言うのはつまらないので、勝手に“マクロス・キヤノン”とネーミングしました！」

「ま、まあ……君が名付けたのならそれでも構わんよ……」

グローバルが苦笑しながら答えていると、古代の携帯電話が鳴り響き、しばらく話した後血相を変えて走り出していた。

「おい古代、どうした！？」

「今ユキからだつたんですが、避難民の中にユキのご両親がいたんですね！これから会いに行つてきますんで後の事はよろしくお願ひします！」

第4話 リンボス・エクスプレス（その4）

同日 18:40 マクロス艦内

「あ、古代君…」

大勢の避難民で溢れ返つてゐるマクロス艦内の中で、ユキはよつやくたゞり着いた古代に手を振つていた。

「ユキ、どうして船の『両親がここに？』

「私達マクロスのフォールドに巻き添えになつたこと、一応ママ達に連絡しておこうと思つてダメ元でケータイからメールしたの…そうしたらすぐ返事が返つて来て“この艦に乗つてる”って…」

二人が話してゐるそばから、ユキの両親…森 浩一と晴美が近付いて來た。

「おや進君、君もこの間に巻き込まれたのかね？」

「は…僕とユキはヤマトに乗つていて、この艦のフォールドに巻き込まれてしまつて…と言つてお一人がここに…？」

古代の間に浩一が答えるとすると、晴美が凄まじい勢いで話し始めていた。

「やうなのー！パパの退職記念に世界一周しようつたことで一ヶ月前から世界中見て回つて！パリにローマ、ロンドン、ニューヨーク…それで最後の締めに南アタリア島のマクロスを一度でいいから見た

いと思つて立ち寄つたのよ！以前から宇宙戦艦を間近に見てみたくてユキに何度もヤマトを見せてくれつて言つてるのに、この娘つたら全然……」

「ちょ、ちょっと待つてママ！前から言つてるでしょ！？ヤマトを始めとする艦船は原則として一般公開してないの！マクロスの場合は、たまたまああいう状態だつたから仕方ないんだけど……それよりもさつきの旅行の件、私全然聞いてなかつたんだけど？」

「あら？…そだつたかしら？私はあなた達の家にメールしたはずだけど…もしかして家のパソコン、見てないの？」

「あ…もしかしたら見てないかも…」の所残業続きで帰りが遅くて、帰つてからはすぐ寝てたし、それに古代君もずっと宇宙にいたから…」

ユキは自分の行動を棚に上げ、母親の晴美を責めた事を反省し顔が赤くなつていた。

「ちよづどや！」に、ミンメイを連れたフォックナーと輝がその場にやつて來た。

「古代、じいにいたのか…わつも真田さんに聞いたらいじだつて言われたんでな……」

フォックナーが言つと、後ろからミンメイが申し訳なさそうな表情で古代とユキに切り出していた。

「古代さん、ユキさん…心配かけてすみませんでした…昨日、横浜の私の実家に行つたそうで…」

「ああ…でも良かつたよ無事でいてくれて…でもまさか君が家出す

るとは思つても見なかつたよ……」

「ホント……でもあなたのお母様なんか涙ボロボロじまじらじたわ
よ……」

コキの発言に、ミンメイの目から涙がこぼれていた。それを見ていた古代は自分のハンカチを渡しながら呟いていた。

「……とにかく、艦隊が無事地球に帰つたら、一度横浜の家に顔を出した方がいい……その時は俺達もついて行くから……」

第4話 リンボス・エクスプレス（その4）（後書き）

ユキの両親、ヤマトパートナーで一度出て来ましたが、特に第10話で母親が何枚ものお見合い写真を見せて、ユキを困らせていたのが印象的でした。

ヤマトが地球に帰還した後、ユキが古代の事をじつじつと紹介し婚約まで漕ぎ付けたか…あの強烈な性格の母親をじつじつと説得したか、一度本編で見たかった…

第4話 リンボス・エクスプレス（その5）

同日 21:02 ヤマト艦長室

ヤマト艦長室で、古代は航海日誌を記入しつつ、今日一日で起きた出来事に想いをはせていた。

（……今日ほど色々あった一日は無かった…今朝自分の家で目覚めたら、夜にはバーナード星系とアルファ星系の中間地点…おまけに延べ10万人もの人々がいる…この人々の命が俺の肩にのしかかると思うと…）

そう考へていると、目に見えないプレッシャーが艦長室の窓外から押し寄せて来るような感じであった。古代は思わず身震いし、デスクの上に置いてあるティー・ポットからレモンティーをカップに注ぎ、一息に飲み干していた。これは先程ユキが艦内食堂から持参したものだつたが、一人で考えたいからとユキを帰していた。

そのティー・ポットを見つめながら、再び物想いにふけっていた。

（以前の航海では、ヤマト単艦だったからヤマトクルーの事だけを考えていれば良かった…だが、今回の航海は10万人もの人々がいる…生半可な気持ちだけでは航海の成功はない…ここは僕が全てを掛けてやるしかない…あのイスカンダル遠征時の沖田さんの気持ちが良く分かる気がするよ…とにかく、誰かに頼つていいのうでは駄目だ…ここは自分の力だけでやって行こう…）

第4話 リンボス・エクスプレス（その5）（後書き）

古代のレモンティー好きは、他の一次小説でも有名なのでここでも取り上げました。それよりも、ユキの煎れるコーヒーは、完結編以降もマズかったのではないかと…復活編での別居の理由はひょっとしてそれもあつたりして（笑）

次回、やっとガンダムシリーズのキャラ登場です！

番外編（その3） 世界観設定 ガンダムシリーズ編（前書き）

ガンダムシリーズ編突入前の予備知識（？）です。

番外編（その3） 世界観設定 ガンダムシリーズ編

1 次回からの舞台、アルファ星系第4惑星リンボス……ここに宇宙世紀ガンダムシリーズのキャラが揃っています。

2 出て来る作品は次の通り。

機動戦士ガンダム0080

ポケットの中の戦争

機動戦士ガンダム0083

スター・ダストメモリー

機動戦士ガンダム

機動戦士Ζガンダム

機動戦士ΖΖΖ

逆襲のシャア

……の5作品ですが、多分増えるかも？
(ちなみにシャアはクワトロ・バジーナとしてロンド・ベルにいます。)

3 この部隊はラー・カイラム、ネエル・アーガマ、アルビオンを中心とした艦隊です。
(ネエル・アーガマの艦長はヘンケンさんにしました。)

4 この部隊に敵対する勢力はネオ・ジオン。ただし単なるテロリストでかつてのジオン軍の栄光は微塵もなし！
(ティターンズも出ます)

5 ガンダムシリーズの艦船にも波動エンジンを搭載しているので、ワープは可能。ただし波動砲は装備してません。（理由については後ほど劇中で）

番外編（その3） 世界観設定 ガンダムシリーズ編（後書き）

うだうだ書いて来たけど、細かい所は劇中で後付けします。

次回、「ZZ」のジユドー達ガンダムチーム総登場！

第5話 シャンクグリラ・チルドレン（その1）

アルファ星系第4惑星リンボス……ここは21世紀半ばに発見された、太陽系に最も近い人類が生存に適した惑星である。

当時既に100億の人口を抱えていた地球は、ようやく全世界の統一を果たし、ある程度の恒星間航行の技術を確立していた。

21世紀後半に人類の移住計画が進み、22世紀初頭には自治政府が発足、全ては順調に進んでいたが、22世紀後半に地球がガミラスからの攻撃を受け始めた頃から事態は急変していった。

ガミラスの遊星爆弾攻撃による放射能の汚染が進み、地下都市を築き防戦に追い込まれつつあつた地球本星をよそに、内戦が起きていた。

地球本星に残つた人類を受け入れるべく、建造を開始したスペースコロニー群を巡つて紛争が多発していた。

当初、紛争を治めるべく反対勢力の中の穩健派代表のジオン・ダイクンの元、話し合いを進めている最中に何者かに暗殺され、後を引き継いだデギン・ザビが突如コロニーの独立を宣言、ジオン公国を名乗り更なる内戦へとエスカレートしていった。

ジオン軍は当初、人型機動兵器、モビルスーツを開発し、電撃作戦で戦況を優位に進めていた。

一方の連邦軍駐留部隊も同じ人型機動兵器を開発して対抗し、独立

機動艦隊ロンド・ベルの活躍と反撃に転じた連邦軍の活躍でジオン公国は敗北し、首謀者のザビ家は全員死亡して戦闘は終結。だが一部の残党は各地でゲリラ戦を起こして自治政府側を翻弄し、2205年現在でも今だ終息の兆しは見られてはいない。

第5話 シャンケリラ・チルドレン（やのー）（後書き）

この説明は、15セガンダムのナレーター永井一郎さん風で読んで下さい。（笑）

第5話 シャンクリラ・チルドレン（その2）

A · D · 2205 8 · 17 11 · 02 サイド1 シャングリラ「ロニー

「畜生！ネオ・ジオンの奴ら、何だつてこんな「ロニー」に攻め込むんだ！？」

ジャンク屋を嘗むジユドー・アーシタは、次々侵攻して来るネオ・ジオンのMS部隊に怒りを表わしていた。

彼はかつて仲間と共にロンド・ベルに参加してΖΖガンダムを駆り、歴戦の英雄アムロ・レイや、ティターンズからガンダムMK-を奪取したカミーコ・ビダンと共に戦っていた。

「一体連邦軍は何やつてんだ！？入り口にはMS隊がいたはず何だけど！？」

ジユドーの横でジャンク屋仲間のビーチヤ・オレーグがいらっしゃながら呟くと、ジユドーはある決断を口にしていた。

「ひつなつたら俺が戦うしかないか…」

「でも、戦うつたつてZZはないんだろ…どーやつて戦うんだよ…」

…

同じジャンク屋仲間のイーノ・アツバーブが不安気に呟くと、ジユドーは平然とした表情で返していた。

「今、エルとモンドがジャンク屋仲間の所に行つている…もうすぐ戻つて来るはずだ…」

言つた側からMSを積み込んだトレーラーが到着し、エル・ビアンノとモンド・アガケがトレーラーから出て来て、後部に掛けられたシートを取り去つた。

「ジユドー、あんたから頼まれたモン持つて來たよ！」

「何だよこれ、ジム・カスタムつて…おまけにガンタンクにザクが一機つて…せめてジェガンの中古でもあれば…」

「つべこべ言わない！これでも状態のいい奴持つて來たんだから！とにかくジユドーはジム・カスタムに乗つて！」

「分かつた！やるつきやねーな！モンドお前はガンタンク、ビーチヤとエールはザク にスタンバつてくれ！」

「ジユドー……何かその言い方、ブライトさんみたいなんだけど…」

モンドの突つ込みをかわしながらジユドーがジム・カスタムに乗り込もうとした時、妹のリイナが駆け込んで來た。

「お兄ちゃん！何でまた戦わなければならぬの！？」

「リイナ、危険だから下がつてろ！イーノ、リイナを連れてシェルターへ行け！」

「分かつた！氣をつけてな！」

イーノが嫌がるリイナを連れてその場所を離れると、ジユドーは口ピットの中で気合いを入れていた。

「さて…そんじやいつものやつりますか…ジユドー・アーシタ、ジム・カスタム行きまーす！」

第5話 シャンクレラ・チルドレン（その3）

同日 11：19 ラー・カイラムブリッジ

その頃、サイドー空域を航行中のロンド・ベル艦隊の元にシャングリラ「ロー」からの救援要請を受けていた。

「艦長ー・シャングリラ「ロー」からの救援要請ですー。」

ロンド・ベル旗艦ラー・カイラムブリッジでは、通信員が緊迫した表情で艦長のブライト・ノアに報告をしていた。

「よし、全艦戦闘配備！各MS隊は出撃準備！急げよー。」

ブライトが命令を下すと、MSアッキにいるアストナージ・メドソが報告を入れていた。

「艦長、もう少し時間を頂けますか？MS隊の損傷が激しくて整備が追いつません！」

「とにかく早くしてくれー！その間、他の部隊を先行させるー。」

この所、ネオ・ジオンの攻勢は活発化し、そのお陰でMS部隊の損傷率は増加しつつあった。

「アルビオンより入電！バニング隊並びにモンシア隊、間もなく出撃完了との事です！」

「分かった！一人によろしく頼むと伝えてくれー！」

同日 11:25 アルビオンミーティング

強襲揚陸艦アルビオンのミーティングでは、既に各部が出撃準備を終えつつあった。

中でも、ベルナルド・モンシアは愛機ジエガンのロクスピットの中でぶつぶつ文句を垂れ流していた。

「くっそ～ウラキの奴め～…さつき一ナさんに投げキッス何かされやがって…今に見えてるよ～あいつのガンダムも一ナさんも全部俺の物にしてやらあ～！」

『何文句垂れてんだい、このスケベ親父～さつたと由やがれ～』

整備班キャップのモーラ・バシットがモニター越しに叫ぶと、モンシアはいつもの如くやり返していた。

「つぬせーつ」のトカ女！言われなくても行かせて貰つぜえ～モンシア機、行くぜ～～～～～！」

第5話 シャンケリラ・チルドレン（やのう）（後書き）

モンシア中尉、相変わらずのテンション……。ガンダムに対するこだわりはこの作品でも見せてくれるはずです。

次回、シーマ様の出番です。30歳過ぎますが大丈夫?

シーマ・ガラハウ

「おこ! そんな馬鹿な事言つたら…………」ロード一落としがちやつよ

……」

第5話 シャングリラ・チルドレン（その4）

同日 11：32 シャングリラコロニー内

シャングリラコロニー内では、ネオ・ジオン軍のMS部隊が破壊の限りをつくしていた。そんな中、愛機ガーベラ・テトラを駆つていたシーマ・ガラハウが、その様子を満足気に見ながら眩っていた。

「……全くここに連中と来たら軟弱だねえ……全然手応えがありゃしない……」

『シーマ様！』この陥落は時間の問題ですぜー…』

部下の一人が楽観的原因のを聞くと、シーマは苦笑しながら釘を刺していた。

「……でも油断するなよ……戦いつてのは何が起きるか分からんからねえ……何処かの馬鹿共が現れるかも知れないから、用心に越した……つて早速現れたよ……しかも旧式の機体で……」

シーマ達の目前にジム・カスタムを先頭に、ザクが一機とガンタンクが行く手を阻んでいた。しかもそのジム・カスタムから通信が入っていた。

『やいーそこのネオ・ジオンの連中ー！これ以上好き勝手させねーぞー！』の声と共にジュドーの姿がガーベラ・テトラ内のモニターに映し出されていた。

「フッ……誰かと思ったらロンド・ベルの坊やじゃないか……あんたよ

くそんな旧式の機体でこの私に対抗出来るねえ…」

『何だよ…シーマのおばさんじゃないか…まだ現役やつてたのかよ…あ、嫁ぎ先が無いからこんな事やつてんだ!』

ジユドーのその発言にシーマは思わずブチ切れ、ビームライフルの照準をジム・カスタムの後方にあるガンタンクに合わせながら叫んでいた。

「うわあこねー良い子はさつと寝てしまいなー?」

同日 同時刻 ジム・カスタムコクピット

まばゆい閃光がした後、ジユドーが目にしたもののはガンタンクのキヤタピラが破壊され、横向きに倒されている姿だった。

「モンド大丈夫か!…とにかくお前達は下がつてろー!」
「は俺が引き受けろー!」

そうは言つたものの、たつた一機のジム・カスタムで延べ10機以上の敵MSを相手にするには、いたさか無理があつた。

(……やつぱジム・カスタムじゃ無理かも…これがここならハイメガキヤノンで一発逆転なのに…)

ジユドーがそう考えていると、突然敵のMSギラ・ドーガが爆発を起こしていた。

「な、何だあ…敵のMSが爆発したぞ…一体どうして…!?」

ジユドーが呆然としていると、上空をサブフライトシステムに搭乗しているMii群が近付きつつあった。

『おい！そこのおんぼろジム・カスタムに乗ってる奴下がれ！後はこのモンシア様に任せとけ！不埒な奴らは成敗してやらあ～～～～～』

『……………中尉……………時代劇の見過ぎです、……………』

『ほつとけアーデル…………まあそんな訳でそここのジム・カスタム、聞こえてるか！？』

「…………聞こえますよベイトさん…………モンシア隊の皆さんって相変わらずお笑いトリオなんですね…………」

『な……何だあ～～ジユドーなのかあ～～お前さん何でそんなもん乗つてんだ！？』

「詳しい事は後～今はとにかく、シーマのおばさん達を…………つつの間にいなくなつたんだ……？」

第5話 シャンクリラ・チルドレン（その5）

同日 12:01 シャングリラ・クロニー宇宙港

クロニー宇宙港で、ジユドー達はブライト以下ロンド・ベル一行と再会を果たしていた。

「とにかくお前達が無事で良かった。まさか廃棄寸前のMSを持ち出しつて抵抗しているとは思わなかつたぞ……」

「まあねえ～…これもジャンク屋やつていたおかげですよ～…」

ブライトの問い掛けにモンドが答えていた。するとジユドーがある疑問を投げ掛けていた。

「でもブライトさん、何でこんなクロニーにネオ・ジオンの連中が攻めて来るんだ？」

「分からん…とにかく連中はこゝだけではなく、他のクロニーまで攻撃していいるんだ…我々は連日その対応に追われているんだ…」

「そりゃかりではない…最近はティターンズの連中も何かを画策しているとの情報もある…」

ブライトの発言の後、クワトロ・バジー・ナモ憂鬱な表情で呟くと、ジユドーが切り出していた。

「……ブライトさん、俺達をもう一度ロンド・ベルに参加させてくれないか…さつきの戦いとクワトロさんの言った事が妙に引っ掛かるんだ…もしかしたら近いうちに大きな戦いが起きる気がするんだ…頼むよ…」

今にも土下座しかねる勢いのジユードー元、ブライトは困惑していた。

「それはいいんだが… 軍からは給料は出ないぞ…」

「金の問題じやない！ これは俺達…いや、地球圏全体に関わる事なんだぜ！」

ジユードーの発言に、ブライトがなおも困惑していると、アムロが助け舟を出していた。

「艦長、彼らを“善意の協力者”として迎え入れるのははどうだらう？ それに前回の戦いでは、彼らの力があつたから最悪の結果にならずに済んだんだ…」

「まあ確かにな…… 分かった、君達を快く迎え入れる… ただし、これだけは言つておく！ 何をしても構わんが、最低限の規律だけは守つてくれ！」

ブライトのその決断にジユードー達は小躍りして喜んでいた。中でもビーチャとモンドのはしゃぎ方は凄い勢いであった。

「イヤッホー…さつすがブライトさん…話が分かる…」

「そうそう…なんせ俺達も二コードタイプだからな！ いい仕事やりまつせー！」

「二コードタイプだからってあまり甘く見ない方がいいぞ、そんな考えだと命を落としかねないんだ！」

アムロの一喝で、ビーチャとモンドは一瞬のうちに静まり返っていた。それを横目にしながら、ブライトはついて来たりイナに問い合わせていた。

「リイナ、君はどうする?」

「私もお兄ちゃん達について行きますよブライトさん!」

「お前は駄目だ!学校があるだろ?がー?」

リイナの意見にジユードーが反対すると、クリスチーナ・マッケンジーが逆に問い合わせていた。

「ジユードー君、学校の勉強なんていつでも出来るわ…それに危険な口口ニーにいるよりはロンド・ベルにいた方が安心でしょ?」

「そりゃまあ…クリスさんの言つ通りかも……すいませんでした…俺が間違つてました。リイナ「ゴメンな…」

「心配してくれてありがとうお兄ちゃん……それよりブライトさん、相変わらずロンド・ベルって人手不足らしいから家事全般、手伝います!」

「ああ、そうしてくれると助かるよ…」

一同が話していると、クワトロの携帯電話が鳴り響き、彼が一言一言話すとブライトに切り出していた。

「艦長、悪いが用事が出来た…しばらく出掛けれるが構わないかね?」「ああ、当分連中も攻撃して来ないようだから、ゆっくりして構わん…」

ブライトの一言でクワトロはそそくかとその場を後にしていた。それを見ながらジユードーは思っていた。

(あの人って相変わらず謎が多いよな……)

第5話 シャングリラ・チルドレン（その6）

同日 13:28 シャングリラコロニー 内市街地

クワトロ・バジーナ……彼の正体は、亡くなつたジオン・ダイクンの息子キヤスバル・レム・ダイクンであり、かつてジオン公国軍に所属していた“赤い彗星”シャア・アズナブルでもあつた。

彼はザビ家に父を殺された恨みからシャアの名前を名乗つてジオン軍に入り、復讐の機会を狙いそれを達成した後は再び名前を変えて地球本星に潜伏していた。

潜伏中は様々な情報収集に当たつていたが、やがて襲い掛かるであろう巨大異星人の情報を得ると、彼は地球圏の将来を真剣に考え始め、再びアルファ星系へと舞い戻りロンド・ベルに参加していたのであつた。

市街地にあるカフェテリアに到着したクワトロは、一足先に来ていた一人の男に声を掛けられていた。

「お久しぶりですシャア大佐…」

「…………キグナン…久しぶりなのはいいが今の私はクワトロ・バジーナだ…シャアと言う名前は既に捨てた…」

「私にとつては、今だにあなたはシャア大佐なのです…」

「…………まあいい…それで例の件は進めてくれたかね…?」

「はい……現在アナハイムで建造中のアムロ少佐の新型ガンダムに使用される、サイコフレームの技術をジオニック社から横流しておきました……」

「そうか……これでアムロ君もやっとまともな機体に乗れるな……思えばリ・ガズイ何て安っぽい機体は彼には合わんよ……後は私のサザビーをどうやって手に入れるかだな……」

「その件についてはもう少し時間を頂ければ……それに……」

キグナンが言つべきかどうか迷つていると、クワトロが先に切り出していた。

「何だ……他にも何かあるのか……？」

「はい……実は、地球本星の事なんですが……“奴ら”がついに現れたそうです……」

「何だつて……それは本当なのか！？」

キグナンの告白にクワトロは強い衝撃を受けていた。彼の危惧していた事が、ついに現実になつていた。

「恐らく15年前に落下して来た巨大戦艦の持ち主か、その交戦相手だと思われます……“奴ら”的攻撃を受けて、その巨大戦艦 SD F-1マクロスと歴戦の名艦、宇宙戦艦ヤマトが行方不明だそうです……」

「あのヤマトが行方不明とは……」

クワトロは思わず絶句していた。地球本星で何度も見掛けたヤマトが行方不明とはにわかに信じられなかつた。

「確か艦長は古代進大佐だつたな……」

「ええ……亡くなられた沖田提督の愛弟子だそうです……彼をご存知で

すか？」

「いや、面識はない……一度会つて今の現状をどうすべきか聞いてみたかったのだが……いや……近いうちに彼に会えそうな予感がする……」

クワトロは一ユータイプの勘で、近い将来古代進に会えそうな気になっていた。事実、ヤマトを旗艦とする第1軌道艦隊はアルファ星系最外縁部までたどり着きつた……

第5話 シャンケリラ・チルドレン（その6）（後書き）

前話でジユドーが言つた“地球圏”は本来なら地球近辺を指しますが、今作品では太陽系とアルファ星系をまとめて“地球圏”と設定しました。

次回、アムロが ガンダムをついに入手！ チェーン・アギ初登場ですが、「逆シャア」を初めて見た時、チェーンのスカートの短さにドキドキしていましたが、単なるキュロットだったのでひと安心と言つか…（男つて罪なもんです…）

第6話 アルファ星系波高し！？（その1）

A · D · 2205 8 · 21 16 · 11 グラナダアナハイム
技術開発部

「アムロ少佐あ～こつちで～す！」

リンボスの衛星グラナダにあるアナハイム・エレクトロニクス本社で、ラー・カイラム所属の技術士官チヨーン・アギが、たった今到着したばかりのアムロに手を振っていた。

「やあチヨーン、元気そうじゃないか！」

「ええ、おかげ様で…それより聞いて下さいよーここの人達、私がロンド・ベルの所属だって信用してくれなくて…仕方ないから二ナさんからの紹介状を見せたら、やっと信用してくれて…困ったもんです！」

チヨーンが少し困った表情で話すと、アムロが彼女の肩を抱き寄せて呟いた。

「それだけ君がチャーミング過ぎるからや…」

「まあっ！少佐ったら人を褒めるのがお上手なんですね…ウフフッ！」

チヨーンが顔を赤くしながら答えていると、アナハイムの技術官であるオクトバー・サランがやつて来て、アムロと握手を交わしていた。

「お久しぶりですアムロ少佐！」

「オクトバーさんも元気そうで……ところで ガンダムの方はどうですか？」

「ええ、後は動かすだけですが、ご覧になりますか？」

オクトバーの案内で、一人は ガンダムが置いてある整備フロアへと向かった。

そこには、整備も済み後は動かす状態の ガンダムがその姿を見せていた。

「…………少佐からの提案のあつたサイコミコシステムなんですが、実はある所から最新の技術が提供されまして、それを駆動系に組み込むことにしたんです……」

アムロはオクトバーから手渡された資料に目を通しながら、彼にその出所を尋ねてみたものの、オクトバーは何も知らないと言つよう に首を横に振つていた。

するとそこに、一枚の電文を手にした一人のアナハイム社員が一同 の側にやつて来て、それをアムロに手渡していた。

「…………ロンド・ベルへの帰還命令だ……第6惑星空域で地球本星第1軌道艦隊と巨大異星人が交戦中だそうだ……チエーン！直ちに帰還する！マスドライバーの準備をしてくれ、 ガンダムをそれにセ ットする…」

「了解！」

アムロの命令にチエーンが動き出しそうとした時、オクトバーが異を唱えた。

「そんな無茶です！テストもしていないのにいきなり実戦投入だなんて！おまけに主兵装である、フィン・ファンネルがまだ…」
「ライフルとサーベルがあれば何とかなる…フィン・ファンネルは後で届けてくれればいい…」

第6話 アルファ星系波高しー？（その一）（後書き）

リンボスの衛星をガンダムシリーズでお馴染みの、グラナダと名付けました。他にもリンボスの地名を多少アレンジして出す予定ですが、それはまた別の話…

次回、第1軌道艦隊がアルファ星系第6惑星空域にまでたどり着きましたが、彼らの苦難はまだまだ続きます…

第6話 アルファ星系波高し！？（その2）

地球を離れてから一ヶ月が過ぎ、第一軌道艦隊はようやくアルファ星系第6惑星空域に差し掛かっていた。その間にも、ゼントラーディ軍による様子見のような攻撃はあったものの、比較的被害は最小限に留まっていた。

この一ヶ月の間に、進宙式で行われる予定だったミス・マクロスコンテストが開かれてミンメイが選出されていた。
そして彼女は念願の歌手デビューを果たし、日々多忙なスケジュールをこなしていたのであった…

A · D · 2205 8 · 21 16 · 59 アルファ星系第6惑
星空域

『デルタ1より全機へ！艦隊より150宇宙キロ周辺に敵バトルポッド群が展開中！哨戒中の部隊は直ちに迎撃に向かえ！』

「スカルリーダーより全機へ！聞いての通りだ、『奴ら』を艦隊に近付けるな！」

『『『了解！…！』』』

この日、フォッカー率いるスカル大隊は、いつもと同じような敵の襲撃に備えるため哨戒任務についていた。あまりにも敵の数が多いため、マイクロミサイル搭載のブースターパックが開発されて戦力

と機動力の増強が図られていた。

「スカルリーダーより全機へ！敵バトルポッド群をキヤツチした！
これより全機、ミサイル発射せよ！」『了解！…』

フォッカーの指示で全機からミサイルが発射されていった。輝は自機のモニターでミサイルの行方を息を殺しながら見つめていた。

やがて、ミサイル群がバトルポッド群を一斉に破壊するとそれを見ていた柿崎早雄が歓喜の声を上げていた。

『ヤツホー！どんなもんだ！』

『喜ぶのはまだ早い！全機散開して残りの敵を叩け！』

フォッカーの指示により、各機が散開し、戦闘機モードからバトロイドモードに変型してそれぞれ残敵を掃討していく。

中でもマクシミリアン・ジーナス（通称マックス）は、僅かな時間で5機のバトルポッドを撃墜して輝を唸らせていた。

（たすがマックス…やるじゃないか…俺だつて負けてたまるか！？）

ほぼ敵を掃討しつつあつた時、未沙からの通信が入っていた。

『デルタ1より全機へ！艦隊前方50宇宙キロに敵戦艦10隻接近
中…直ちに迎撃に向かって下さい！』

「ええっ…それじゃこっちの敵はただのオトリかよっ！？」

輝は機内で叫ぶと直ちに自機を艦隊へと方向転換し、フルスピー

アで向かって二つた。

第6話 アルファ星系波高し！？（その2）（後書き）

マックスと柿崎の初登場でした。マックスは天才的なパイロットで、結構奇抜な戦いで敵を圧倒していたのが印象的でした。

一方、柿崎はと言つとムードメーカー的存在でしたが、TV版&劇場版共に非業の死を迎えたのは少し残念…
果たして今回はどうなる！？

第6話 アルファ星系波高し！？（その3）

同日 17:05 第一軌道艦隊

第一軌道艦隊では、迫り来る敵のバトルポッドの迎撃に追わっていた。

マクロスを中心に周囲を第一軌道艦隊の艦船で取り囲み、防御網を敷いていた。艦隊上空はヤマトの加藤四郎と、揚羽武両名率いるバルキリー隊が守りを固めていた。

そんな中、数機の敵バトルポッドがマクロスマインブリッジ周囲に飛来し、攻撃を仕掛けようとしているのを加藤機が発見、これをミサイルで撃墜したものの一機だけをとり逃がしていた。

「マクロスのブリッジが危ない！急がないと…」

加藤が叫び声を上げた時、一機のバルキリーが飛来し、ブリッジをかばうようにガトリング砲を撃ちまくつて撃墜していた。

（……ブースター・パックにドクロのマークイング…フォッカー少佐率いるスカル大隊のメンバーなのか…？）

加藤がそう思い、相手に感謝の意を表わそうと通信を送ろうとした時、マクロスマインブリッジからその機と通信をやり取りしていた。

『スカル11番機！あなたの担当は敵艦隊の迎撃のはずよー！』
『ヤマトのバルキリー隊に任せて速やかに向かいなさい！』
『敵機が攻撃して来たんだ！助けてやったのにそんな言い方ないだ

ルルー』

ブリッジとその機体が誰であるか、加藤はすぐに合点がいった。
(始まつたよ… 一條と早瀬中尉の口喧嘩が…)

加藤がそう思つてゐると、未沙はより厳しい口調で輝に切り出して
いた。

『あなた、新人のくせに命令違反するつもり…とにかく持ち場に
戻りなさい…』

『女の指図なんて聞けるか…！本機はこれより、艦内に侵入した敵
の迎撃に向かう…以上…』

輝のバルキリーはブースターパックを切り離し、艦内へと向かつて
いった。その様子を見ていた未沙は思わず叫んでいた。

『もうつ…男と女のどちらが偉いって言つのよ…？』

この未沙の発言を聞いた加藤は心の中で溜息をつきながら思つてい
た。

(やだねえ早瀬中尉つて…せっかく助かつたつてのにあれじゃ 一條
が可哀相だよ…せめてお礼の一つでも言えば、可愛氣があるのに…)

第6話 アルファ星系波高し…?（その3）（後書き）

ヤマト艦載機隊隊長、加藤四郎の登場でした。この人とフォッカーが並んで話している姿をアニメで見たかった…中の人と同じなので、どう演じたか…まああの人なら何とか出来るでしょう。

（例…ヤマトパート1、第25話の徳川機関長と佐渡先生の場面…）

次回、輝とミンメイが再び出会います…

第6話 アルファ星系波高し！？（その4）

同日 17：15 マクロス艦内市街地

この日はミンメイのファーストコンサートが、市街地のドーム球場で開かれていた。開始当初から観客は総立ち状態であつたものの、突然の空襲警報発令と、5分後にトランスマーケーションを行うと艦内放送が流れたため、コンサートは中断の憂き目にあつていた。そして、ミンメイはマネージャーである兄のカイフンやスタッフと共に控え室に待機していた。

「兄さん…大丈夫かしら…」これは危険だからどこか別の場所に避難した方が…？」

「いや、下手に動かない方がいい…いつものよつにすぐ治まるわ…」

ミンメイが不安がるのをカイフンがなだめていたが、艦内に侵入した敵バトルポッド群のうち一機が、控え室の建物に頭から落申し込みを破壊して内部に突っ込んで来た。

カイフンとミンメイは手を取り合つて逃げ出し、その様子を落としたバトルポッドを操縦していた兵士が見て驚愕していた。

『な、何だこれは…男と女のマイクローンが一緒にいるなんて…』

その兵士の発言をじうにか着地に成功したバトルポッドの兵士が聞き、モニターを確認するなり彼もまた呆然として呟いた。

『ヤック……デカルチャー……』

その兵士の発言を耳にしていた隊長らしき兵士は一人に指示を出していた。

『とにかく、資料を手に入れて攻撃は別の隊に任せ、我々はここを撤退する!』

『了解!!』

一方、ミンメイとカイフンは別のバトルポッド隊に追われ、必死に逃げていたが、ふとしたはずみでミンメイが転んでしまった。カイフンがミンメイの側に近づこうとした時、運悪くトランスマーチョンが始まってしまい、一人はシャッターを介して別々に別れる羽目になっていた。

カイフンと離れてしまったミンメイが、バトルポッド隊に取り囲まれそうになつた時、艦内にようやく入り込んだ輝のバルキリーがガトリング砲をバトルポッド隊に浴びせ、逃走を図りつとした残り一機を追撃しようとした。

その時、市街地の重力が急にゼロとなり、店のショーウィンドウから品物がガラスを破つて外に飛び出し、道路に停めてあつた車も宙に浮いて一斉に下方に向へと落ちて行つた。

むろんミンメイも浮いて下方へと落ち始め、それに気付いた輝のバルキリーは全速力でミンメイに追い付こうと歩道橋や車にぶつかりつつも、アームを伸ばして何とか彼女の体を掴んでいた。

(ふーっ……何とか無事に…………!!)

輝が安心したのもつかの間、輝のバルキリーはふとした弾みからエアロツクに突入してしまい、さらに間の悪い事に非常用シャッター

が下りてそのまま隠れてしまつた。

第6話 アルファ星系波高し！？（その4）（後書き）

劇中、出て来た三人のゼントラーディ兵士は言わずと知れたスパイ三人組…フレラ・ナンテス、ロリー・ドセル、コンダ・ブロムコの三人です。（今回の設定はTV版にしています。）

でも、三人の名前を続けて言うのはどうかと思いますが、当時のスタッフのセンスって一体…

それと、彼らが使っていた台詞“デカルチャー”
ここだけはゼントラーディ語にしました。（日本語の“そんな馬鹿な！”では、彼らの衝撃度が伝わりにくかったので…）

第6話 アルファ星系波高し！？（その5）

同日 同時刻 サイド2 ロンテー・オン・クロニー空域

その頃、アムロはチョーンと共に ガンダムを駆り、サイド2空域に展開中のロンド・ベルへと帰投していた。旗艦ラー・カイラムのMSデッキから艦内のブリーフィングルームに直接入った彼は、ブライトに現在の状況を聞いていた。

「艦長、どうなんだ？ 今の状況は？」

「ああ… 現在、第一軌道艦隊は第6惑星空域で“奴ら”と交戦中だそうだ…」

クワトロは一人の会話を聞きながらしばらく考えていたが、やがておもむろに切り出していた。

「艦長、この際ロンド・ベルで彼らの救援に行こう… 今は少しでも“奴ら”的情報を収集しなければならないと思うのだが？」「救援に行くのは構わんが… その隙を狙つてネオ・ジオンの連中が攻勢を強めたらと思うと…」

ブライトが困惑していると、緊急マーティングのために来ていた各艦艦長やメンバーのうち、ネエル・アーガマ艦長のヘンケン・ベックナーが名乗り出していた。

「ブライト君、だったら我々の部隊が残るわ… ネエル・アーガマなら何とかなるし、他の艦も歴戦をぐぐり抜けた者ばかりだしな…」「分かりました。では頼みますヘンケン艦長… それでは改めて説明

する…我が艦とアルビオンを中心とする艦隊は直ちに第6惑星空域に向けてワープする！残りの艦はネール・アーガマと行動を共にしてくれ！以上だ！」

ブライトが宣言し、各自所定の配置についた時、ヘンケンがアムロに尋ねていた。

「アムロ君、そう言えば ガンダムを持って来たのはいいが肝心の新型ファンネルはどうしたのかね？」

「その事なんですが、急いでいたので後からデック艦ラビアンローズで運んでもらえるように、手配をしておきました。」

「……ラ、ラビアンローズ……」

アムロの発言にブライトが思わず反応すると、それを見たジユドー達がすかさず突っ込みを入れていた。

「ブライトちゃん！ そう言えばあの艦に愛しいあの人気が乗っていますよねえ！？」

「そーそーー一番会いたいから・の・じ・よ・ー！」

ジユドー ヒジー チャの突っ込みにブライトは赤くなっちゃうになりながらもひたすら反論していた。

「な、何を言つたかー私には女房と子供達がいるんだべ、別にヒマリーの事は……」

「聞いたかよ！？ ヒマリーだつてやー。」

「何だかんだ言つてもやつぱりブライトちゃん、ヒマリーさんの事気にしてんだよなあー！？」

「あ、お前りへへへへへへへへと準備を急がんかーーー！？」

ビーチャ達とブライトの会話を聞いていたアムロは溜息をつきつつ苦笑していた。

(…………つたくブライトは、[冗談だつて分かりそうなものを……あいつの掌の上で遊ばれているのにまだ気がつかないのかよ……])

第6話 アルファ星系波高し！？（その5）（後書き）

ブライトとエマリー……本編や、スパロボでもお馴染みの“イケナイ”カップルですが、今作品は少し面白い展開にしたいと思います。何と、エマリーさんがブライト以外の男性に目をつけますが、その相手とは…………？
今後の展開に要注目！

第6話 アルファ星系波高し！？（その6）

同日 17：28 マクロスメインブリッジ

「敵艦隊、我が艦隊より30宇宙キロまで接近！」

トランسفォーメーションが終了し、強攻型へと変型完了したマクロスメインブリッジでは、主砲 マクロスキャノンの発射準備が進められていた。

「マクロスキャノン発射スタンバイ！目標、前方の敵艦隊！」

強攻型態勢のマクロスの二つに分かれた上向きの艦首が、前方に展開しているゼントラーディ艦隊を捉えるべく下方へとスライドを始めていた。

「発射コース右15度方向に修正、並びに上下角プラス2度へ修正します！」

「対閃光防衛シールド展開完了！」

「全艦隊、本艦後方に待避完了！」

「マクロスキャノン発射！目標敵艦隊！」

グローバルの指令で、クローディアが発射ボタンを押したもの、何故か発射されず何度も押してみても何の反応も無かつた。

「一体どうしたのだ！何故発射できないんだ！？」

グローバルが声を荒げると技術開発部のジーナ技師長から連絡が入

つていた。

「どうしたのだ技師長！何かトラブルでもあったのか！？」

『はい、重力制御システムが一部不調のために、発射システムに異常をきたしまして…修理に30分ほどかかりますが…』

同日 同時刻 ヤマト第一艦橋

「一体どうしたんだ！？一向にマクロスキヤノンが発射されないぞ！」

ヤマト第一艦橋では、艦長席の古代がメインパネルに映し出されたマクロスを見て声を荒げていた。

「艦長、マクロスより入電です。“マクロスキヤノン発射システムが不調のため修理に時間がかかる”だそうです！」「

相原の報告に、古代は思わず唇を噛み締めていた。

(……何て事だ…波動砲が撃てない今、頼りになるのはマクロスキヤノンだけだというのに…どうすればいい…？)

古代はしばらく考えた後、ふと思いついて相原にフォックナーへの連絡を依頼すると、ものの1分もしないうちに彼から連絡が入つていた。

『どうした古代、何か用事か？』

「フォックナー、済まないがマクロスの主砲発射システム修復作業が終わるまでの間、全機を指揮して敵艦隊を引き付けてくれないか…

？」

古代は駄目で元々と思ってフォックーに問い合わせると、彼は即座に返答していた。

『かつての戦友からの頼みだ！心良く引き受けよう。』

「ありがとうフォックー……だが、そちらの航空管制オペレーターにも一応……」

と古代が言った時、未沙から通信が入っていた。

『「ひちらデルタ」…古代艦長とフォックー少佐の話はひちらでも聞いていました…ここはとにかく、時間稼ぎをよろしく頼みます…』

未沙の発言に古代は少し面食らっていた。何事にも固い性格の未沙をどうやって説得するかしばらく考えていただけに、思わず拍子抜けしていた。

『よし！そうと決まれば一丁行きますか！スカルリーダーより全バルキリー隊へ！聞いての通りだ、マクロスキャノンが撃てるようになれるまで時間稼ぎだ！心して行けよ！』

『『『了解！！！！！』』』』

フォッカーの命令の下、全バルキリー隊は前方に展開するゼントラーディ艦隊方向へと向かつて行つた。

第6話 アルファ星系波高し…？（その6）（後書き）

本田（8／31）、笑つていいとものテレフォンショッキングに伊武雅刀さん（ヤマトのデスラー役の方）が出演されました。

この方、料理を作るのが大変上手だそうで、自分の中ではデスラー総統が自ら台所に立ついる姿が思わず田に浮かび…

（んなこたあない…ｂｙタモリ）

デスラー繫がりで、「ヤマト」のベムラーザ首相や「ヤツターマン」のドクロベヒ役をされていた声優の滝口順平さんがお亡くなりになりました…

謹んで「冥福をお祈りします」…

第6話 アルファ星系波高し！？（その2）

同日 17:45 マクロスマインブリッジ

『こちら技術開発部のバルトロウです！マクロスキャノン発射システム修復完了しました！いつでも発射出来ます！』

マクロスキャノン発射システムの修復作業を陣頭指揮していたジーナ技師長から連絡が入ると、メインブリッジ内は再び活気に溢れていた。

「よし！早瀬君、敵艦隊を攻撃中の全バルキリー隊に連絡してくれ！」

「了解！全バルキリー隊へ！本艦はマクロスキャノンの修復完了、これより発射態勢に入るので直ちに射程外に退避せよ！」

「敵艦隊、現在位置本艦より25宇宙キロまで接近！」

「マクロスキャノンへのエネルギー注入率、現在85パーセント！」

「全バルキリー隊、全機射程外への退避完了了！」

「よーし行くぞ！マクロスキャノン発射！！！」

「了解！マクロスキャノン発射します！」

クローディアが発射ボタンを押すと、艦首砲身からプラズマ粒子が発生し、やがてそのエネルギーの束は前方に接近しつつあったゼントラーディ艦隊に突き刺さり、あっさり消滅させていった。

同日 17:46 ヤマト第一艦橋

ヤマト第一艦橋では、前方のゼントラーディ艦隊が消滅した事を受けて、メインスタッフが歓喜の渦に舞っていた。

土門と島、真田と山崎が握手を交わし、相原・南部・太田の“スリーアミーゴ”が万歳を繰り返していた。

古代も艦長席から下りて、レーダー席のユキにそっと微笑むと、彼女もまた微笑み返していた。

その時、航法レーダーに反応があり、慌てて自席に戻った太田が切羽詰まつた表情で報告していた。

「艦長！ 10時方向、25宇宙キロ地点に重力振を確認！」

「何だつて！？ 新手の敵艦隊か！？」

「いえ… これは波動エネルギー反応、ワープアウト反応です…」

「ユキ、艦籍は分かるか？」

「はい… 艦籍出ました… リンボス駐留の連邦軍です… 所属は第13独立機動艦隊ロンド・ベルです…」

「ロンド・ベル… “ニコータイプ部隊”と噂されているあの部隊が救援に来てくれたのか…」

その頃、第5惑星空域で待機中のゼントリーラーティ艦隊旗艦では、第一軌道艦隊をおびき出すべく先行艦隊を派遣していたものの、あれなく全艦全滅の報告が入りブリタイとエキセドルを呆然とさせていた。

「……増援部隊を呼ばねばならんようだな……敵のマイクローンを少し甘く見ていたようだな……」

「……そのようですね……おまけに、この星系のマイクローン達が彼らの艦隊に合流したようで……事態は一刻を争つようですね……」

第6話 アルファ星系波高し！？（その2）（後書き）

次回、いよいよヤマト・マクロス・ガンダムキャラ揃い踏み！

第6話 アルファ星系波高し！？（その8）

同日 18:15 マクロス艦内大会議室

「初めまして。私は第13独立機動艦隊ロンド・ベル司令を務めるブライト・ノア大佐であります…」

マクロス艦内にある大会議室では、ロンド・ベルメインスタッフと第一軌道艦隊の各艦メインスタッフの初顔合わせが行われていた。

「私の右隣にいるのが、第一軌道艦隊司令、並びに宇宙戦艦ヤマト艦長の古代進大佐……そして左隣にいるのがこのマクロス艦長を務めるブルーノ・J・グローバル准将です。」

藤堂長官に紹介された古代とグローバルは立ち上がり、ブライトに敬礼していた。

「古代艦長、ヤマトの活躍はかねてから聞いております。それにこのマクロスは凄い艦ですね…艦内に市街地があるとは…先程到着した時には思わず驚きました…」

「ええ…我々もまさかこうなるとは思つても見ませんでしたよ…それに“ニヨータイプ部隊”と噂されるあなた方と会えるとは思いませんでしたよ……」

古代が正直な感想を述べると、ブライトは笑いながら答えていた。

「そんなことはありませんよ…たまたま部隊にそういうった人物がいただけの事ですよ…大半は普通の人物が所属しています…そうだ、

紹介しておこう。私の右隣にいるのがアムロ・レイ少佐、ロンド・ベルのMS部隊長を務めている。そして私の左隣にいるのが、クワトロ・バジーナ大尉、この部隊の総参謀的な役割をしている……

「初めてましてクワトロ大佐……」

古代はクワトロが持つ独特の雰囲気で、思わず彼を“大佐”と呼んでしまい、彼に苦笑されまくっていた。

「古代艦長、私は“大佐”ではありません……“大尉”なんだが……」「ああすいません……自分より年齢が上だと聞いていたのでつい……」「いや、構いませんよ……何しろ自分は不器用なもので……30過ぎても昇進できないもので……おまけに嫁さんもいない……ブライト大佐なんか私と同年齢なのに、一人の子持ちですからね……」「そうなんですか？とてもそんなふうには見えませんが……」「二人も子供がいると色々と大変ですよ……そう言えば古代艦長は結婚の方はまだ……？」

ブライトの問い掛けに、古代が答えようがどうか考えあぐねていると、藤堂が即座に答えていた。

「ブライト君、実はいるのだよ婚約者が……同じ艦内でレーダーを担当している森ユキ大尉と言う、当代一の美人がね……」「ちょ、長官！ 何もそれを今言わなくてもいいじゃないですか！？」

藤堂がユキの話題を振ると、古代は思わず絶句し、周囲を笑いの渦に巻き込んでいた。

笑い声が治まると、ブライトがある提案を始めていた。

「実はここに来る途中、みんなと話し合いでしてましたが……あなた方第一軌道艦隊を我々ロンド・ベルに編入しようと思うのだが、どう

だらうか？」

ブライトの提案に、古代は藤堂やその他のスタッフとしばりく話し合ひをしていたが、結論が出ると即座に回答していた。

「今、藤堂長官やその他の人達と話し合ひをしましたが、その話をお受けしましょ。これから先、行動を共にするには何かと都合がいいですからね……」

古代の回答にブライトは満足し、やうにある提案を出していった。

「そうですか、色良い返答を頂きありがとうございます。それともう一つ提案があるのですが、新生ロンド・ベルの司令を古代艦長にお願いしたいのですが……引き受けられないだらうか？」

ブライトの突然の提案に、古代は困惑していた。
自分にこのような大役が務まるのかどうか心配が不安であつたからだ。

「あの……ロンド・ベルの司令はブライトさんがあつて」その部隊ですよ……とても自分には……」

「いや、これから先の戦いはあの巨大異星人を相手にしなければならない……私にはその経験はないし、古代艦長ならこれまでの経験があるので適任だと思つた次第で……」

なおも古代が困惑していると、グローバルが助け舟を出していた。

「古代君、ここにとにかく引き受けたまえ……君一人に責任を押し付けるつもりはない……ブライト君との私が副司令として君を支えるつもりだ……」

「古代艦長、グローバル准将の言つ通りだ……こゝまでかへるが如く受け
けてくれないか？」

「……分かりました……お一人がそつまつひのならぬお詫びます……」

ブライトとグローバルの説得によつて、ロン・アンド・ベル司令の就任を引き受けたのであった。

第6話 アルファ星系波高し！？（その8）（後書き）

ついに古代進がロンド・ベル司令に就任……

実はこの小説を書き始めた理由の一つがこれでした。

ブライトさん以外の人物が、ロンド・ベルを指揮したらどうなるかをやって見たかったのですが、古代ならそつなく出来るはずです！

次回、輝とミンメイが閉じ込められた状況から始まります。

第7話 ラバーズ・コンチホールト（その一）（前書き）

時間はマクロスキャノン発射前にさかのぼります…

第7話 ラバーズ・コンチヨルト（その一）

A · D · 2205 8 · 21 17 : 39 マクロス艦内閉鎖空間

「はあ～……これでオシャカになつたバルキリーは3機団だよ……」

マクロス艦内の閉鎖空間で、輝は壊れたバルキリーの「クピットから出るなり眩いていた。

この一ヶ月の間、些細なミスから自機を喪失する事が一回あり、“次に撃墜されたら減俸だ！？”とフォッカーにきつく説教されたばかりとあって、輝の気分は今またひどく落ち込んでいた。

しかし、それよりも先程救助した女性の様子が気になり、バルキリーの左手に握られた彼女を、持っていたライトで照らしていた。

（ミ、ミンメイじゃないか… そう言えば今田はファーストコンサートだったよな…）

輝が思つていると、ライトの光が当たつたおかげでミンメイがいきなり目を覚ましていた。

「あ、あなた……あの時の……」
「はっ、はいっ…自分は……」

「一條輝少尉……ですよね……」

「そうです！覚えてたんですね！？」

「ええ、あの時古代さんと話しているのを聞いてたから…それより」「『はばぢ』なのかしら？」

ミンメイは、不安氣な面持ちで周囲を見渡しながら輝に問い合わせていた。

「どうも閉鎖空間に入ってしまったよう…通信機も壊れているので何処にも連絡しようがなくて…」

「じゃあこの壁、壊せませんか？」

「無理です…特殊金属で作られてるんで…」

輝の発言にミンメイは諦めたらしく、その場に座り込み履いていたヒールを脱ぎ始め、勢いよく伸びをしていた。

「ま、いいか……過密スケジュールはもう少しあれ…これで一息つけるわ…」

「あの～もし良かつたら…これにサインを…」

輝はポケットからハンカチを出し、ミンメイにサインをせがむと彼女は持っていたサインペンを取り出して、自分の名前を記入していった。

「「ゴメンね…今だにサイン書くの下手くそだから…」

「あついよ…記念にするから…ってあれ…重力が…」

輝がそう言つた途端、一人の体が突然宙に浮き始めていた。ミンメイは突然の出来事に驚き、衣装の間から見えそうになる下着を必死になつて隠そうとしていた。

「いやあ～～～ん！？ど～なつちゅうてんのよ～～～つ……」

「重力制御が効かないんだー！」

「もう～～～そなことよりど～にかしてよ～～～！？」

「どうにもならず泣き叫びながらぐるぐる回るミンメイを止めるべく、輝は彼女に叫んでいた。

「とにかく、脚を思いっきり前に振つてーーー！」

「い、こづー？」

輝のアドバイスのおかげか、ミンメイはどうにか体を浮かせる事に成功し、逆に先程よりも浮いている事を楽しんでいた。

「あははっー何か楽しい～～～！」

「…………ちょっと君ーーーそつちは危険…………」

輝が止めようとしても、ミンメイは何処吹く風といった具合に無重力浮遊を楽しんでいた。

「それにしても色んなものが浮いているね～？」

「ホント……みんな街から落ちて来たんだ……」

二人が周囲を見渡すと、衣服や車、自動販売機、あげくの果てにはマグロの巨体までが浮遊していた。

それらを利用して、二人はいつ終わるとも知れないサバイバル生活を始めていた……

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その1）（後書き）

輝とミンメイが閉じ込められるシーンの再現でした。TV版では宇宙に浮かぶマグロを取ろうと輝が四苦八苦した揚句、頭だけになつたシーンはかなり可哀相……

この作品中では丸ごと艦内に浮いていたので、一人は腹一杯食べるかも……？

次回、モンシアが三人娘をナンパ！？

その結果はいかに……

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その2）

A · D · 2205 8 · 24 16 · 15

マクロス艦内市街地

「はあ～……何かいつも行つてるクラブ……最近つまんないしい……」「そうよねえ……来ている男の子達、いつも同じメンツだし……」「仕方ないわよ……マクロス艦内の市街地の中じゃねえ……」

この日、久々に休暇を取つたシャミー・キム・ヴァネッサの三人娘は、市街地のメインストリートをただあてもなく缶コーヒー片手に歩いていた。

日頃のウサ晴らしをしようと、いつも訪れているクラブに繰り出したものの、結局いつものメンバーしかおらず、仕方無しにただ街中をぶらついていたのだった。

「おまけにさあ～、ユキさんに頼み込んでセッティングしてもらつたヤマトクルーとの合コンもちょっとねえ……」

「ホント……ちびクマ」に“江戸っ子モドキ”に“宇宙のトラック野郎”……相手が悪過ぎたわ……」

「そうそう……あの三人組、あげくの果てに喧嘩始めて同席していた古代艦長に怒鳴られたらし……ユキさん、後で私達に頭下げてお詫びしてくれて……何かユキさんに悪い事しちゃつたかも……」

三人娘は以前行われた合コンを思い出して落ち込んでいると、背後から一人の男に声を掛けられていた。

「そこのお嬢さん達……ヒック！…………これからどうやらまで
ウイーツ~~~~~」

三人娘が振り返ると、そこにはウイスキーの瓶をぶら下げた鬱面の男 モンシアが立つており、その向こうには若い二人の青年コウ・ウラキとチャック・キースが顔をひきつらせつっこちらに走つて来るのが見えた。

「お嬢さん方へもし良ければ俺達三人と付き合わないかあ～？」

三人娘はモンシアのあまりの酔っ払い振りに呆然としつつも、丁重に彼の誘いを断つていた。

「あ、あのう……私達これから行く所があるんでえ……」

シャミーが今にも泣き出しそうな表情で断ると、モンシアはそれに構わず誘い続けていた。

「まあいいじゃねえか！ ちょうど三対三だしよ……カラオケにでも……

モンシアはそう言いつつ、シャミーの尻を撫で回すと彼女はいきなり泣き出していた。

「ふえ~~~~ん！ この人今私に手え出した~~~~！」

シャミーの泣き声にキムはついにモンシアにブチ切れていた。

「ちょっとオッサン！ 私の同僚に何すんのよ……？ アンタもいい軍人なら、やつていい事と悪い事くらい分かるでしょうがつ……！」

「なんだと……！ ? 人が親切に誘つてればいい気になりやがつて！」

「ちょ、ちょっとモンシア中尉…」
はとにかくこの人達に謝った
方がいいですよ…」

キースがモンシアをなだめかしたもの、逆にモンシアはキース
を度突き回していた。

「やいキースー！」の俺様の楽しみに口出すんじゃねえ！？

そつ言ひてキースを張り倒すと、それを見ていたコウも口を出して
いた。

「中尉！いい加減にして下さいー！」
は市街地なんですよー！？」

「ウラキいー！てめえヒヨッ子のくせしてこの俺に説教するつてか
！？」

いつ終わるか知れない喧嘩を見て、ヴァネッサがシャーリーを慰めて
いるキムにそつと囁いた。

「私…早瀬中尉を呼んで来る……」

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その2）（後書き）

劇中、三人娘が合コンした三人組は順番に… 徳川太助 坂巻浪夫
赤城大六
でした…

太助の“ちびクマ” 赤城の“宇宙のトラック野郎”は分かりや
すいにしても、坂巻の“江戸っ子モドキ”…
自分で書いてるのも何ですが、坂巻役の声優さんが何となく“べら
んめえ口調”に聞こえるのは自分だけ…………？

第7話 ラバーズ・コンチホールト（その3）

同日 16:26 マクロス艦内市街地カフュテリア

「とにかく、まだ死んだと決まつた訳じゃない……輝の奴はこの艦内の何処かに居るはずだ……」「はい……では今から西側ブロックを捜してみます……」

「ああ……頼む……」

マクロス艦内市街地にあるカフュテリアで、フォックターがマックスと柿崎に輝の捜索に関する打ち合わせをしていた。

マックスと柿崎がその場を離れる時、フォックターは浮かない表情でコーヒーに口をつけ溜息をついていた。

「一条君、まだ見つからないのね……」

「もう今日で3日目よ……あの坊や、今頃何やってんだか……」

ユキヒローディアが話していると、未沙が突き放した発言をしていた。

「軍に入つてみたけど、やつぱり怖くて逃げ出したんじゃないの？大体彼は軍人向きじゃないし、人の話は聞かないわ、命令違反はするわ、揚げ句の果てには私をおばさん扱いするわ……」

「ちょっと未沙、あなたがおばさんなら私やクローディアさんはどうなるのよ……」

「そうよ未沙！私達まだまだ若いのよ！？今からそんな事言つてたんじや……」「“いつまで経つても彼氏が出来ない”って言いたい

んでしょう？いいのよ…私は仕事一筋で生きて行くから…」

未沙の達観したような発言を聞いていたユキは、半ば呆れながら思つていた。

（全く未沙つたら…恋の一つや二つくらい経験すればいいのに…でも…）「真面目タイプの子が恋にハマつたらどうなるのかしら…）

そんな時、ヴァネッサがカフェテリアに息せき切つてやって来た。

「た、大変です！シャミーが酔つ払いに絡まれて…それを止めようとした人と酔つ払いが喧嘩して…」

「何ですか！？それでシャミーは？」

「今、キムが慰めてるんですけど…」

「分かつたわ！私が止めに行つてくる…」

ユキがそう言うなり、カフェテリアから一目散に出て行こうとする
と、未沙もそれに続いて立ち上がつていた。

「ユキさん！一人じゃ何だから私も行きます！」

二人が出て行き、後を追いかけようとしたヴァネッサに、フォツカ
ーが問いただしていた。

「ヴァネッサ、その酔つ払いの男つてどんな奴なんだ？」

「はい…髪が生えてて酒瓶をぶら下げていて、連邦軍のフライトイ
ヤケットを着ている30前後の男の人ですが…」

その言葉を聞いたフォッカーの中で、ある人物が思い浮かんでいた。

「もしかして…あいつかも…とにかく俺も行く！案内してくれ！」

「了解です少佐！」

第7話 ラバーズ・コンチホールト（その4）

同日 16:30 マクロス艦内市街地

ユキと未沙が現場にたどり着くと既に野次馬で溢れ、その中でコウとモンシアは喧嘩を続け、そのかたわらではシャミーがキムとキースに慰められながらしゃくり上げていた。

「ちょっとあなた達、いい加減にしなさい！市街地のど真ん中で喧嘩とはどういう事ですか！？」

ユキのその一言で一人が振り向き、中でもモンシアはいぶかしげな表情で見つめ、コウはユキの制服についていた階級章を見て思わず敬礼していた。

モンシアはコウのその態度を横目にユキに毒づいていた。

「何だよねーちゃん！女の癖に喧嘩の仲裁か！？」

「ここは市街地です！周りの迷惑を考えてないんですか！？とにかくあなた方の所属は！？」

「はー！自分は強襲揚陸艦アルビオンクルー、コウ・ウラキ少尉であります！」

「同じく、俺はベルナルド・モンシア中尉だ！てめえこそ何処の誰だ！？」

「私は宇宙戦艦ヤマトトレーダーオペレーター、森ユキ大尉です！」

“ヤマト”と言つユキの言葉にコウは思わず直立不動になり、改め

て敬礼し直していた。

彼にとってヤマトは、MSに繼いで憧れの存在であり、その歴戦の艦を間近に見たいと何度も願っていたのが、今回それが実現するとは思つてもみなかつたのであつた。

「ウラキ少尉、IJIの喧嘩の原因は？」

ユキが問いただすとコウは今までの経緯を彼女に説明していた。

「…………じつやら原因はモンシア中尉にありそつね… 中尉、IJIはとにかくシャミーに謝罪して下さい！それに夕方近いとはいえ、酒瓶持つてうるつるのはどうかと思ひますが！？」

「じゃあお聞きしますが大尉殿、アンタの艦にも同じよーな奴がいるつて話じやないか！？それも医者だつて言つじやねえか！？」

モンシアの反論に、ユキは思わず言葉を詰めらせていた。ヤマトの艦医である佐渡酒造はかなり有名で、愛飲している日本酒を所構わず持ち歩くのはヤマトの名物であった。

（まあね…………確かに先生はヤマト艦内を酒瓶片手に歩いてるから……つて言つとか、どうやって言つて訳すればいいのよ……）

ユキがそう思つてると、モンシアが追い打ちをかけていた。

「それとも何か？アンタがその泣き虫娘に代わつて俺と付き合つてくれたら、IJIの事は不問にするんだがな… まあ…どーするんだよ…？」

「ヤマトまだモンシア…！」

声のした方向を一同が見ると、見物客の中からフォッカーと、会議を終えたばかりの古代が姿を現していた。

「古代君！それにフォッカーさん！」

「ありやりや…フォッカー少佐じゃないですか…こりやどーも…」

モンシアが恐縮していると、フォッカーが彼に説教を始めていた。

「お前なあ！今ナンパしていた女の子達はみんな俺の部下だ！それに、お前が怒鳴り散らしていた森大尉はここにいるヤマトの古代艦長の婚約者だ！」

下手に手を出したら、この俺が許せんぞ！」

「はあ…しかしですね…」

「これ以上の言い訳は止めたまえモンシア中尉！」

人混みの中から姿を現れたのは、アルビオン艦長のエイバー・シナップスであった。

「話は聞かせてもらつた…とにかく、ここにいるお嬢さん方に謝罪しましたまえ…」

シナップスの一言で、モンシアは三人娘とユキに謝罪していた。

「中尉、君はアルビオンに戻った後、罰として艦内清掃を命じる…」「はあ…了解しました…」

モンシアはそう言つと、ガックリと肩を落としその場を離れ、それを見ていたコウはシナップスに進言していた。

「艦長、自分もこの騒ぎには責任がありますー自分も艦内清掃に加わりますー」

「いいだらう…君もやりたまえ…」

「ありがとう!」
「ありがとうございますーキース、君も手伝ってくれー!」

「…………了解…………」

ユウとキースは古代達に敬礼すると、モンシアの後を追っていた。

「早瀬中尉、うちのクルーがお宅のクルーに迷惑をおかけしました…グローバル艦長には、私が謝つていたと伝言を頼みます。」

「了解しました。艦長に伝えておきます。」

シナップスが未沙に伝言した後、彼は古代の傍に近づくと耳元で囁いていた。

「しかし…あなたのフイアンセは気が強いですな…くれぐれも尻に敷かれないように…」

「…………あの…………実はとっくに…………」

古代が小声で呟くと、シナップスは苦笑しながらそのばを離れて行き、シナップスの苦笑を見ていたユキが不思議そうな表情で古代に聞いただしていた。

「古代君、シナップス艦長が苦笑いしてたけど…?」

「え?いや、別に……それよりユキ、大丈夫かい…………」

「ええ…実はね、ホントはどうなるかと思つてた……でもフォツカーさんがモンシア中尉と知り合ったんだなんて……」

「ああ…奴とは飲み仲間で同じ部隊にいたんだ……パイロットとし

ての腕は確かに酒と女には目がなくてな……一年前に人事異動で
リンボス駐留軍に転属になつたのは聞いていたが、まさかこんな所
で再会するとは思わなかつた……それにしてもまあ……ユキの意外
な一面を見るのは……おい古代！お前気をつけないと、将来怖いぞ！
ハツハツハツハツ！』

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その4）（後書き）

古代がユキの尻に敷かれる……本編でも見たかつた！

今までユキに散々心配かけてばかりいたから、彼女に頭が一生上がらないはず……

もしかしたら、復活編での別居の理由その2になるのかも……

第7話 ラバーズ・コンチカルト（その5）

同日 21:46 アルビオンマジック

「あ～疲れたぞ～っ……どうして俺が艦内清掃しなきゃならねーんだ!?」

アルビオンのマジックでモンシアがモップ片手に文句を垂れ流していた。

マクロスから帰ってきて5時間以上艦内清掃に専念していたものの、全長350mのアルビオン艦内を三人だけで清掃するのはいたせか広すぎた。

「中尉～！文句を言つてゐるヒマがあつたら手を動かして下さ～よ～！」

「ひむせーキース！こうなつたのもみ～んなあのマースカねーちゃんのせいだ！今度会つたらギャフンと言わせてやるー。」

今にもモップの柄を折りそうな雰囲気のモンシアに、キースは半ば呆ながらユキの印象を話し始めていた。

「まあまあそ～う言わずに……でも俺から見て森大尉って、優しそうですかけど？」

「馬鹿かお前は！？あんな性格のきつそうな女、俺は願い下げだ！」「そうですかあ？森大尉って見た目は華奢見えますけど、なかなかナイスバディじやないですか……こう出てる所は出でてい、身長はそんなに高くなくて……あれで古代艦長の婚約者じゃなかつたらな

「……とにかく誰かの誰かとは大違い！」

「そのどつかの誰かって……アタシのことかいキース！？」

「へー？……モ、モーラ……いたのー？」

キースが後ろを振り向くと、モーラが腕組みをして凄まじい形相で仁王立ちしていた。

「アンタねえ！森大尉の話しばかりしていると、終わるものも終わらなくなるつてーの！？せっかくやつてしまいな！」

「ひつ……ひえ～～～！？」

モーラがキースを怒鳴りまくっていると、それを見ていたモンシアは“ザマー見る”という表情を浮かべていた。

「ちょっとスケベ親父！アンタもせつと終わらせんんだね！ウラキ少尉なんか、とっくに自分の受け持ち区域を終わらせたんだからね！」

「ぬわにい～～～！？あのヒヨッ子野郎、いつの間にい～～～！」

？

モーラの発言にモンシアが切れかげると、MSデッキ上の通路からベイトとアテルが声を掛けていた。

「お～いモンシア！せつと終わらせりよー！」

「そうですよ中尉！我々は先に休みますんでー後はよろしくお願ひしますー！」

一人がそう言ってその場から立ち去ると、下にいたモンシアは思わず叫び出していた。

「クソッたれ～～～！…ビニツモココツモ勝手にしゃがれ～～

}, } } , . . . ,

第7話 ラバーズ・コンチヨルト（その6）

A · D · 2205 8 · 25 15 · 35

マクロス艦内閉鎖区域

輝とミンメイが閉鎖区域に閉じ込められてから既に4日たつていた。絶望的な状況の中、二人は相変わらずたわいない話をして気を紛らせていた。

「それでね、父さんが私にこう言ったの……“お前には歌手なんて無理だ！お前は家出したカイフンの代わりにこの店を継げ！それが出来ないなら、親子の縁を切るぞ”ってね……」「それで結局どうしたの？」

「私、頭に来ちゃって！その晩書き置き残して家を飛び出しちゃって、そのまま南アタリア島にいる叔父さん達の所に転がり込んだって訳……」

「す、凄いじゃないか……」

ミンメイの告白に、輝は思わず絶句していた。自分より一歳しか年齢が離れていない彼女の行動に舌を巻いていた。

「でもね……ちょっとやり過ぎたかなって……あの後母さんにメールしたら、泣き顔が載った写メールが返ってきて……それにこの前はその事に関して古代さん達に色々言われたし……」

ミンメイが淋し気な表情でうつむいているのを見た輝は、別の話題を振っていた。

「それより、聞いてもいいかなこの前のドラマ……あれで共演した人気俳優との仲、ホントの事？」

「ああ、あの事？輝も本氣にしてたんだ……あんなの芸能雑誌の『テッヂ上げよ！？』

「いや……だつてあのキスシーン、凄いリアルにしていたから……」

「アハハっ！……あんなのは演技！ただのビジネスよ！…」

「う……嘘お～～～！？」

「じゃあ……やってみせましょつか……」「

ミンメイはそう言つとおもむりに輝に迫り、衣装から見える胸元をわざと強調していた。

「ねえ輝……私……あなたの事が……好きなの……」

「え……っと……その……」

「ねえ……あなたは私の事……愛してる……？」

「いや……あの……」

「私はずっと前から……あなたを愛してる……」

ミンメイはあるドラマのヒロインのように輝に迫り、彼の方は突然の展開にただ押し黙るほかなかつた。やがてミンメイの唇が輝の唇と重なり、やがて無重力状態が解除されて二人の体は下へと落ちていった。

「こいつどうせここに、今まで閉じていた非常扉が開くとカメラを持つたマスコミ陣が待ち構え、一斉にフラッシュを一人に浴びせていた。ちょっとは凄い！」

「ホント！……こいつはスクープだ！」

第7話 ラバーズ・コンチホールト（その6）（後書き）

劇場版 愛・おぼえていますか の再現でした。

これを見ていて不思議に思ったのは、扉の向こうになぜマスクが陣
が待ち構えていたのか…？

何回DVDを見ても今だに分かりません…
どなたか知ってる方がいたら教えて下さい…

第7話 ラバーズ・コンチホールト（その7）

A · D · 2205 8 · 26 9 · 32

マクロス艦内ブリーフィングルーム

翌日、輝はブリーフィングルームで未沙から、ミンメイを助けた事により命令違反を取り消すという軍広報部からの通達を受けていた。

「…………ただし、今後命令違反を犯したらただではおきません。厳しく処罰するのでそのつもりで……」

「はあ……」

「一条少尉！ 聞いているんですか！？」

「はい！！！以後気をつけますっ！！！」

事務口調の未沙に対し、輝はおもむろに立ち上がりつつ敬礼すると、未沙はムッとした表情でブリーフィングルームから立ち去つて行った。

「…………つたぐ！ あれでも女かよ！？ 森大尉の方がよっぽど女らしいよ！？」

輝は未沙の出て行つた先を身ながら文句を言つていると、フォックラーとマックス、柿崎が入れ違いに入つて來た。

「やつたな輝！ この色男が！？ どうだった我等のアイドル、ミンメイちゃんのお味は！？」

開口一番、フォックラーは輝の頭を小突き、ミンメイとの事を突つ込

んでいると、当の輝は困惑していた。

それに追い打ちを掛けるようにマックスがさうに突っ込みを入れた。

「仮にですよ…もし一条先輩とミンメイさんがそういう言ひ関係になつたのなら……これは絶対責任を取るべきです！」

「そりそり…マックスの言ひ通り！」

柿崎までもが茶々を入れると輝がムツとした表情で否定した。

「言ひておきますが、自分は何もしてません！」

「何だあ！？4日も一緒にいて何も無かつただあ！？お前、それで
もオ・ト・「か！？」

フォッカーを始め、マックスと柿崎に睨まれた輝は、ただ押し黙る
ほか無かつた。

同日 10：08 マクロス艦内市街地カフェテリア

その頃、市街地のカフェテリアでは三人娘がお茶を飲みながら、輝
とミンメイの記事が掲載された雑誌片手に盛り上がつていた。

「やあねえ今時の芸能人は…人気が出たらすぐこれだから…」
「ホント…今度の男だつて何人目なんだか？」

ヴァネッサとキムが雑誌を見ながら噂しまくつていると、シャニー
が「うらやましい」と言ひ表情で呟いていた。

「なんかあ～やう二つ目のひなみのやういふやうがして感じー。？」

「アンタねえ… そんな事言つてるから彼氏が出来ないの… 分かる?」

別にいゝその^{ニセ}いしい人が見^てかるがいしいの^う

もう誰いながらシャリ一は、別の週刊誌を手に取り中をめぐり、ある記事に目が止まるところなり騒ぎ出した。

「ええ~~~~~っ！？こんなのがりい~~~~~！？」

「ちよつとシャミーーー。こきなり大声上げないでよ……う、嘘でしょ

「どれどれ……」んなのあり~!?

三人娘が騒ぎ立てたのは無理も無かつた。この記事の見出しには次のようなタイトルが書かれてあつた。

宇宙戦艦ヤマト艦長古代進大佐、人気歌手リン・ミンメイと密会！？

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その7）（後書き）

次回、この記事を巡つてヤマトクルーが大騒ぎ！？
一体どうなる？古代とユキの仲は！？
是非お楽しみに！

第7話 ラバーズ・コンチホールト（その8）

同日 10:46 ヤマト第一艦橋

「ちょ、ちょっと古代艦長！これは一体どういう事なんですか！？」

第一艦橋で土門が、例の週刊誌を片手に古代に詰め寄り、島や南部、相原も思わず呆然としながらその週刊誌を食い入るように見ていた。

「ええと……喫茶店で一人きりになつた古代艦長とリン・ミンメイ…お互いの目を合わせ、今にも手を握りそうな雰囲気」……って古代ーお前、ユキと言つ婚約者がいながらミンメイと浮氣かあ！？

「ちょっと待て島ーそれは誤解だ！」は喫茶店じゃない…ミンメイのコンサーント会場にあるホールの一角だ！それにあの時、兄貴でマネージャーのカイフンもいたんだ！」

古代の話によると、コンサーント前日にミンメイを激励するために訪れ、カイフンも交えて話に花を咲かせていた。

途中カイフンはスタッフに呼ばれて席を中座した時に一人でいる所を撮られたとの事であった。

「とにかく、明日にでも軍広報部の連中と一緒にこの週刊誌編集部を訪ねて抗議するつもりだ…ユキ、済まないが広報部に連絡してくれないか…」

「はい……分かりました……」

ユキは古代に何か言いたげな表情を浮かべ、第一艦橋から通信室へと向かつて行つた。

「……………どうしたんだユキは……………何か言いたそうな顔をしてたけど？」

古代の発言に、第一艦橋の一団は思わず呆れ返つていた。この一ヶ月の間に、古代とユキが会話を交わしたのはほんのわずか……それも任務中のみであると言つ事実は周知の通りであった。

（……………つたく古代の奴は……………いい加減ユキの気持ちも考えてやれよ……）

島は心の中で呟き、溜息をつきながら古代に切り出していた。

「なあ古代、お前最近ユキとマトモに話した事あるのか？」

「ああ、一日前に例の騒ぎがあった時は、ちゃんと話したぞ……それがどうかしたのか？」

古代が不思議そうな顔で島に問い合わせると、呆れた表情の真田がか言いたげな島を制して代わりに答えていた。

「古代、この前ユキが俺にこぼしていたぞ……“最近、彼の考えている事が分かりません……まるで私を遠ざけているようだ……”とな……お前、何か心当たりがあるだろ？」

真田の問い掛けに、古代は思わず絶句していた。

総数10万人にも上るこの艦隊の人々をどうやって守り抜くか……という事が絶えず頭の中にあり、任務以外のプライベートを切り捨てていたのであった。

（……確かに真田さんの言つ通りかもしれない……任務にかまけてユキの事など全然考えてなかつた……だからこんな写真を撮られるんだよな……）

古代はそつ考えると真田に切り出していた。

「真田さん……色々心配かけてすみませんでした……確かに僕は任務にかまけてユキの事を考える余裕がありませんでした……」

「分かつてくれればそれでいい……今はとにかくユキのいる通信室に行つてこい……それと明日とあさつては休暇を取れ！どうせこの一ヶ月マトモに休んでないからな……」この機会にユキと一緒に、羽を伸ばすんだな……」

古代はそれこそ異議を唱えようとしたものの、真田の厳しい表情を見て思わず頷いていた。

「分かりました……一日間休みを取りさせてもらいます……その間業務の方よろしくお願ひします！」

古代はやう言つなり、そのままユキのいる通信室へと向かつていつた。

後に残された一同からは思わず笑い声が上がり、その中でも相原が大ウケしていた。

「いやあ～」れじやどつちが艦長か副長か分かりやしませんよねえ

（

その頃通信室のユキは、広報部との打ち合わせを終えた後一人溜息をついていた。

先程の週刊誌の件は気にしてはいなかつたものの、これがミンメイではなく他の女性だつたらただでは済ますつもりは無かつた。あの場で泣きわめき立て古代を困らせるくらいやりかねなかつた。それでもユキは、ここ最近の古代の自分に対する態度が冷たいと思うようになり不安になつてていたのだつた。

(古代君の馬鹿……週刊誌の事はどうでもいいから、明日一日私に付き合つてよ…)

実を言えど、ユキは明日から一日間の休暇を取つており、その事を先程古代に話したいと思っていたが結局話せずじまいになつていて。その事を思い出し、自然に涙が出て来そつになつた時、古代が通信室に入つて來た。

「あのさユキ……明日とあさつて……空いてる?」

「私は明日から一日間休暇なんだけど……どうかしたの古代君……？」

「実は……僕も休みを取つた……君と同じ日程で……ここ最近君とじつくり話せずにいたから……『めん……』『いいの……』私の方こそ色々話したい事があつても、古代君最近忙しいから……でもうれしいっ!! そつ言つてくれるのをずっと待つてたの!!」

そつ言つとユキは古代に抱き着き、彼の胸元に頬を寄せていた。

「とにかく、マクロス艦内の士官専用ゲストルームの予約をしてく
れ……担当は確かクローディアさんだつたな……」

ユキが古代にキスをしようとした時、一人の通信班員が室内に入つて来たが、古代達がいるのに気付きあたふたとその場を立ち去り、残された二人は笑い転げていた。

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その8）（後書き）

前回、派手な予告の割に展開が少し地味だったかも……

次回、時間は少しさかのぼり、舞台をリンボスの衛星グラナダの中
心都市フォン・ブラウンに移します……

第8話 策謀のフォン・ブラウン（その1）

A · D · 2205 8 · 24 11 · 56 フォン・ブラウン第
一宇宙港

リンボスの衛星グラナダの中心都市、フォン・ブラウン……ここは数あるグラナダの都市では最大の人口500万人を擁する中心都市である。

この街の中心近くにある第一宇宙港に、ネエル・アーガマを中心とするロンド・ベル残留艦隊が、補給と休養を兼ねて入港していた。

そのネエル・アーガマのMSデッキでは、愛機ザクの整備に掛かり切りのバーナード・ワイズマン（通称バーニイ）にクリスが声をかけていた。

「ねえバーニイ！せつかくフォン・ブラウンに来たんだから、たまには美味しいものでも食べに行きましょうよー。」

「ごめんクリス！僕はこれから馴染みのジャンク屋にザクの部品を貰いに行くから、君はリイナちゃん達と行ってくれば！？」

バーニイの発言に、クリスはまたか…と言う表情をしていた。

かつてバーニイはネオ・ジオンに所属していたものの、ふとしたきっかけでクリスと知り合い、彼女が敵対しているロンド・ベルの一員とは知らずに何度もデートする仲になっていた。

それがたまたま戦場でクリスの乗るアレックス・ガンダムと交戦した際、通信モニター越しに相手の顔を見た途端にその場で、愛機のザクごと投降したのだった。それ以来、フォン・ブラウンに寄港す

る度にジャンク屋で部品を調達するのが彼のお決まりのルースになつた。

「クリスさん、もういい加減諦めた方がいいですよ……どうせバーニさんはザクにしか目が向いてないんですから……」
「そうよねえ……この際バーニーとの結婚の件、考え直した方がいいかも……」

リイナに諭されたクリスは深い溜息をついていた。

ほんの数ヶ月前、バーニーにプロポーズされた時は思わず有頂天になつたクリスだったが、よくよく考えて見れば彼は自分よりも年下で、しかも元敵兵士だと言うハンデもあり、離れて暮らしている両親にどうやって紹介しようかと思案していたのだった。

「あれこれ考へても仕方ない！リイナちゃん、シンタ君とクムちゃんも誘つて四人で美味しいもの食べに行きましょうー！」
「はーい！それじゃ一人を呼んで来ます！」

第8話 策謀のフロン・フラン（その一）（後書き）

「〇〇〇〇」に出て来たバーニイが初登場です。

彼のザク好きは、スパロボではかなり有名ですが、この作品でも取り上げていきます。

原作では、互いに敵味方である事を知らずに戦ってしまった二人……
せめてこの作品では幸せそうなクリスとバーニイを描きたいです……
：（多分バーニイのザク好きは、ヒートアップしてクリスをヤキモキさせるはず……）

次回、再びシーマ様登場！ついでにオサリバン常務も登場して、キツネとタヌキの腹の探し合い！？

第8話 策謀のフォン・ブラン（その2）

同日 12:16 フォン・ブラン旧宇宙港

フォン・ブランのかつての宇宙港……現在では数えるほどの貨物船が発着するだけの古い港に、一隻のみすぼらしい貨物船が到着し一人の女が降り立った。

それをお迎えたのは、スーツ姿の中年男性……アナハイム・エレクトロニクスのオサリバン常務がその女…シーマをうやうやしくお迎えていた。

「これはシーマ様……よくお出でになられまして……」

「フン……アナハイムもよくやる……メインポート」「ロンド・ベルの連中を入港させておいて、私達には古びた宇宙港……相変わらず商売が上手な事で……」「あらかじめ連絡はしておいたはずですが……？」

「フッ……まあいい……もし今後同じ事をしたら、今度こそ本気でグラナダにコロニー落としをするからねえ……」

「……心得ておきましょウ……それよりもこれをご覧下さい……」

そう言ってオサリバンが胸元から一枚の紙切れを取り出し、シーマに手渡した。

「なるほど……行方不明だった地球本星第一軌道艦隊がこの星系に現れたそろじやないか……おまけに艦隊旗艦があのヤマト……それに15年前に地球に落下して修復されたSDF-1マクロスもいるらしい……」

「やうです……おまけにロンド・ベルと行動を共にしてこゐよつで……」

…

「それと…もう一枚の紙切れには波動エネルギー・コンバータの在庫確認依頼が書かれてあるが…どうやら本星のマヌケ共はエンジンがイカしてゐらしいな…」

「どうやらそのようで…情報によればあと一週間ほどでリンボス空域に到達するようですね…」

「……で、あんたはどうするつもりだね…連中の艦を修復するのかい…？」

「いいえ…私個人としてはそんな事はさせないつもりはありません…例えカーバイン会長の命令があつたとしても…」

「その方がいい…何せ私たちは一年前の“星の屑作戦”でのヤマトに酷い目に遭わされたからねえ…」

二年前、ネオ・ジオン軍はリンボスとその周辺空域で大規模な作戦を実行し、地上で連邦駐留軍の行動を釘付けにするのと同時に、スペースコロニー群を襲撃して戦力の分断を謀つていた。

そしてスペースコロニーの一つ、アイランド・イーズを奪取して核パルスエンジンを点火してリンボスにコロニー落としを実行しようとした。

だが、連邦軍総司令部からの要請を受けて出撃したヤマトの波動砲によつてアイランド・イーズは消滅、そのせいでシーマ達は撤退を余儀なくされたのであつた。

「全くあの時程悔しい思いをした事はない…せめて我々にもあの波動砲があればヤマトを逆に潰せたものを…」

「致し方ありませんな…何しろ本星の連中はセコ過ぎますよ…我々には波動エンジン運用技術だけを伝えて、波動砲の製造技術を秘密にすることは…おまけに南極条約の追加事項に波動エネルギー兵器の所有禁止まで明記して…何処まで本星の連中はセコいのか…どうせならこいつその事、地球本星が潰れてくれれば…」

オサリバンの発言を聞いたシーマは、何やら意味有り気ないヤリと
して彼に切り出していた。

「常務……こりだけの話なのだが、我々はもう一度“星の屑作戦”を
やろうと思う……それも規模は前回以上の物をね……それには今一度あ
なたの協力が必要なんだがね……」

「いいでしょ……是非とも何なりと協力させて頂きますよ……」

第8話 策謀のフロン・フラン（その2）（後書き）

以前、世界観設定で「ガンダム」系戦艦が、波動エンジンを持つていても波動砲を持たない理由を劇中で明かすと書きましたが、今回の話で明らかにしましたがどうだったでしょうか？

いかにも取つてつけ感は否定できませんが、その所は「容赦を……

次回、「0083」に出て来たケリイ・レズナーが登場！ ジャンク屋としてバーニーと顔合わせしますが……

第8話 策謀のフォン・ブラウン（その3）

同日 12:45 フォン・ブラウン工場街

その頃、バーニィはフォン・ブラウンの工場街の一角にあるジャンク屋を訪れていた。

「ケリイさん」無沙汰です、また来ました！ザクのバーツ、良いの入つてますか！？」

「来たかバーニィ：その辺のバーツの山にあるから適当に持つて行け…客が来るんでな、あまり散らかすなよ…ところでウラキの奴は元氣か…？」

「ええ、相変わらず二ソジンは食べられませんが…」

バーニィの発言を聞いたケリイ・レズナーは少し笑みを浮かべると、作業小屋へと入つていった。

彼もまたジョン軍に所属していたものの、以前の戦闘で左腕を失う重傷を負い、やむなく退役してつてを頼つてジャンク屋を営んでいたのだった。

バーニィが重機を動かしバーツの山からお目当てのザクの部品をより分けていると、この工場街には似つかない一台の高級車がケリイの家の前に止まり、その中から一人の女性が現れて作業小屋へと入つていった。

バーニィは重機を動かしつつその女性の横顔を見て、誰かに似ているような気がしてしばらく考えていると一人のある女将校に思い当たつた。

(あの女…変装してゐるナビ…シーマ中佐ぢやないか…?)

バー＝イは重機をオートモードにしてその場から作業小屋にそつと近付くと、内部の話に聞き耳を立てた。

「……それで、このモビルアーマー、ヴァル・ヴァロはいつ納入出来るのだ…?」

「細かい調整さえ済めば、明日の夕方にでも…」

「分かった…代金はその時と言つ事で…ところでケリイ、お前さんは現役に復帰するつもりはあるかね…?」

「悪いがそのつもりはない……今のネオ・ジオンはただのテロリストだ…信念や理想を忘れた所に戻るつもりはない……それに俺には今、身重の妻がいる…彼女やその子供のために、俺は一生ジャンク屋の親父として生きて行くつもりだ…」

「フツ…今のお前さんの発言、耳に留めておくよ…それよりもこのヴァル・ヴァロは新しい作戦のために必要な機体だ、手抜かりがあつては困る…」

(新しい作戦…一体何だ…)

バー＝イは作業小屋から重機に戻る間ひたすら考えていたが、やがてある考えに思い当たり、重機を止めて乗つて来た軽トラックの場所までたどり着いた時、ケリイの妻であるラトーラと鉢合わせした。

「あらバー＝イさん、いらしてたんですね？」

「ああどうもラトーラさん…僕は急用が出来たので帰ります…ケリイさんによろしく…」

バー＝イを乗せた軽トラックがすぐさま走り去ると、ラトーラは不思議そうな表情で作業小屋の中にはいるはずのケリイの側に行こうとした時、彼とシーマが外に出て来ていた。

ヒツヤにてラトーラは表情を固くしてシーマを睨むと、シーマは不敵な表情でラトーラと相対した。

「おや……可愛い奥様じゃないか……せいぜい大事にするこいつだね……」

そう言つとシーマは先程乗つて來た高級車でその場を後にして、それを見送つたケリイはラトーラの側に寄り添いながら呟いた。

「心配するなラトーラ……何があつても俺はお前との子を守る……」

第8話 策謀のフロン・フラン（その3）（後書き）

「〇〇八三」中盤に出て来た、ケリイとラトーラの登場でした。

この二人、本編では一緒に住んでいても夫婦なのか恋人なのか明確にされてませんでしたが、今作品では結婚しているという設定にしました。

劇中で、「ウのニンジン嫌いの話題が出ましたが、次回以降度々このネタが出て来ますのでお楽しみに！」

第8話 策謀のフロン・ワクワン（その4）

同日 13:28 ネル・アーガマブリーフィングルーム
「本当なのかバー＝イ！？」のフロン・ブラウンにあのシーマが来てこるのは…？」「

ブリーフィングルームではヘンケンが、工場街から戻つて来たバニイからシーマの件について報告を受けていた。

「それでバー＝イ、シーマが言つてた“新しい作戦”ってどんな内容だったんだ？」

「あまり詳しい内容は聞けなかつたんですが…“星の屑”がビデオとか…」「…!? 連中、また一年前の再現をするつもりなのか…？ 懲りない奴らだ！」

それを聞いたヘンケンは、思わず怒りを表わにして、ジユドーは納得したように頷いていた。

「それでか…この前シャングリラコロニーにシーマのおばさんが攻め込んで来たのは…やっぱりブライトさんが言つてた事はホントだつたんだ…」

「でも艦長、この事を早急にヤマトの古代艦長に知らせないと…何かあつてまたコロニー落としでもされたら…いくらネル・アーガマのハイパー・メガ粒子砲でも防ぎ切れません…」にはやはつヤマトの波動砲でなければ…」

心配そうな表情のエマ・シーンをよそに、ヘンケンは深刻そうな表

情で切り出していた。

「実は…先程ヤマトの古代艦長から連絡が入ったのだが…ヤマトを含む旧第一軌道艦隊は全て波動エンジンの出力低下の影響でワープはおろか…切り札の波動砲が使用不能だと言つ事だ…おまけに追撃して来る“奴ら”的目を欺くために、進路を迂回するそうだ…そのおかげでリンボス空域到着予定が一ヶ月後だそうだ…」

ヘンケンの告白に、その場にいた一同は思わず絶句していた。

もしこの一ヶ月の間に、コロニー落としが実行された場合、どのように対応すればいいのか
その場にいた全員がそう考えていたのだった。

第8話 策謀のフォン・ブラウン（その5）

A · D · 2205 8 · 25 16 · 04 フォン・ブラウン工
場街

翌日夕刻近く、フォン・ブラウンの工場街の一角にあるケリイの作業小屋前で、ラトーラがヴァル・ヴァロを取り取りに来たシーマ一行に凄まじい勢いで抗議していた。

「あなた達いい加減にして下さこーもつこれ以上私のような戦争孤児を増やさないで下さい！」

「しかしねえ奥様…約束は約束なんだがね…」

「お金なんていりません！私は主人と昨夜話し合つて決めたんです！だから帰つて下さい！」

ラトーラのその発言にシーマは困惑しつつも、それが真実であるかをケリイに問いただしていた。

「おいけりイ…今あんたの奥様から聞いたが本当の事なのかい…」

「本当の事だ…これ以上悲しみに溢れた人々を増やさないためにも、あれを渡す訳には行かない…悪いがこれから鉄屑にする…」

「フン…そうかい…あんたがその気ならこちらにも考えがある…

おい、やれ！」

シーマの命令で、その場にいた部下がラトーラを捕まえ、銃口を彼女の頭に押し付けた。

「――シーマ…貴様――！」

「「」のシーマ・ガラハウを裏切った報いだよケリイー悪いがこの娘と共にお前さんも死んで貰うよー！」

「ケリイー！私に構わずあなたは逃げて！」

銃口を突き付けられながらも、ラトーラは気丈に振る舞い、それが癪に触つたのかシーマはラトーラの頬に唾を吐いていた。

「フン…素晴らしい夫婦愛じやないか…だけどねえ、このシーマにはそんなもん効きやしないんだよ！さあどうするんだい！渡すものさつさと渡しちまいな！あたしゃ気が短いんだよ！」

シーマの脅迫にケリイが困惑していた時、「お前達、いい加減にしろー」の声とともにバーニイがライフルを片手に現れ、その後ろからジユドー、カミーユ、クリスがコスモガンを手にして立っていた。

ケリイとラトーラが心配なため、前田のブリーフィングの後にバーニイが三人に声をかけて様子を見に来たところ、案の定シーマ一行が来ていた…と言う次第であった。

「貴様は…確かに裏切り者のバーナード・ワイスマン…おまけにロンド・ベルの坊や達まで…」

「やいシーマのおばさんーその人をさつさと離してやれ！」

ジュドーの怒りに満ちた表情にもかかわらず、シーマは平然と呟いた。

「どうせ「」の辺りが潮時のことだね…お前達、ここはとにかくずらかるよー！」

「 「 「 「了解……」 」 」

シーマ一行は、ラトーラを捕らえたままその場を離れようとした時、ケリイが隙を見てラトーラを捕らえている兵士に体当たりをしようとした。

だが、その兵士がケリイを銃撃しようとした時、ラトーラが身を持つてケリイを庇つて銃弾に撃たれていた。

ケリイは何とか倒れたラトーラを抱き起こしたものの、彼女は既に虫の息だった。

「 ラトーラ、大丈夫か？ 今すぐ病院に連れていく！」

「 ケリイ……私はもう駄目……短い間だったけど……幸せでした……」

「 ラトーラ、もういい……何も喋るな……」

「 あなたと私の子供産めん」

その言葉を最後にラトーラは事切れ、クリスが慌てて彼女の脈拍を探りうとしたものの時既に遅かった。

「 ケリイさん……ラトーラさんは……息を引き取りました……」

クリスの涙混じりの告白にて、ケリイはラトーラの側に座り込み彼女の死を悼んでいた。

すると、工場街の一角から爆発音が起こり周囲は煙に包まれていた。
「 な、何だあ！ ？」 工場街が爆発した！ ？
「 シーマのおばさん達……置き土産に工場街に爆弾仕掛けで行きやがつて……」

バニーとジュードーの発言で、うつむいていたケリイが思い出した

かのように囁いていた。

「あの辺りは確か…波動エネルギー・コンバータの製造ラインがある工場だ…それにしても奴らは一体…」

同日 16：36 輸送船ブリッジ

『しかしあま……随分派手におやりになりましたなシーマ様…』

資源搬入港から飛び立つたみすぼらしい輸送船のブリッジのメインパネルには、やや呆れ顔のオサリバンが映し出されシーマと会話していた。

「言つたはずだ常務…我々はどんな手段を使ってでも、ロンド・ベルの行動を止めてみせると…」

『だからですか…大量の波動エネルギー・コンバータを持ち出した上で、その工場を爆破したのは…?』

「まあ…こうでもしないと我々の今後の作戦に響くのでねえ…」

『それで…今後はどういうふうにするおつもりで?』

「フン…それは時が来てからのお楽しみという事で…」

『まあいいでしょ…それでは…』

オサリバンからの通信が切れるど、シーマは一人ほくそ笑みながら

呟いた。

「今に見ていらる地球本星の奴らめ… そのうひの息の根を止めたせても
ひつみ……」

第8話 策謀のフォン・フラウン（その5）（後書き）

ラトーラを死なせるのは少し抵抗がありましたが、これもストーリーを進めるためにあえて書きました。

登場人物が誰も死なずにストーリーが進むのは違和感があります。これからも登場人物の誰かが死ぬかもしませんが、その所はご容赦を…

（もしかしたら登場人物全員死亡も展開によつてはありかも… 伝説巨神イデオンかつ！？）

次回、ケリイが重大決意！？

第8話 策謀のフォン・ブラウン（その6）

同日 17：25 フォン・ブラウン市街地中央病院

バーニイ達は工場街爆破によつて発生した負傷者で溢れ返る中央病院にいた。

先程の事故の後、真つ先に駆け付けた彼らは負傷者の救助に当たり、また数多くの犠牲者を見るにつけ改めてシーマ一行の残忍な行為に怒りを新たにしていた。

一方、ラトーラを改めて診てもらつたものの、本人と懷妊していた子供共々死亡か確認されていた。

靈安室でラトーラの亡きがらに付き添つていたケリイは、しばらくの間うつむいていたものの、やがて何事かを決意したのかやおら立ち上がり、その場を立ち去つとした。

それに気付いたバーニイが彼を止めようとしていた。

「ケリイさん、何処に行くんですか！？」

「バーニイ、俺はラトーラや犠牲になつた人々の無念を晴らすために、今からヴァル・ヴァロに乗つてシーマを叩きに行く！」

「そんな無茶です！シーマ中佐はあなた一人でどうこうできる人じやないんです！」

「そうです！バーニイの言つ通りです！」

バーニイに続いてクリスも止めに入つたものの、ケリイは頑として聞く耳を持つていなかつた。

「お嬢さん、止めないでくれ……これは俺の戦いだ……今までの償いをしなければならないんだ……例えこの俺の命が無くなるとしても……！」
「だったら……生きて償いをすればいいじゃありませんか……もしかなたさえ良ければ、ロンド・ベルに来ていただけませんか……？」

クリスの突然の提案に、ケリイは正直困惑していた。かつて自分達と戦つてきた敵が自分に手を差し延べるとは思つてもみなかつたからである。

「いいのか……俺はお前達の敵だった男なんだぞ……それをお前達の仲間は簡単に受け入れるのか……？」

「大丈夫ケリイさん……よく言つてしまわないか……“昨日の敵は今日の友”ってね！」

「ジユドーの言つ通りですケリイさん……前例としてこじぬけるバー」「やさんがそうでしたから……」

ジユドーとカミーノの発言に、バーニィは頭をかきながら笑みをうかべていた。その様子を見たケリイはふと溜息をつきながら呟いた。

「フッ……確かにバーニィでも多少は役に立つてはいるんだな……バーニィに出来て俺に出来ない訳がない……分かった、ここはお前達の世話になる……あのモビルアーマー、ヴァル・ヴァロも一緒にな……」

「……」

第8話 策謀のフロン・フラン（その6）（後編）

ケリイ・レズナーがロンド・ベルに加入しました。今後の彼の活躍にご期待下さいませ！

次回、ゼントラー＝ティ軍に増援部隊が派遣されて来ます。部隊長はあの迷惑男！

第9話 激戦！第5惑星リンク（その1）

A · D · 2205 8 · 26 18 · 56

第5惑星空域ブリタイ艦

ブリタイ艦のブリッジでは、ブリタイが先程から苛々しながら歩き回っていた。日頃あまり感情を表に出さない彼が、この日に限って苛立ちを見せるのはよほどの事らしく、側に控えていたエキセドルが恐る恐る切り出していた。

「あのブリタイ司令…いかがなされました？」

「ふむ…実は増援部隊が今日着任するはずだったのだが…まだ合流せんのだよ…」

「はて…一体何処の部隊が合流するのですか？」

「ボドル基幹艦隊、第109分岐艦隊所属第7空間機甲師団だ…」

その部隊名を聞いた途端、エキセドルは思わず慌てふためき、持つていた端末を落としそうになつた。

「まさか…あのカムジン・クラヴショラの部隊ですか…？いけません！彼の通り名は『存知のはずですぞ…』

「分かつている…“味方殺し”だる…」

「知つておられるなら何故彼の部隊を…私は知りませんぞ！何があつても一切関知しませんぞ…」

エキセドルが叫ぶのと同時に、ブリタイ艦の艦体に衝撃が走るヒーダー要員から報告が入った。

「友軍艦隊デフォールド！近過ぎますっ……」

「だ…だから言わんこつちやない…」

エキセドルが床にへたり込むのと同時にカムジンから通信が入って来た。

『第109分岐艦隊第7空間機甲師団カムジン・クラヴシェラ、ただ今着任致しましたーっ！…』

通信パネルに姿を現したカムジンは、√サインを出しながらブリタイに着任の報告を行っていた。

その横から副官のオイグルがカムジンにそっと囁いていた。

『団長、ぶつかった艦は5隻ですぜ…賭けは俺の勝ちって事で…』
『やめとけオイグル…今、ブリタイ司令殿に挨拶しているんだ、少しは控えろ…』

これを見ていたブリタイは少し顔をひきつらせながらも、カムジンに切り出していた。

「カムジン！せっかくやって来たチャンスを不意にするつもりはあるまい！今後は私の指揮下に入るのだから、命令は順守するようにな！そもそもなれば送り返す事になるのだからな…」

『…………分かったよ…で、俺は何をすればいい？』

「前方に見える惑星リング上にマイクローンの艦隊を誘い込み、奴らを捕獲して欲しい…できれば無傷でな…」

『了解…それで作戦はいつ決行だ？』

「これから具体的な事を決めねばならん…遅くとも24時間以内には作戦開始できるはずだ…』

『了解！そんじゅ楽しみに待ってるからよ。』

第9話 激戦！第5惑星リンク（その1）（後書き）

“味方殺し”ことカムジンの初登場でした。

マクロスTV版では暴れまくっていたカムジン…

今回の作品中でも大いに暴れまくるでしょう…

カムジン・クラヴシエラ

「今回もこの俺様が主役だ〜〜〜つ！！！今度こそマクロスの連中をぶっ潰す！」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その2）

A · D · 2205 8 · 27 10 · 56

マクロス艦内市街地カフェテリア

その頃、ロンド・ベルは第5惑星に近付きつつあった。そんな中、古代とユキは朝早くからマクロスに出発していた。
この日は珍しく敵襲も無かつたため、そのおかげで一人は早く出発する事が出来たのであった。

古代が軍広報部員と共に週刊誌編集部を訪れている間、ユキはクローディア、フォツカー、それに三人娘とお茶を飲んでいた。

「これ、頼まれてた映画のチケット…それとレストランの予約、入
れといておいたわよ…」

「すいませんクローディアさん…何か急に無理言つたみたいで…」

ユキがクローディアにペコリと頭を下げていると、シャミーがうら
やましそうな表情で呟いた。

「いいなあ～ユキさん～これから古代艦長と一緒にドートだな
んてえ～！」

「いらっしゃい～～アンタ何物欲しげに言つてんの～？」

キムの突っ込みにシャミーが小さくなると、その場にいた一同から笑い声が上がっていた。

「でもまあ良かつたじゃないかユキちゃん！アイツもやつと休む気

になつたんだ、せめて今夜は……ムフフ……！」

「もうつ！フォッカーさんつたら相変わらずエッチ何だからあ！」

フォッカーの意味ありげな発言にユキが赤くなつて抗議している所に、古代が姿を現した。

「あ～つお帰りなさい古代艦長！お疲れ様で～す！」

「…………シャミー君…君はどこかのメイド喫茶の店員か？」

シャミーの発言に古代が呆れるのと同時に再び一同から笑い声が上がっていた。それが落ち着くとフォッカーが古代に編集部との事を切り出していた。

「それでどうだつた…上手くいつたか？」

「ああ、万事全て解決さ…編集長が平謝りして、来週発売の週刊誌にお詫びの記事を掲載するつてさ…」

「じゃあ、あのスクープ写真はヤラセみたいなもんか？」

「どうやらそららしい…カメラマンが、俺とミンメイが一人きりになるチャンスを待つてたらしい…」

意外な事の成り行きに、その場にいた一同は思わず椅子からずり落ちそうになつっていた。そんな中、ユキが手元の時計を見て古代に催促していた。

「ねえ古代君、そろそろ映画始まるわ…早く行きましょうよ…」

「ああ、そうだな…じゃあそういう事で…」

二人がいそそとカフェテリアを後にすると、再びシャミーが呟いていた。

「あ～あ……行っちゃった……映画見て食事してそれから…………いやあ

～ん！？」

「シャミー……アンタ妄想し過ぎぞ……」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その2）（後書き）

ふと思つたのですが、シャリィは何となくメイド喫茶の店員にいもうなタイプではないかと…

初代マクロスは今時のアニメを先取りした感がします。

次回、輝と未沙が再び喧嘩！？

第9話 激戦！第5惑星リンク（その3）

同日 11：09 マクロスマインブリッジ

メインブリッジで未沙は、一枚の人事発令書を目の前にして気分が重くなっていた。その書類には、ミンメイを助けた事により少尉から中尉への昇進が書かれており、自分と同階級となるために思わず絶句していた次第であった。

（何であの命令違反男が昇進しなきやならないのよ…これじゃ世も末ね…）

未沙がそう思っている所に、先程偵察に向かった時の本人から通信が入っていた。

『バーミリオンリーダーよりデルタ1へ！艦隊周囲50宇宙キロ圏内の偵察完了！これより帰艦します！』

（偵察に飛び立つて30分しか経っていないのにもう帰艦…？…少しあ炎を据えなきや…）

そう思った未沙は早速輝に返答を開始した。

「ヒカラーテルタ1、あなたちゃんと偵察したんでしょう？…万一と詮づ事もあるんだからもう一度偵察して来なさい…」

同日 同時刻 輝のバルキリー「クピット

輝は未沙の通信を受けたものの、釈然としない気分になっていた。

(「一体何言つてんだあのおばさん…人が報告してんのにあんな言い方無いだろつ…」)

一瞬のうちにそう思い、反論するべく未沙に返答を開始した。

「あのですねー異常が無いんだから帰艦するって言つたんですーそれをもう一度つてどうこいつ事なんですかー?」

『あなたね、念には念を入れた方がいいのーとにかくこれは命令ですーせつせつと行きなさいー』

「…………ったく…………分かりました!もう一度偵察しますっ!以上ー」

『ちょ……………』

未沙からの返答もそこそこに通信モニターを切り、輝はマックスと柿崎にもう一度偵察に向かいつゝ話を告げると、柿崎が溜息をつきながら呟いていた。

『隊長…あの中尉、なんか嫌な感じっすねえ…せめてヤマトの森大尉だったら喜んで従うんすけど…』

『柿崎君、ぼやかないぼやかない…』

マックスからも通信が入ると、輝まで溜息をつきながら呟いていた。

「まあ、とにかく仕方ない…もつ一度偵察しますか……」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その3）（後書き）

輝と未沙、相変わらずの仲の悪さですが、そのうち一人の間が接近していくのはずです。この作品では、それまではかなり時間がかかりますので「」容赦を…

第9話 激戦！第5惑星リンク（その4）

同日 21:15 ゲストルーム

「今日は楽しかったわあ！映画も良かつたし、お食事も美味しかつたし！」

マクロス艦内にある士官専用ゲストルームでは、ユキが今日一日を振り返り、飛び切り上機嫌で古代に話し掛けていた。
彼女の首元には、古代からプレゼントされたネックレスが光り輝いていた。

「それにこのネックレスまで買って貰つて…高かつたでしょ？」
「そんな事ないよ…君が店先のショーウィンドウを見て欲しいそぶりしてたからね…プレゼントしたかいがあつたよ…」
「ええっ本当に？ありがとう古代君！」
「別にいいよお礼なんて…たまにこうじつ事しないと“釣った魚に餌やらない”って言われそうだからな…」

古代の発言にユキは思わず彼に突っ込んでいた。

「私はお魚かいつ！？そんな事言つならお仕置きだべえ～～！」
「…………君は昔のアニメキャラか？…………それよりもそのお仕置きつてどんなのだよ？」

古代が呆れた表情で呟くと、ユキは赤くなりながらも呟いた。

「とつても…エッチな…お仕・置・き………今夜は寝かさないわ…」

「それ……僕が言つべき台詞なんだけど……まあいいやお姫様……」要望に答えて……

古代がユキにキスをしようとした時、彼の携帯電話が鳴り響き出でみると、相手はフォックターだった。

『いよ～っ古代！俺だあ～～！もしかしてお邪魔だったかあ～！？』

フォックターのあまりの酔っ払い振りに内心呆れつつ、不満顔のユキを田にしながら古代は切り出していた。

「一体何の用事だフォックター……俺達これから……」

『わあ～～つてるよ！でもその前に久々に一杯やらないか～？』

『いや…しかしなあ…』

『ユキちゃんの事だろ？大丈夫！今、隣にクローディアに早瀬、それに二ナさんにウラキもいるから一緒に来ればいい！場所は市街地のど真ん中にあるラウンジバー“カサブランカ”だ…そこで飲んでるからな、待ってるぞ…』

フォックターが話すだけ話すと一方的に電話を切られ、古代は少し困惑していた。

「……全くアイツは昔からこうだ…まあお楽しみは後回しにして行きますか？」

「仕方ないわね…でも一杯だけよ…そつじやないと…ね…」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その4）（後書き）

実はこの作品、数年前に大学ノート5冊といつボリュームで完成したものを公開しています。特に、古代とユキのラブシーンはここでは公開できないくらい過激なもので、この作品発表にあたり内容を大幅に改めてお送りする事にしました。

次回、マクロス劇場版をほぼ再現します。

第9話 激戦！第5惑星リンク（その5）

同日 21・30 ラウンジバー“カサブランカ”

古代とユキが指定されたラウンジバー“カサブランカ”にたどり着くと、二ナ・パープルトンが立ち上がって二人を迎えていた。

「古代艦長、それに森さん、せつかくの休暇のところを御呼び立てしてすみません…フォックカー少佐がどうしても一人を呼べって言うので…」

二ナが申し訳なさそうに言いつと、古代もまた切り返していた。

「いやあいいんです…アイツは昔からそうでしたから…やつぱり二ナさん達もそうだったんですね？」

「ええ…実はさつきまでいたモンシア中尉に連れて来られたんですけど…それが中尉と後から来た早瀬さんが揉めちゃって…」

古代がそつと未沙の方を見ると、ムッとした表情でソファに座っているのが見てとれた。その様子をみたユキは二ナにそつと耳打ちしていた。

「それでそのモンシア中尉は今どこにいるの？」

「運良く佐渡先生がいらして、中尉を外に連れ出しました。今頃二人でどこかで飲んでいると思いますよ…」

「何か佐渡先生にまで迷惑掛けちゃつたらしいな…」

古代達三人が立ち話をしていると、既に出来上がった状態のフォックাが話しかけてきた。

「うわーいそこの三人！立つてないでさつさと座れー改めて乾杯するだおー」

三人はフォックাの勧めでようやく席に座り、乾杯すると、コウが青い顔をしてテーブルの上を凝視していた。それに気付いたユキがコウに話し掛けていた。

「どうしたのウラキ君、顔色が悪いわよ？」

「あの森さん…実はコウはニンジンが苦手なんです…」この名物の野菜ステイックを頼んだらこれが出て来たと言ひ訳で…」

二ナの説明にコウを除いた一同が爆笑していると、輝が書類を片手に現れた。

「少佐、明日のパトロール予定表をお持ちしました…」

「ん…」苦笑…まあお前も一杯やって行け…」

「はあ…しかし…」

輝はそう言いながら未沙の方を見ると、ムッとした彼女の表情が目に入り、思わず気兼ねしていた。

未沙の方もそんな輝の態度に気付くと、即座に席を立つていた。

「私帰ります…お邪魔でしうか…」

「ちょ、ちょっと未沙…」

慌ててユキが未沙を止めるのを見たフォックाは輝と未沙を一喝していた。

「うら輝ーとにかく座れーそれに早瀬ーお前もだ！」

未沙は無言のまま席に座り直し、輝はその隣にそっと座っていた。相変わらずムツとした表情の未沙を見て、フォッカーは彼女に話を振っていた。

「何だ早瀬そのヅラはあ…仕事を離れたら少しばらしくしろ…見てみる…コキちゃんや一ナさんなんか一段と綺麗じやないか…」

フォッカーに話を振られた二人は思わず赤くなつたものの、相変わらず無言のままの未沙にフォッカーがさらに続けていた。

「いいか早瀬…いくらお前さんが女性初の士官学校首席卒だからってお前は女だ……時には男の言つ事が間違いであつても素直に認めるのも大事なんだ…」

それでも未沙が無言でいるのを見ると、今度は古代に話を振つていた。

「おい古代！お前はいつになつたらコキと結婚式を挙げるんだ！いつまでも先伸ばしじゃあ彼女に対しても失礼だぞ……それに輝とウラキ！男つてのはなあ…時には強引さが必要なんだ…好きな女がいたら力付くでもモノにしなきやイカン…」

フォッカーの演説に困惑する一同を見たクローディアは、彼を止めるために切り出していた。

「ちよつと口イ…飲み過ぎよ…話がだんだんぐくなつてるわ…」

クローディアの忠告にもかかわらず、フォッカーはさら口で話を続けていた。

「いいか、今からお前達に男と女の愛の素晴らしさを見せてやる…

目を開いてよく見とけ……クローディア…愛してるぜ…」

「ちょっと口イ！みんなが呆れて……」

クローディアの抗議にもかかわらず、フォッカーは強引に彼女を押し倒し、それを見ていた一同はただ呆然としていた。

するとそこに携帯電話が鳴り響き、思わず全員が自分の携帯電話を取り出していた。（その場にいた全員の着メロが、ミンメイの持ち歌“私の彼はパイロット”だった…）

鳴り響いていた持ち主の輝が話し始め、やがて切羽詰まった表情で電話を切ると一同に切り出していた。

「あの…家族の者が急病で…とにかく失礼しますっ！」

そう言つと早にその場を去つていった輝を見たフォッカーは不審な面持ちで呟いた。

「ああー？家族だあー？」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その5）（後書き）

今回、携帯電話ネタを使ってみました。着メロが同じなら、その場の人々は必ず一度は手に取るでしょうから：

何かタイトルに偽りありの状態が続きますが、今一度お待ち下さいませ…

第9話 激戦！第5惑星リンク（その6）

同日 21:55 マクロス艦内展望室

誰もいない展望室に、サングラスを掛けたミンメイが一人ベンチに座っていた。そこに輝が息せき切つてやって来た。

「お待たせミンメイ…」

「やだ…分かつちゃった？」

ミンメイはサングラスを外しつつ、照れ臭そうに微笑んでいた。

「だつて誰もいないし…それに私服姿で写ってる写真集、持つてるから…でも僕のケータイ番号、よく知ってたね？」

「あら忘れたの？」この前閉じ込められた時、番号とアドレス交換したじゃない…」

輝が電話のメモリーを確認すると、確かに番号とメールアドレスが載つており、やつと以前の事を思い出していた。

「あ、ゴメンー今思い出した……それよりも今日はどうしたの？」

輝が尋ねると、ミンメイは淋しげな表情で呟いていた。

「私…疲れちゃった…今の生活に…この前の件でマスク//に追いかかられるし、それにまた古代さんに迷惑掛けちゃって…」

「ああ、あの件なら大丈夫！古代先輩が軍広報部の人と掛け合つて、週刊誌編集部とは話がついたってわ…」

「そひ……それならいいんだけど…………あ、あれ……」

ミンメイは、展望室の窓外に見える第5惑星のリングに思わずくぎづけになっていた。

「綺麗ね……行つて見たいな……あんな所に……」

同日 22:15 第5惑星リング上

その頃第5惑星リング上では、カムジン達の部隊が集結し、ロンド・ベルを誘い込む準備を完了しつつあった。

「団長！全員配置に着きました！ いつでも行けます！」

「よし野郎共！ これより作戦を開始する！ A部隊はこれよりマイクローンの艦隊を攻撃しつつ、この惑星リングに誘い込め！ 後は俺達の部隊がマイクローンの奴らを捕らえてブリタイの親父の所に連れて行く！」

その時部下の一人が、接近しつつある所属不明機を捉えていた。

「団長！ 所属不明の小型機が一機こちらにやつて来ます！」

「何だつて！？ フン、俺達が行かなくても連中からやつて来たじゃねえか…… よし野郎共！ 作戦変更だ！ あの小型機を狙う！ 行くぞ！」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その6）（後書き）

よつやく話が動き出しました。これから先はマクロス劇場版のストーリーに沿つて進む予定です。

原作劇場版通りの展開になるかどうか…是非お楽しみに！

ロイ・フォッカー

「え……俺やつぱり戦死！？」

作者

「ああ……ひでしょい！」

第9話 激戦！第5惑星リング（その7）

同日 22・16 第5惑星リング上

「うわあ～綺麗～やつぱり来てよかつた！」

輝が操縦するバルキリーの機内で、ミンメイが着けていたヘルメットを外しながら歓声を上げていた。

しかし、急に不安になつたのかそつと彼に問い合わせていた。

「ねえ……勝手に持ち出して、後で怒られるんじゃないの？」
「平氣平氣！ どうにかなるつて！ それっ行くよ！」

輝はバルキリーのエンジンをフルスピードにするとリング内に突入し、縦横無尽に動かしているとミンメイは思わず目を伏せていた。やがて一人を乗せたバルキリーは氷塊を抜けると、前方には虹が見え、輝に促されたミンメイが見ると思わず歓声を上げていた。

「うわ～っす～」お～い！ 宇宙に虹が出来てるう～！」

上機嫌になつたミンメイは、自分の持ち歌である“サンセットビー チ”をアカペラで口ずさみ、それを聞いた輝もまた上機嫌でバルキリーを操縦し、つかの間の時間を過ごしていた。

だが、そんな時間も突然の通信が入つて終わりを迎えた。ミンメイはモニターに映し出された未沙から逃れようと、持つていたヘルメットで思わず自分の姿を隠していた。

『隠れても無駄ですよミンメイさん…』

「すみません……」

「早瀬中尉……」

輝も思わず申し訳なさそうな表情で未沙を見ていた。モニターに見える未沙は呆れた表情で切り返していた。

『呆れたわ……バルキリーを私用で使うなんて……』

『輝が悪いんじゃないんです……私が無理矢理……』

ミンメイが自分が悪いと説明しようとした時、未沙の横からカイフンが顔を出していた。

『ミンメイー早く戻るんだ!』

「兄さん……」

『一條君、今度の事がマスクミミにばれたらいミンメイの歌手生命は終わりだ……軍上層部には手を打つたが、君に対しては容赦しないからな!』

『分かつています……厳罰は覚悟の上です……』

『何て軍人だ!早く戻りたまえ!』

『分かりました……帰ろう、ミンメイ……』

輝が後ろに立てるミンメイの方を振り向くのと同時に、レーダーから敵襲の警告音が発せられていた。

「や、やつぱーーーー!」

敵襲の報は、未沙とカイフンの乗っている内火艇にももたらされた。

いた。

カイフンは、不安のあまりに未沙に向かって叫んでいた。

「な、なんとかしたまえっ！」

「分かっています！……」（ちから早瀬です！）フォックター少佐の部屋に繋げて下さい！」

同日 22：25 第5惑星リング上

一方、カムジンの部隊は接近してくる一機の小型機を的確に捉えていた。

「野郎共！マイクローンの連中を逃すなよ！A部隊はあの小型機を、俺の隊は戦闘機を狙つ！」「

「了解！－！」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その8）

同日 22:30 マクロス艦内士官居住区

「全くロイつたら飲み過ぎなんだから…」

フォッカーの部屋で、クローディアが呆れた表情でソファに寝転ぶ
フォッカーを見て呟いていた。

傍らには、先程のラウンジバーからこじままでフォッカーを抱き抱え
て運んだ古代とコウ、それに心配してついて来たユキが立っていた。

「全くコイツは昔からこじまだ…全然変わりやしない…」

「しかしウチのモンシア中尉もそうですが、フォッカー少佐も凄
い飲みっぷりでしたね…二ナなんか呆れ果てて先に帰っちゃいまし
たから…」

古代の発言にコウも同意していると、ユキがベッドから枕と毛布を
持つて会話に入っていた。

「でもこれで佐渡先生が加わつたら、地球圏一の酒飲みトリオにな
るわよね…」

「ユキ、それを言つなら“宇宙一”よ……とにかくゴメンなさい
ね最後まで付き合つてもらつて……とにかくみんな“いい夜”を…」

クローディアがそう言つた時室内の電話が鳴り響き、彼女が取りし
ばらく話すと緊迫した雰囲気に包まれていた。それに気付いた古代
がクローディアに問い合わせていた。

「どうしたんですかクローディアさん…？」

「未沙からなんだけど、一條君とミンメイさんを連れ戻しに出たら敵襲にあつたつて…それでロイに出撃してくれって言つてるけどこの状態じゃ…」

「悪いけど代わってくれ……早瀬君、古代だ！フォッカーに代わつて俺が出る！」

古代の突然の申し出にその場にいた一同は勿論の事、電話の向こう側にいる未沙も驚いていた。

『でも古代艦長…』

「とにかく事態が切迫しているんだ！今からならまだ間に合つ…それまで持ちこたえてくれ！」

『了解！急いで下さい！』

未沙からの連絡が切れると、古代はクローディアに切り出していった。

「クローディアさん、悪いがバルキリーの用意を頼む！それからマックスと柿崎に出撃命令を出してくれ！指揮は俺が執る！」

「分かった！アームド〇一に連絡して古代君の乗るバルキリーを用意させるわ！」

「あの、古代艦長！自分も同行させて下さい…」

「ウは今までのやり取りを聞いて、自分も出撃する事を決意し、古代に切り出していた。

「しかし…君のガンダムは…」

「大丈夫です！自分のガンダムフルバー＝アンなら、ブースターパ

ツク付きのバルキリーに十分付いて行けるはずです！」

「分かつた…この際少しでも戦力が多い方がいい…頼んだぞ！」

「了解！」

コウがそう言つて一目散にフォックナーの部屋を出て行くと、ユキが不安そうな表情で古代に呴いていた。

「古代君…大丈夫なの…？」

「ユキ…僕は必ず帰る…それまで待つていてくれ…」

古代はそう言つとすぐさまアームドロードへと向かつて行つた。なおも不安そうな表情のユキにクローディアが切り出していた。

「ユキ、私はブリッジに上がるけどあなたも行く？」

「はい…そうさせて下さい…ゲストルームで待つよりかはブリッジにいた方が…」

クローディアは頷くとユキを伴いブリッジへの道のりを急ぐべく、フォックナーの部屋を後にした。

しばらくしてフォックナーがソファから起き上がり、冷蔵庫にあつた水を飲み干して呴いた。

「……………つたく古代の奴…相変わらずお人よしだな…」

第9話 激戦！第5惑星リング（その9）

同日 22:39 マクロスメインブリッジ

クローディアとユキがブリッジにたどり着くと、シャミーがおぼつかない様子で管制業務を代行していた。その様子を見たクローディアはシャミーに切り出していた。

「シャミー、管制業務をユキに代わって！ユキだったら連邦軍本部で何度も経験してるから！」

「分かりました！ユキさんお願ひします！」

シャミーに代わってユキがインタークムを付けないと同時に、アームドロードにての古代から連絡が入っていた。

「こちら古代！早瀬中尉達の現在位置は！？」

「デルタより古代大佐へ！早瀬中尉達の現在位置は、艦隊右舷3時方向50宇宙キロ、ポイントN-25第5惑星リング上です！急いで下さい！」

「了解した！それと今後はこちらのホールサインは“イーグル”で頼む！」

古代とユキが会話している間に、連絡を受けたグローバルがブリッジに到着していた。

「済まんな古代君…フォッカーの奴が酔っ払ってなければこんな事は無かつたのに…」

『酔っ払いでも悪かったつすね～艦長～！…』

突然聞こえてきたフォックナーの声に、ブリッジ一同は思わず絶句しやつとの事でクローディアが問い合わせていた。

「ちょっと口イ！あなた今ビニ…」

『アームド02の格納庫さ…とにかく俺も出るからユキちゃんようしな…』

「了解です！フォックナー少佐は、ウラキ少尉のガンダムと共に古代大佐達の後に発進して下さい！」

『了解した！古代、先に行け！後で追い付く！』

『分かった！イーグル1、及びマックス・柿崎機発進する…』

古代及びマックス・柿崎がアームド01から発進するのをブリッジで確認していたユキは、祈るような想いで念じていた。

（古代君、無事に帰つて来て…）

同日 22:45 第5惑星空域 古代のバルキリー・クピット

アームド01から発進した古代は、早速マックスと柿崎に通信を入れていた。

「イーグル1からマックス、柿崎機へ！一条中尉に代わって俺が指揮を執る！ぐれぐれもよろしく頼む！」

『了解です！歴戦の勇士のお手並み拝見させて頂きます古代大佐！』

『そうですよ！大佐は自分達にとつて英雄ですからね！勉強させて頂きます！』

マックスと柿崎の返答に、古代はフォッカーが普段彼らにどんな教育をしているか思わず納得していた。

（さすがだなフォッカー……ちゃんと教育してるじゃないか……さすがヤマトの元クルーだ……）

そう思つてゐる間に、フォッカーのバルキリーとコウのガンダムフルバーニアンが追い付いていた。

「イーグルーよりスカルリーダーへ……お前、大丈夫なのか……？」

『なあに、これくらいどうつて事はない……それよりも古代、こうやって並んで飛んでもると昔を思い出すな……ヤマトがイスカンダルに行つた時の事を……あの時お前さんはまだ士官学校を出たてのヒヨツ子で、よく沖田のオヤジに怒られてたつけな……』

「ああ……そのおかげで今の俺がいる……って思い出話してゐる場合じゃないだろうが！」

『そりだつた！それじゃ俺は先に行つてるからよー』

そう言つとフォッカーのバルキリーはフルスピードを出してその場を離れ、古代は呆気にとられながら駆けこむ。

「…………」

第9話 激戦！第5惑星リング（その9）（後書き）

この小説を書きたかつた理由その2　古代進をバルキリーに乗せてみたかったからです。

彼の愛機はコスモゼロですが、それ以外の機体でも難無く乗りこなせるだろうと思つたからです。

コスモゼロは今現在、ヤマトの艦載機格納庫に保管されており、物語中盤辺りにある人物が搭乗する事になりますが…

果たして誰が乗るのかご期待下さいませ！

次回、第5惑星リング上は大混戦！

第9話 激戦！第5惑星リング（その10）

同日 22:51 第5惑星リング上

「畜生！しつこい奴らだ！」

輝は押し寄せるバトルスーツ隊を巧みにかわしながら叫んでいた。今更ながら訓練用のバルキリーに乗っている事を後悔していた。一方、未沙の方はなかなか攻撃してこない敵の動きに不審に思い始めていた。

「おかしいわ……敵は何で撃つてこないのかしら…………ええつ！？」

未沙とカイフンの乗つている内火艇は、とうとうバトルスーツ一機に組み付かれ、身動きが取れなくなっていた。

同日 同時刻 カムジンのバトルスーツコクピット

『団長！小型機一機確保しました！』

カムジンの乗る指揮官用バトルスーツ“ヌージャデル・ガ”のコクピットに部下の一人から報告が入っていた。

「よし上出来だ！あと一機の戦闘機モドキさえ確保出来れば後は言つ事無しなんだが……あの野郎ただ者じゃねえ！こっちの動きを熟知してやがる！何がなんでも奴を捕まえろ！」

『了解…………！？』

「おこづかしたつーへ返事をしつつー」

カムジンの問い掛けに、別の部下が切羽詰まつた表情で切り返して
いた。

『団長！3時方向からミサイル群キャッチーおそれべマイクローンの増援だと想われます！』

同日
22：56 輝のバルキリー・コクピット

それは突然の出来事だつた。今まさに輝のバルキリーに接近しようとしたバトルスースが、いきなり爆発四散していたのであつた。

「一体何だ……何が起こつたんだ……？」

輝が叫ぶのと同時に、機内のモニターに反応があり、そこにはフォツカーノの姿が映し出されていた。

『くおら～輝～～～！散々面倒かけやがつて～～～！』

「せ、先輩……！ 来てくれたんですか！？」

「たけとなくヤーダ！男たる者には、でなくちやイカン。……ヒツケ

「あの辻籠 もうかこども辻籠の仕事す

『バーロウ～～～！酒が怖くて戦争なんか出来るかつて～～～の！

?

輝と会話をしている最中にも、フォッカーは巧みに機を操縦しつつ、敵部隊を的確に攻撃していった。

そんな中、古代、マックス、柿崎のバルキリー三機並びにコウのガンダムフルバー二アンが追い付いていた。

同日 同時刻 古代のバルキリー・コクピット

フォッカーに遅れながらも、古代率いる臨時編成のバルキリー隊“イーグルチーム”とコウのガンダムフルバー二アンは、ようやく戦場に到着しつつあった。

「一条！無事か！？」

古代が通信モニターを開くと、輝とミンメイの姿が映し出された。

『古代先輩まで……それにマックス、柿崎……それにウラキ少尉のガンダムまで……』

輝が申し訳なさそうな表情をすると、古代は彼に切り出していた。

「一条、ここは俺達に任せてお前はマクロスに帰還しろ！」

『ええ……ですが、早瀬中尉とカイフンさんが敵に捕らえられて……』

「とにかく、二人は俺達が救助する！お前は早く戻れ！これは命令だ！」

『了解……くれぐれも気をつけて下さい古代先輩！』

古代の命令により、輝は直ちにバルキリーをマクロスに向けて行った。

「イーグルより各機へ！これより部隊を一つに分ける！俺と柿崎、

ウラキは早瀬中尉達を救助に向かう！フォッカーとマックスは敵の目を引き付けてくれ、以上だ！」

『了解！！！！』

古代達三人はフルスピードで、捕らえられた末沙達の乗る内火艇を追撃して行つた。

第9話 激戦！第5惑星リング（その11）

同日 23:05 第5惑星リング上カムジン機

「クソッたれ！あの戦闘機モドキを追いかける！」

カムジンは、自機のコクピットで部下達に叫んでいた。ほぼ目的が達成されようとした時に、突然敵の増援が現れたものだから慌てふためくのは当然の事であった。

「あんにゃるうー！」のカムジン一家を舐めるんじゃねえー！今にギャフンと言わせてやる！」

カムジンが叫んでいると、戦闘機モドキ（輝の訓練用バルキリー）を追跡していた部隊が後方から来た一機の戦闘機^{「オッカ」とマックスのバルキリー}がミサイル群を発射し、追跡部隊をあつという間に全滅させていた。
気が付けば、自分以外にいるのはほんの数機だけという事に気付いたカムジンはしばしの間呆然としていた。

「やるなマイクローンめ…まあいい…今回だけは見逃してやらあ…さつきの小型機だけでもサンプルは手に入れたからな…」にはおとなしく引き揚げるぜ…」

同日 同時刻 ブリタイ艦内格納庫

一方、古代達は末沙達の乗っている内火艇を追つて、ブリタイ艦内

に侵入していた。

ミサイルやビームライフルで周囲を破壊しつつ格納庫に侵入した三人は、どうにか内火艇を発見していた。

未沙の方もバルキリー二機とガンダムを確認すると、古代に連絡を入れていた。

「大佐達…無事ですか！？」

「ああ…何とかな…とにかく早く降りてくれ！」

古代の問い合わせに応じ、未沙とカイフンが内火艇から降りていると、大勢のゼントラーディ兵士が姿を現し、逃げ遅れた未沙を捕らえるとカプセルの中に放り込んでいた。

そんな中、カイフンが柿崎のバルキリーに何とか乗り込むのを確認した古代は、柿崎に切り出していた。

「柿崎、ミサイルを発射してその破壊口から脱出しき！早瀬君は俺とウラキで救助する！」

『了解！大佐、ご無事で…』

柿崎は直ちにミサイルを発射しその破壊口から艦外へと脱出して行つた。

その間にも格納庫内では激戦が繰り広げられ、古代のバルキリーとコウのガンダムフルバー二アンは次第に追い詰められていた。やがてガンダムフルバー二アンのブースターと頭部が破壊され、コウはやむなく脱出せざるを得ない状況に陥つた。

いつも出撃する度にコウは二ナから“私のガンダム、必ず持ち帰つてよ…”と何度も言っていたものの、今回だけはその約束は果たせそうになかった。

(「めん、二ナ…今回はとても持ち帰れない…せめてデータだけで

も…)

コウは何とかデータを取り出し、ノーマルスースの胸ポケットにしまうとすぐさま「クピットから脱出したと同時に大爆発を起こしていた。

古代のバルキリーも、天井から突然現れたブリタイが鉄パイプを振り降ろし、バルキリーの頭部を破壊していた。

ブリタイは古代のバルキリーを壁面に押し付け、装甲を安々と引き剥がしてなおもバルキリーを痛め付けていた。

(――！？何て奴だこいつらは…とにかく脱出だ…)

古代は咄嗟に脱出レバーを引き、コクピットから出ようとしたもののブリタイに捕らえられしまい、その瞬間今まで乗っていたバルキリーは大爆発を起こし、ブリタイはその衝撃で床に転がっていた。

「大丈夫ですか司令！？」

駆け寄つて来た部下達にブリタイは平然と立ち上がり、捕らえたままの古代を見ながら指示を出していた。

「心配するな…お前達とは作りが違う…とにかくこのマイクローンと先程の一人を別部屋に運べ…」

「了解！」

同日 23:11 第5惑星空域フォックターのバルキリー「クピット

『フォッカー少佐…古代大佐のバルキリーとウラキ少尉のガンダムの識別信号…消えました…』

柿崎が沈痛な表情で、フォッカーに報告していた。その発言を受けて、マクロスに帰還途中に引き返して来た輝が切り出していた。

『まさか…古代先輩とウラキ少尉が…死んだ…』

『いや…古代達は生きている…』

フォッカーは即座に否定してさらに発言を続けていた。

「……さつきから敵の攻撃を見て気付いたんだが…奴ら今回の目的は、初めから俺達を捕らえる事だったと思う…もし古代達が死んだとしたら、今頃俺達を追つてきてもおかしくないはずだ…」

事実、フォッカーの言つ通り、ゼントラーディ軍からの追撃は無かつた。

やがてマックスが意を決してフォッカーに切り出していた。

『少佐！自分はこれから古代大佐達を救助に向かいます！』
『……分かった…くれぐれも気をつけてな…』

フォッカーの許可が下り、マックスはすぐさま自分の機をフルスピードでブリタイ艦へと向けて行つた。

その様子を輝の後ろにいたミンメイはつづきながら呟いた。

『どうしようつ…こうなったのもみんな私のせいだわ……どんな顔でユキさんに会えばいいか分からない…』

『ミンメイ…ユキには俺から詳しく述べ…お前さんは心配する事はない…』

今にも泣き出しそうなミンメイを見つめながら、フォツカ
ーは思っていた。

（しかし…何て説明すればいいんだ…古代を必ず連れて帰るとユキ
に約束したのに……）

第9話 激戦！第5惑星リンク（その11）（後書き）

カムジンの本来の愛機は“グラージ”ですが、両腕がミサイル発射口でどうやって格闘すればいいのやら……

従つて今作品では、劇場版で彼が乗っていた“ヌージヤデル・ガード”に変更しました。

次回、古代、未沙、コウの運命はいかに……

第10話 ファースト・コンタクト（その1）

A · D · 2205 8 · 27 23 · 36 アームド01格納庫

「古代君達が敵の捕虜に……そんな……」

フォッカーからの連絡を受け、ユキはグローバルと共にアームド01の格納庫に来ていた。そこには古代達が行方不明との知らせを受けヤマトからは島が、アルビオンからはサウス・バンシングとモーラが駆け付けていた。

そしてニナもユキからの連絡を受けて、駆け付けていたのだった。

「とにかく古代の事だ……心配は無いと思つ……これまでだつて何度も死線をかいくぐつて必ずヤマトに帰つて来てたじやないかユキ……」

島は以前までの事を持ち出しユキを励ましていたが、当の彼女はそれでも不安感で満ち溢れていた。

「でも島君、今回は……」

「乗つっていたバルキリーが爆発したからつて言つても、死んだと決まつた訳じゃない……あいつの事だ、必ず戻つて来る……信じようユキ……」

「でも……やっぱり信じられないっ！」

ユキがそう叫ぶと、手で顔を覆いながら足早にその場から走り去つていった。島はそんなユキを追い掛けようとしたが、フォッカーに止められていた。

「そつとしておけ島…今はいりするしかないんだ…」

そしてフォッカーはグローバルの方に向き直り、ある提案を切り出していた。

「艦長…しばらくコキをマクロスに滞在させはどうでしょう？ヤマトに帰つても仕事に集中出来そうになこと思つのですが…」

「私は構わないが…島君、君はどう思う？」

「確かにフォッカーの言つ通りです…」二ナはグローバル艦長にお任せします…」

「分かつた、森君には早瀬君の業務をやつて貰おつ…わざも見事な仕事振りを見せてくれたからな…」

一方、二ナは「ウの行方よりもガンダムフルバーニアンの事を心配していた。

「私のガンダムが……ガンダムが破壊されたなんて…嫌よそんなの！」

そんな事を言いつつ泣きじゃくる二ナを見たフォッカーは、思わず彼女を平手打ちしていた。

「おいフォッカー！お前いくら何でもやり過ぎだぞ！」

フォッカーのその態度にバニングは抗議し、モーラが倒れ込んだ二ナを介抱していると、フォッカーが切り返していた。

「すいませんバーニングさん…ただこれだけは二ナさんに聞いてもらいたいんです…二ナさん、ガンダムやバルキリーの代わりはいくらでも作れる…だが、古代や早瀬、ウラキと言つた優秀な指揮官や

パイロットはそう簡単に作れるものじゃないんだ…」

その言葉に二ナは思わず衝撃を受け、フォッカーに謝罪していた。

「すみませんでしたフォッカー少佐…私が間違つてました…本当なら二ウの事を心配しなきやいけないので、つい仕事絡みでガンダムの事ばかり…」

「分かりやいいんだ…スマンな二ナさん…つい手が出てしまった…」

「いえ、いいんです…あれで私も目が覚めました…これからアルビオンに帰つて、みんなでこの先の事を考えます…」

第10話 ファースト・コントラクト（その1）（後書き）

本日9月25日は、古代進やタイガーマスクの伊達直人役を演じた富山敬さんの命日です。

富山さんが亡くなつて今年で16年…

もし富山さんが存命で、ヤマト復活編で38歳の古代進を演じていれば、また違つた印象になつたと思います。（決して山寺宏一さんがダメと言つてはいけないので……）

第10話 ファースト・コンタクト（その2）

同日 23:41 ブリタイ艦メインブリッジ

古代、未沙、コウはブリタイ艦内の一室に収容されており、未だ気を失つたままの三人をブリッジからブリタイとエキセドルがその様子を伺つていた。

「閣下、分析の結果敵のマイクローンは骨格から遺伝子に至るまで、全て我々がマイクローンになつた時と同じといった結果が出ました」

…

エキセドルの報告に、ブリタイはしばしの間考えた後切り出していた。

「ふむ……これはもはや我が艦隊で処理出来るような問題ではなくなつたな……直ちにこの事をボドルザー閣下に連絡を取つてくれ……」
「お言葉ですが……ボドルザー閣下は慎重なお方です……考え方直されとはいががかと……」

「いや、事は一刻を争つのだエキセドル……直ちにフォールド航行の準備を急がせてくれ……」

「分かりました……直ちにフォールド航行の準備をします……どうやらマイクローンが目を覚ましたようですが……」

同日 23:45 ブリタイ艦内の一室

古代達三人はようやく目を覚ますと、自分達の置かれている状況に直面していた。

中でもコウは、ガンダムフルバーニアンを失ったショックでこれ以上ないくらいに落ち込んでいた。

(二ナにどうやって説明しよう…いや、それ以前にここからどうやって逃げ出せるんだろうか…)

古代の方もまたひどく落ち込んでおり、ユキには“必ず帰る”と約束したのにそれが果たせずにいたのであった。

(ユキ…君にはもう会えないのか…今度ばかりは自信がない…)

未沙はと言えば、何故このような状況になつたのか、ただひたすら冷静に口に出していた。

「捕虜か…どうしてこうなつたのかしらね…」

それを聞いた古代は、即座に未沙に切り返していた。

「大体早瀬君が武装もない内火艇で飛んだからこうじう結果になつたんじゃないかな?」

「そもそものきっかけは、一条中尉がミンメイさんを勝手に連れ出したからなんですよ!それに私はフォックナー少佐に出撃命令を出したのに、何で古代艦長が出て来るんですか?あなたは休暇中だつたはずですよ!」

「フォックナーが酔い潰れてたんだ!俺が出なければ、君達はとっくの昔に…」

古代と未沙の激しいやり取りに、コウは堪らずに口を開いていた。

「今ここで言い争いをしている場合ですか…こうなつた以上、これ

かりどりあるかを考えるべきじゃないんですか……？」

「ウの発言で古代と未沙が沈黙していると、部屋の外から見える宇宙空間が突然白く輝き始めた。

未沙はそれに気づいて思わず呟いていた。

「これは……」の艦がフォールドしようとしてる……」

同日 23:51 マクロスメインブリッジ

「敵艦隊の一部、フォールド開始した模様……」

ヴァネッサの報告にグローバルを始めとするブリッジメンバーが、レーダーに映し出されたフォールド反応を注視していた。

「ヴァネッサ君、敵がフォールドした地点は？」

「はい……古代大佐達が行方不明になつた地点と同じ第5惑星のリング上です……」

「そりが……ところでクローディア君、森君は今どこにいるかね……」

「はい……先程メールしたら、ゲストルームにいるそうですが……多分今夜は眠れそうにないでしょうね……それよりも艦長、これからどうするつもりですか……？」

「明日の朝、森君と一緒に艦長室に来てくれ……話はそれからだ……」

第10話 ファースト・コンタクト（その2）（後書き）

この小説を書きたかった理由その3 マクロスTV版第11話 & 12話を見ていて、これを未沙と後から救助に来るマックス以外のキャラを、他のキャラでやつたらどうなるかを見たかったからという理由からです。

今作品内では、古代とコウのどちらかがボドルザー達の前でキスするか…

それは後々までのお楽しみ！

次回、ロンド・ベル本隊に合流するネーハル・アーガマ艦隊の活躍を描きます。

そしてジュドーがやっとあの機体を手に入れる！？

第10話 ファースト・コンタクト（その3）

A · D · 2205 8 · 28 8 · 15 ネエル・アーガマブリ
ツジ

ロンド・ベル本隊に合流するべく、ネエル・アーガマ艦隊はグラナダを発進し、リンボス軌道を時計回りに航行していた。

既に彼らの元にも現ロンド・ベル司令の古代が行方不明との知らせが入つており、ヘンケンはもとよりジュドー達も沈痛の想いで溢れていた。

今もブリッジのメインパネルには、ブライトの留守を預かるアムロとクワトロの姿が映し出されていた。

「それよりもこちらでも問題が起きてな……グラナダの波動エネルギー・コンバータ製造工場がシーマ・ガラハウの連中により爆破されんな……」

『本当なんですかヘンケン艦長!…?』

「おそらく彼らは何かを始めようとするらしいな……」

『シーマ・ガラハウ……あのデラーズフリートの生き残りか……これは厄介な事になりそうだ……』

パネルの向こう側でクワトロが呟くのと同時に、レーダーオペレーターのファ・ユイリイが何かをキヤッチしていた。

「艦長!艦隊進行方向80宇宙キロにネオ・ジオン艦隊をキヤッチしました!数およそ20隻!」

「何だと……済まんアムロ君、また後でな！」

『はいーそりらも気をつけて下さい！』

アムロとの文信を終えると同時に、前方のネオ・ジオン艦隊からの通信が入つており、モニターにて司令官であるマ・クベの姿が映し出されていた。

『久しぶりだねロンド・ベルの諸君……』

『やいーマ・クベのオッサン！今頃何しに来やがった！？』

たまたまブリッジにいたジユードーが、相変わらず不気味な印象のマ・クベに怒りを現わしていた。

『フッ……お前は確か一コードタイプのジユードー・アーシタ……相変わらず威勢のいい男だ……』

そう言つてマ・クベは、傍らに置いてある自身のコレクションである壺を愛でていた。

「へッ！相変わらず趣味の悪いオッサンだなあんたは！？」

「ジユードー控えろ……それでマ・クベ司令、一体何の用事かね？」

ジユードーを一喝したヘンケンは、单刀直入にマ・クベに切り出していた。

『早速だが用件を言わせて貰つよ……諸君達と行動を共にしている宇宙戦艦ヤマトとSDF-1マクロスの引き渡しを要求する……』

マ・クベの突然の要求に、その場にいた一同は思わず絶句しじばりべしてジユードーが口を開いて拒否していた。

「冗談じゃない！そんな要求に答える訳無いだろ？」「…」
「けど、ヤマトとマクロスは俺達…いや、宇宙全体の希望の星
だ！テメーらに渡す訳に行かないんだよ！」

『フツ… そんな事を言つていられるのも今のうすだぞ… 今から
お前達に見てもらいたい物があるのでね…』

そう言つと別のモニターには、旗艦であるグワジン級戦艦の下部発
進口からワイマーに吊された一機のモビルスーツ キュベレイが現
れた。

「あれはもしかして… プルとプルツーのキュベレイ！」
メインパネルを見ていたジユドーが思わず叫ぶと、その一人から通
信が入つていた。

『ジユドー！助けてえ～！』

『アタシもいるぞ！何とかしてくれつてーの…？』

「プルにプルツー！大丈夫か！？」でもなんでマ・クベのオッサンに
捕まつちましたんだ！？」

『あんた達がシャングリラからロンド・ベルに合流したって聞いた
んで、プルと一緒にこつと思つたらこのザマだ！』

「とにかく俺が今からお前達を助けに行く… 待つていろ…』

そう言つとジユドーはブリッジから一歩散に走り去り、ヘンケンは
呆気にとられていたもののすぐさま命令を出していた。

「……つたぐジユドーの奴は… 全艦戦闘配備！ネオ・ジオン艦
隊を叩く…」

第10話 ファースト・コンタクト（やの3）（後書き）

Isst ガンダムに出ていたマ・クベの登場でした。

TV版では第37話でMSギヤンに搭乗して戦死した彼ですが、劇場版では生き残っている設定で、今作品ではそれを活かしました。

彼の趣味である骨董品集め…劇中ジュドーに散々こき下ろされましたが、それでもヤマトパートナーに出て来たガールの趣味よりはマシかなと…

第10話 ファースト・コンタクト（その4）

同日 8:25 リンボス軌道上ネエル・アーガマ

ネエル・アーガマのMS格納庫内では、ジユドーがジム・カスタムに乗り込み出撃準備をしていると、モニターからクリスの声が聞こえてきた。

『ちょっとジユドー君！ そのジム・カスタムはアポジモーターがかしくなりかけてるの！ これから修理するって言うから降りてくれる！？ それでもすぐに出たいなら、私のアレックス貸してあげるから…』

「クリスさん！ 気持ちだけは受け取つておくよ！ とにかく出るから下がつて……ジユドー・アーシタ、ジム・カスタム行きまーす！」

クリスが止める間もなく、ジユドーを乗せたジム・カスタムは、ネエル・アーガマの中央カタパルトを発進して行つた。

その後を追うように右舷カタパルトでは、バーニイのザク が発進準備を行つていた。

『ちょっとバーニイさん、大丈夫なのかよ？ いくらジオンの識別信号がまだ残つてるからって言つけど、奴らの新型機に対抗出来るのかよ？』

ザク のモニターに、心配そうなモンドが映し出されるとバーニイは多少緊張しながらも切り返していた。

「そんなの気合いでなんとかなるつて……それじゃザク 出ますー。」

バーニィのザク が出ると同時にカミーユのΖガンダム、エマのガンダムMK-、クリスのアレックスガンダムが発進、他の艦からもジエガンが発進して行つた。

同日 8:36 ネエル・アーガマブリッジ

戦闘開始から10分が経過し、戦況は一進一退の状況になりつつあった。

ネエル・アーガマに同行しているクラップ級巡洋艦のほとんどが損傷しつつあり、ネエル・アーガマ自体も艦体に傷を追つていた。

「巡洋艦エクゼター、ボストン、撃沈されました！」

「本艦左舷パルスレーザー第一群損傷です！」

次々入る報告に、ヘンケンは次第に焦りの色を濃くしていた。そんな中、格納庫にいるケリイがブリッジに通信を入れていた。

『艦長、俺も出る！』

「まさか…あれで出ると言うのか…ヴァル・ヴァロで大丈夫なのか？」

『大丈夫です！あんなMSの弾ぐらい平氣ですから…ケリイ、ヴァル・ヴァロ出ます！』

ネエル・アーガマの下部からその姿を現わした、ヴァル・ヴァロは、艦隊周囲に迫っていたネオ・ジオンのMS群をメガビーム砲で一掃し形勢を逆転させていき、ブリッジでこの様子を見ていたヘンケン

は驚きの表情で呟いた。

「凄いなあいつは…よし、直ちに反撃に出る…」

「艦長、バー＝イより入電！プルとプルツーの救出に成功したそうです！」

「了解した！本艦をネオ・ジオン艦隊に向ける…軌道修正が済み次第、ハイパー＝メガ粒子砲の発射準備に入る…」

同日 8：43 ジム・カスタムコクピット

「あ～つ糞つたれ！ちゃんと動いてくれよジム・カスタム！？」

ジユードーは自分の思い通りに動かないジム・カスタムのせいで、思わぬ苦戦を強いられていた。

そんな中、敵将校ラカン・ダカラーン率いるMSドライセン部隊が近付きつつあった。

『お～そこの一ユータイプ！大分難儀しているようだな…何なら俺達が引導を渡してやるうか！？』

『つむせーよラカンのオッサン！あんた達にやられる程、このジユードー・アーシタは落ちぶれちゃいないぜ…』

『フン…そんな事をほざくのも今のうちだ！』

ラカンからの通信が切れると、ドライセン部隊が直ちに行動を開始し、まともに動かないジム・カスタムを翻弄していた。

ジユードーは何とか動かそうと必死になっていたものの、一機のドラ

イセンが放ったハンドガンによつてアポジモーターが損傷し、完全に動きを止められた。

(じょ…冗談だろ…完全に動けなくなっちゃった…俺、ここで終わ
りかな…)

ジューーが動きの止まつたジム・カスターの「クピット」の中でそう考へていると、どどめを刺そうとしたそのドライセンがどこからともなく飛来したミサイル群によつて破壊されていた。

その様子を見たジエドロは、何か起きたのか半信半疑でいると、機のコアファイターが飛来し、その搭乗員・ルー・ルカから通信が入つて来た。

『ジユドー、大丈夫？間に合つて良かつた！今、ラビアンローズからΖΖガンダムを持つて来たからまずはコアファイターに乗り換えて！』

ジユドーがジム・カスタムを降りようとしたとき、アーヴィングは近付こうとした時、別のドライセンが飛来しジム・カスタムにとどめを刺そうとしていたが、カミーユのΖガンダムが攻撃を加えてそのドライセンを破壊した。

「カミーユさん、サンキューです！」

『「ジユドー、敵は俺が引き付けるー早くルーのコアファイターに乗
り換えろー!』

「了解！後でお礼はします！」

第10話 ファースト・コンタクト（その5）

同日 8:50 プロファイター・コクピット

ジュドーはビルがコアファイターに乗り換え、ルーはナビシートに移り、ピタンローズと連絡を取っていた。

「ハマリルー・ルカ、ラビアンローズのハマリー艦長聞こえますか？」

『ハマリルー・アンローズのハマリーです！今からNNGガンダムのロアベースとコアトップを射出します。ジュドー・サバンと合体してよ。』

いつものハマリー・オヌスの口調を聞き、ジュドーはちょっとした悪戯心を出していた。

「了解ですハマリーさん、さつやつーこの前、ブライアさんとが逢いたいって言つてましたけど…」

『あつやつ…』

いつになつハマリーの口調で、ジュドーは思わず呆気にとらわれていた。

「“あつやつ”って……ハマリーさん、ブライアさんに逢いたくないの？」

『ブライア艦長はもういいわ……でもその代わりいい人見つけちゃった！新しくロンド・ベル司令になつた宇宙戦艦ヤマト艦長の古代大佐なのは…ウフフ…』

「…………あの……言つと申すけど、古代せんにはちゃんと婚約者がいるんですけど…」

『それでもいいの……いつかある人を振り向かせたいの……』

エマリーのいつ終わるか分からない惚気話に苛立つたルーは、少しキレ気味になつてエマリーに催促していた。

「どくでもいいけどエマリー艦長…さつさと射出して下さい…！」

『ごめんなさい！今から射出しまーす…』

「了解！コアチエンジ開始…！」

二人の乗るコアファイターは変形し、まずコアベースと合体、さらにはコアトップと合体してΖΖガンダムへと変形して行つた。

「よつしゃーつ！一丁いたるかい！ターゲットスコープオープン、電影クロスゲージ……」

「ちよつとジユードー……あんたまさかあのセリフ言つもつじやないでしようね…？」

「あ、バレた！？一度でいいから波動砲の発射シーン言つてみたかつたんだよね～！」

ジユードーのその発言に、ナビシートのルーは呆れ果てていた。

「そんじゃ改めて……一氣に行くぜ！ハイメガキヤノン発射あーつ
！…！」

ΖΖガンダムの頭部からおびただしい光芒を放ちハイメガキヤノンが発射され、ドライセン部隊と応援に駆け付けた他のMS部隊を一掃していた。

同日 8:56 グワジン級戦艦ジークフリートブリッジ

「ぜ、全滅たと…」

旗艦であるジークフリートのブリッジでは、マ・クベが副官のウラガンから報告を受けていた。

「はい…残つたのはラカン少佐のドライセンと数機のMSだけとの事です…」

ウラガンの素つ氣ない報告にマ・クベは思わず椅子からずり落ちそうになつていた。

「あ…あれだけのMSがいながら30分持たないと…ロンド・ベルの連中は化け物か！？」

マ・クベが呟いた時、レーダーオペレーターからさうに報告が入つていた。

「敵旗艦に高エネルギー反応増大中！」

「ハイパー・メガ粒子砲だ！直ちに回避！並びに撤退だ！」

マ・クベが発言するのと同時に、ネエル・アーガマからハイパー・メガ粒子砲が発射され、そのエネルギーはジークフリートを掠めて半数の艦を撃沈していた。

「艦隊の半数が壊滅…どうします！」

「とにかく逃げるんだ…撤退して次の機会を伺うしかない…」

マ・クベは壺を大事そうに抱えながら指示を出すしかなかった。全く見ていたネエル・アーガマ艦隊に手酷くやられたために、ここはひとまず撤退するしかなかつたのであつた。

第10話 ファースト・コンタクト（その5）（後書き）

ΖΖガンダムがやつと登場しました。しかもネエル・アーガマ共々ハイメガキヤノンとハイパームガ粒子砲を発射とはなんて贅沢な…

ΖΖが放映された当時、ハイメガキヤノンやハイパームガ粒子砲の発射シーンを見るたびに、ヤマトの事を思い浮かべたのは自分だけではないはず…

次回、残されたユキや一ナ達の心情をお送りします。（と言つても、作者の下手くそな文ではたいした事は書けないと想いますが…）

第10話 ファースト・コンタクト（その6）

同日 7：23 ゲストルーム

結局ユキは一睡もできずに朝を迎えていた。何度も眠りつとしめたもの、古代の事が思い出されていたのだった。ユキは部屋のカーテンを開け、窓外に広がる街並を見ながら涙を浮かべていた。

（古代君…本当に無事だといいんだけど……）

その時携帯電話が鳴り、出てみると相手はクローディアだった。

『ユキ、起きてる？』

「はい…今起きたばかりです…あの…どうからかけてるんですか？」

『あなたの部屋の前からよ…』

ユキが部屋のドアを開けると、そこには電話を持ったクローディアとフォッシカーが立っていた。

「よつ… 眠れたかユキ…？」

「いいえ…あれから彼の事ばかり考えてて全然…」

「ねえユキ、朝ご飯まだなら一緒に食べない？サンドイッチ作つてきたから…」

クローディアの手には、サンドイッチを入れたビニール袋がぶら下がり、それをユキの前に差し出したものの、彼女は首を横に振つて

断るそぶりをしていた。

フォッカーはその様子を見ると、困惑した表情で切り出していた。

「なあユキ……こんな時だからこそ何か食べとかないと身が持たんぞ……昔からよく言つじゃないか……“腹が減つては戦さができぬ”ってな……こにはひとまず腹ん中に何か入れとかないと……」

「…………分かりました……確かにフォッカーさんの言つ通りですね……じゃあお言葉に甘えていただきます……」

「よし！ そうこなくちや一上手いもん食つてこれから乗り切らなきやな！ そんじやクローディア、うまいコーヒー煎れてくれ！ ユキが煎れたんじやまずくて飲めたものじや……」

「ちょっとフォッカーさん！ 何て事言つのよ～～つ！ 私だつてちやんと美味しいコーヒーの煎れ方、勉強してるんですからねつ！！！」

ユキのあまりの怒りっぷりに、フォッカーは思わず恐縮していたものの、内心ではどこかホッとしていたのだった。あえてコーヒーの話題を出す事によって、ユキを元気付けようというフォッカーなりの気配りだった。

同日 9：16 アルビオンMSデッキ

その頃二ナは、MSデッキで忙しく立ち働いていた。破損箇所のチエックや「クピット内」のコンピュータソフトの書き替えなど、あえて忙しくしていいないとコウの事を思い出しそうになるからであった。前夜、フォッカーに殴られるまでガンダムの事しか頭になかった彼女は深く反省していた。

モーラはそんな二ナを見るといったまれない思いであった。

「二ナ、あまり無理しないでよ……」

「分かつてゐるモーラ……でもこうしていないと、『ウの事を考へてしまいそうで……それに辛い思いは私だけじゃない。……森さんの方がもつと辛いはずよ……さつきもマクロスメインブリッジと通信したけど、森さんも必死になつて任務に打ち込んでゐるし……」

「話を聞いてるだけでもこちらも涙目になつてきちゃつた……それに引き換えあのスケベ親父、デリカシーのかけらもないのかね！？上の通路でアデル少尉とベイト中尉の二人でトランプなんかやつてんの！」

モーラが話すのと同じタイミングで、モンシアが上から覗き込み叫んでいた。

「「うむせー」の『テカ女！？』人が何やつてよつと勝手じやないか！？」

下に向かつて叫んでいるモンシアに、ベイトとアデルは呆れ果てていた。トランプで勝負したのはいいが、次第に負け続けたモンシアは怒鳴り散らすタイミングを伺つていると、たまたまモーラが話しているのを聞いたためにすぐさま行動に移していたのだった。

「中尉、気持ちは分かりますがここは落ち着いて……」

「全く……田頃のうつぶん晴らしのウラキがいなくなつたからつて、でつかい姉ちゃんにまで当たるのはどうかしてるぜ……」

アデルとベイトが溜息をついていると、モンシアは持つていったトランプを投げ捨て床に寝転びながら文句を垂れ流していた。

「大体な、ウラキの野郎が行方不明つてのは口実で、実はどつかに逃げちまつたんだよ！一年前のあの時のような」

「……それでどうしますか？ウラキがない間に二ナさんを口説き

ますか？」

「あほか！？恋のライバルもいなしにそんな事出来るか？・ウラキの野郎が戻つて来るまで勝負はお預けだ！」

珍しくまともな発言をしたモンシアに、二人は目を丸くしていた。もつともモンシアには別の疑惑があつた。

（どうせそのうちまたガンダムが配備されるだろ？…それまでにウラキの野郎が戻つてくればその時にまた勝負だ……今度はこの俺様が主役だ！）

第10話 ファースト・コンタクト（その7）

同日 21:14 マクロス艦内展望室

その晩、ユキは勤務を終えゲストルームに戻る途中、艦内の展望室を訪れていた。

寝不足ながらも何とか未沙の代行を務め、シャミー達三人娘と市街地で食事を済ませてゲストルームに戻る途中、ユキの足は自然と展望室に向かっていた。

広大な窓の外には果てしない星空が広がり、その中でも一際目立つオリオンの三ツ星にユキは願いを込めていた。

そこはかつてヤマトがイスカンダルへの航海途中、オリオン座空域を航行中にユキが三ツ星の一つ 星に向けて、古代が自分の事を好きになってくれるようにと願いを込めていた星であった。

（あの時だつて願いが叶つたんだもの… 今回だつて古代君達が必ず帰つて来る事を願つていれば望みは叶つはずよ……）

ユキはそう思いながらも、どこか不安な気持ちが溢れ、涙がとめどなく流れていた。

その時ユキの携帯電話が鳴り響き、出でみると相手はミンメイだつた。

「ミンメイ…ビウしたの？」

『ユキさん… 今回の件、謝らなきやと思つて… 本当にすみませんでした… 私がわがまま言つたからこんな事になつてしまつて…』

「いいのよ……いたずらに自分を責めないで……」うなづいてしまった以上、仕方ない事だから……」

ユキがそう言つと、電話の向こう側でミンメイがすすり泣いていた。

「泣かないでミンメイ……それに今仕事中なんでしょう？」

『はい……今度出る新曲のレコーディングの最中で……』

「だったら泣くのはやめて……ベストの状態じゃないといい歌作れないでしょ？あなたには大勢のファンがいるんだからその人達の事も考えて……」

『分かりました……もう泣くのは止めます……だからユキさんも元気出して下さー』

「ありがとう……私は大丈夫だから……彼の事はいつまでも待つつもりだから……」

『私も古代さん達が帰つて来るのを信じています……それじゃユキさん、お休みなさい……』

ミンメイからの電話が切れると、ユキは意を決して座つていたベンチから立ち上がっていた。

（もう泣くのは止めよつ……私強くならなきゃ……このまま泣いていたらみんなに心配かけちゃう……）

第10話 ファースト・コンタクト（その7）（後書き）

オリオンの三ツ星…ヤマトパート1第1-2話で舞台になつた場所でした。

ユキが古代に向かつて“ある人が私の事を好きに”発言をしてい るのにもかかわらず、当の本人が全然気付かないシーンを見る度に、 画面に向かつて何度も突っ込みを入れた事か…

次回、ボドル基幹艦隊に連れて来られた古代達が見た物は……

第10話 ファースト・コンタクト（やの8）（前書き）

時間は半月後に進みます。

古代達三人の運命はいかに！？

第10話 ファースト・コンタクト（その8）

A · D · 2205 9 · 11 · 11 · 06 ブリタイ艦内

フォールド航行中のブリタイ艦内の一室では、未沙がある物を手にして室内を覗いており、その様子を見ていたコウが尋ねていた。

「あの早瀬中尉…それって一体何です？」

「マイクロビデオよ…小さいおかげで彼らに見つからなかつたみたい…」

「だけどなあ早瀬君…そんな物で撮つても何の役にも立たないと私は思つけどなあ…」

古代の指摘に未沙はなおも室内を撮りながら呟いた。

「まだ逃げ出せないつて決まつた訳でありますんよ古代大佐…これに録画しておけば、万一帰還出来た時の資料になるんですから…でもそれにしても一体どこまで行くのかしら?…もう一時間以上もフォールドしている…ロンド・ベルじゃ半月たつた頃かしら…」

未沙が窓外を見ながら呟いていると、コウが彼女に驚きの表情で問いか返した。

「半月つて…フォールドするとそんなに時間が経過しちゃうんですねか中尉?」

「ええ…私もよくは知らないけど、フォールド航行中の空間ともどいた空間との時間差が異なるらしいの…」

未沙が説明していると、窓外が再び白く輝き通常の宇宙空間が再び姿を現していた。

そして次の瞬間、三人は信じられないものを目にしていた。

「な、何だ!? 窓の外は巨人の宇宙艦だらけじゃないか!?!?」

「一体…どれだけの数なんですかね…」

古代の喰きに未沙も同意しつつ、ビデオカメラを回し続けていた。「ウも遠くで行われている戦闘を呆然と見つめていた。

「あれを見て下さい…局地戦のようです…」

「いいえ…近寄れば相当大規模な戦闘のようね…」

「ああ…それも地球を丸ごと飲み込むくらいのな…」

同日 同時刻 機動要塞フルバス・バレンスマインコア

全長6000キロを越えるゼントラー・ディ軍機動要塞フルバス・バレンスのメインコアでは総司令である、ゴル・ボドルザーがモニターを介して入港したブリタイと通信を行っていた。

「久しぶりだなブリタイ…お前から提出された資料には全て目を通した…」

『それで閣下、いかがなさるおつもりで…?』

「うむ…幻の反応兵器の存在といい、男と女が一緒に乗り込んでいる戦艦の存在といい…我々は良からぬ者と接触してしまったようだな…」

『良からぬ者…と言いますと?』

「詳しい話は後だ…捕虜との会見はお前の艦で行う…謁見室を用意

しり……

『了解しました……閣下のお越しをお待ちしております……』

ボドルザーは通信を切り、ブリタイ艦へと向かうべくメインコアから連絡艇で飛び立ち、途中である考えが浮かび上がっていた。

（もしかして彼らは……“プロトカルチャー”ではあるまいな……）

第10話 ファースト・パンタクト（やのゆ）（前書き）

同じ頃のルキの様子を描きます、…と言つても内容はグダグダです、…

第10話 ファースト・コンタクト（その9）

同日 12:06 マクロスメインブリッジ

『スカルリーダーよりデルタ1へ！これより偵察任務に出発する！指示頼りますよユキちゃん！』

「了解！フォックターさん氣をつけて下さいね！」

『分かってるよユキちゃん！後で気持ちいい事しようぜ！ガハハハ

！』

「あ…あの…」

フォックターの下ネタに相変わらずユキは顔を赤くしていた。その様子を隣席のクローディアは微笑ましく見つめていた。

マクロスメインブリッジの勤務を始めてから半月余りが過ぎ、ユキはようやく仕事に慣れて来たように見えた。

「ユキさん、そろそろお毎行きませんか？もつすぐ交替要員が来ますから…」

ヴァネッサが後方のオペレーター席から声をかけると、ユキは即座に切り返していた。

「私は大丈夫！あなた達こそお腹空いてるんでしょう？」これは私が見てるから先に行つてらっしゃい！」

「はい…でも…」

ヴァネッサがそれでも何か言いたげにしていると、一人の会話を聞

いていたグローバルが助け舟を出した。

「森君、君も行きなれこ……無理はしけやいかんよ。」

「はい……しかし艦長……」

「これは艦長命令だ……一時的とはいって、君は私の部下だ……何かあつたらヤマトクルーに申し訳がたなくなるしな……」

グローバルはあえて古代の名前は出さずにいた。それはユキに対する思いやりから出たものだった。

「はい、そうします艦長……」

ユキがグローバルに答えると、シャミーが立ち上がり催促に来ていた。

「じゃあユキさん、いつものカフェテリアに行きましょー。今日はランチにケーキセットが付くんですよー！」

「ええ行きましょうシャミー、でもたまにはおじつなさいよー。」

「ええ~つづりして~ひー!~?」

シャミーが半泣きになつていると、キムが皿この手を入れていた。

「もうおしゃみーーーあんたいつも私達に扱わせてるクセにー。」

「どうしてキムまでそんな事言つのよーーーー!」

さすがにシャミーが可哀相になつたと見えて、ユキが助け舟を出していた。

「いいわシャミーーー今回私はおじるからーーーあ行きました。」

ユキと三人娘がブリッジから連れだつて出て行くと、グローバルはパイプをくわえながらぼつりと呟いた。

「やれやれ……こには女子校か……？」

同日 13:22 市街地カフェテリア

「あ～美味しかった！ ユキさん」馳走様でした～。」

いつものカフェテリアで、シャミーは腹を撫で回しながらユキにお礼を言つていた。

そんなシャミーを、遅れてやつて来たクローティアが呆れ果てた表情で呟いた。

「よく食べるわねシャミーは…」

「だつてえ～お腹空いてたんですねからあ～～～」

シャミーの発言に一同が爆笑していふと、佐渡と愛猫のミー君、それにアナライザーがやつて來た。

「佐渡先生にアナライザー、それにミー君もー！」

ユキがそう言つとミー君は彼女の膝上に乗り、久しぶりに甘えていた。それを見ていたシャミーがつらやましそうに呟いた。

「わあ～超カワイイ！ ユキさん、ちょっと抱っこさせてくれます？」「ええいいわよー」

ユキはミー君を抱き抱えてシャミーに手渡すと、ミー君は嫌がるそ
ぶりも見せずに寢を始めていた。

そんなミー君の姿を横田に見ながら、佐渡はユキに話しかけていた。

「ユキ、元気そうじゃのー。仕事には慣れたんか?」

「はい先生、おかげ様でなんとか…」

「そりゃ良かつた! ヤマトの方でもみんな何とか頑張つておるから
の。ところでフォックナーの奴があらんが……?」

「ロイだつたら先程から偵察任務に出てますけど…もしかして彼と
飲むつもりだつたんですか先生?」

クローディアが佐渡に答えていたと、佐渡の口から意外な返事が返
つて来ていた。

「実はな…ワシはしばらく酒断ちしどるんじや…古代達が帰つて來
るまでは禁酒しとむ…」

「あら先生もなんですか…実はロイも同じ半円ばかり、一杯も飲ん
でいないんですよ…」

実を言えば、古代達が行方不明になつた原因が自分にあると思つた
フォックナーは、古代達が帰つて来るその日まで禁酒禁煙を誓つたの
であった。それを初めて聞いたユキは思わず涙ぐみながら呟いた。

「すみません…みんな…」

そんな様子を見たクローディアは、その場の重い空気を取り払うべ
くある話題を切り出していた。

「やうだ…ちょうどアナライザーがいるから聞きたかつたんだけど

…

「何、テスカ、クローディアサン？」

「ここにいる五人の女性の中で、スカートめぐりしたいって人がいる？」

クローディアの発言を受け、アナライザーはしばらくテーブルの周囲を周り始め、そのうちユキの席の後ろにつくなりおもむろに彼女の胸をわしづかみしていた。

「いやあ～～ん！～～！」

「僕ニハヤツパリユキサンデナイト物足リナイ……」

アナライザーのとんでもない発言にその場にいた一同はみんな脱力していた……

第10話 ファースト・ノンタクト（死の9）（後書き）

一ヶ月目でPVが40000を越えました！これもひとえに皆さんのおかげです！

これからもグダグダ感ありだと思いますが、飽きずにお付き合って下さいませ……

次回、古代達がボドルザーと会見、……

第10話 ファースト・コンタクト（その10）

同日 12:56 ブリタイ艦内ブリーフィングルーム

古代達三人は、ブリタイ艦内のブリーフィングルームに連れて来られた。そこにはブリタイとエキセドルがあり、それに以前の戦いでマクロス艦内に侵入した三人（ロリー、ワレラ、コンダ）も同席していた。

（これから何が始まるんだ……もう何を見ても驚かないぞ……）

古代がそう思つて周囲を見ているうちに敵のボスらしき男が入り、巨人達五人がその男に敬礼するのを見ていた。

「私はゼントラー＝ティ軍第1118基幹艦隊司令、ゴル・ボドルザーだ…お前達に尋ねたい事がある…」

自分達と同じ言葉を話すボドルザーを見て、三人は困惑していた。

「俺達と同じ言葉を話すなんて…」「どうなってるんでしょう…」

古代達三人の様子を見ていたエキセドルは、テーブル上の機械の調子が順調に作動しているのを確認するとボドルザーに報告し、彼は満足そうな表情で古代達三人に質問をしていた。

「では改めて尋ねる…お前達の所属先はどこだ…？」

ボドルザーの問い掛けに、三人は顔を合わせ相談を始めた。

「大佐…どうしますか？」

「相手が名乗りを上げているんだ…ここは俺達も名乗らないと相手に失礼だからな…」

「さすが大佐…何度も異星人と戦つて来てるだけの事はありますね

…」

相談を終え三人は、改めてボドルザーの方に向き直っていた。

「自分は地球連邦軍所属、ロンド・ベル隊司令並びに宇宙戦艦ヤマト艦長、古代進だ…」

「同じく、私はＳＤＦ・１マクロスチーフオペレーター、早瀬未沙です…」

「自分はロンド・ベルパイロット、コウ・ウラキ…」

三人が自己紹介を終えたのを確認したボドルザーは、改めて彼らに問い合わせていた。

「…………お前達はいつから監察軍と接觸したのだ？」

初めて聞く“監察軍”という名前に三人は困惑していた。

「ウラキ、お前はそんな軍隊の名前を聞いた事はあるか？」

「いえ…自分は軍に入つてまだ一年ちょっととなんで…」

古代とコウの話にブリタイとヒキセドルが即座に反応し、すぐさまコウに問い合わせていた。

「軍に入つて日が浅い！？」

「軍に入る前は何をしていたのだ…？」

「何つて……民間人に決まつてますが……」

「民間人！？それはどんな者なのだ？」

「戦争に行かない人達の事ですよ……」

コウの発言にエキセドルが驚愕の表情を浮かべ、思わず叫び出していた。

「戦争をしない人間だと！馬鹿な！宇宙は戦いに満ち溢れ、戦いある所にこそ命があるはずだ！」

この発言を聞いた未沙は秘かに思っていた。

（戦いある所に命がある……一体どういう事かしら……）

そんな中、ボドルザーがしばらく考えた後にある質問を投げ掛けていた。

「お前達の艦隊に戦争をしない人間が存在するのか……そして、男と女が何故一緒にいられるのだ…？」

「男と女が一緒にいて何が…」

「ウラキ少尉、ここは私に任せで…」

コウが反論しようとする所に未沙がそれを制し、ボドルザーの前に進んで言い放った。

「これ以上あなた達の質問に答えるつもりはありません…」

第10話 ファースト・コンタクト（その1）

同日 13:01 ブリタイ艦内ブリーフィングルーム

「これ以上、あなた達の質問に答えるつまつはありません……」

未沙の気迫に満ちた発言に、古代は困惑しつつ思っていた。

（早瀬君… それは少し言い過ぎだ…）

そしてボドルザーはといつと、未沙の発言にも余裕の笑みを浮かべながら切り出していた。

「フン……お前達は今の状況を分かつておらんようだな……これを見るがいい……我々はお前達の惑星や艦隊を一瞬のうちに滅ぼせる1000万隻の艦隊を有している……」

「…1000万隻………？」

あまりの艦隊の数に古代達が言葉を失っていると、パネルには宇宙空間を埋めつくす1000万隻のゼントラーディ艦隊が映し出され、その艦隊がある惑星を攻撃している場面が現れ、攻撃を受けた惑星は一瞬のうちに死の星へと変化していった。

「ひどい… 何て事を……」

未沙の発言を受け、ボドルザーは勝ち誇るような笑みを浮かべていた。

しかし未沙には、「」のよつた映像を見せられたものある疑問が浮かんでいた。

（……おかしいわ……これだけの戦力がありながら、何故ロンド・ベルや地球圏を全面攻撃して来ないのかしら……？）

「もう一度尋ねる……民間人は実在するのか？そして男と女は何故一緒にいられるのだ！」

ボドルザーの問い掛けに未沙はさうに考へに及んでいた。

（民間人……男と女……私達には彼らにはない何かがあるのかかもしれない……）

「どうした！ 答えなければ、お前達の艦隊や惑星を滅ぼしてやる！」
ボドルザーの更なる脅しにも屈することなく、未沙は切り出していた。

「出来るものならやつてご覧なさい！」これだけの戦力があるんですからやつてみればいいじゃないですか！ それに私達にはあなた達の知らない特別な力があります！」

「ええい！ 黙れ！」

ボドルザーはそう言つと拳でテーブルを殴りつけ、未沙を捕まえてそのまま上に持ち上げた。

「…………！」

捕まえられ身動きがとる」とが出来ない末沙に、古代と「ウハは駆け寄ろうとしたものの、ボドルザーに止められていた。

「動くな……」フン、こんなマイクローンが我々に盾突こうと言うのか…何故わざわざマイクローンになつたのだ…マイクローンになつた訳を言わなければこの女を握り潰すぞ…」

ボドルザーが末沙を握る手に力を込めるが、古代が叫んでいた。

「止めろ…俺達は生まれた時からその体だ…」

「生まれた時から…それはどじから生まれると嘗つた?」

「母親からに決まつてゐるだらう…」

「母親…?」

後ろで聞いていたコンダが古代に話し掛けると、古代は多少苛立ちながらも答えていた。

「女親の事だ!」

古代の答えにエキヤドルも反応し、さらに聞こ掛けていた。

「女から…お前達は女から生まれたと言うのか? 一体どうやつて?」

「男と女が愛し合つ事によつて生まれるんだ…」

「一体どうやつて…?」

「それはその…キスしたり抱き合つたりだ…」

古代との押し問答に対してもボドルザーは彼らの言ひ事に次第に興味を持ち、ある提案を持ち掛けた。

「なるほど……ではお前達のどちらか一人、この女と“キス”と言つのをやってみる……やらねば」の女を握り潰すぞ！」

ボドルザーの問い掛けに、古代とヒウは困惑っていた。だが沈黙を破り、古代が意を決してボドルザーに切り出していた。

「俺がやるーだからその人を離してくれ！」

「大佐！あなたには森大尉が……」

「ウラキ、ここはとにかく俺に任せろ……」

古代がヒウを諭しているうちに未沙が下に降ろされていた。

「早瀬中尉、これから俺とキスをしてくれ……」

「えつ……しかし……」

未沙が躊躇していると、古代は未沙の耳元でそつと呟いた。

「これは敵の反応を見るチャンスなんだ……早くしないと奴らに殺されるぞ……」

「はい……分かりました……」

古代と未沙は互いに抱き合つて体を密着させ、唇を重ねようとしていた。

古代は一瞬ユキの顔を思い浮かべていた。

（「めんよユキ……君以外の人とキスするつもりはなかつたのに……これも任務のうちだ……仕方ない……」）

やがて二人の唇が重なると、それを見ていたボドルザー達は全員が驚愕の表情を見せ、思わずボドルザーが口走っていた。

「……！――プロト…カルチャ――――――誰か、こいつらをさつさと連れ出せ――」

第10話 ファースト・コンタクト（その1）（後書き）

ボドル基幹艦隊の総数を原作の500万隻から1000万隻に増やしました！（しかしこの作品、戦艦の大きさや数が多過ぎ……）

そしてついに、古代と未沙がキスしちゃいました……キーワードにもあつた異作品間恋愛第1号と言つていいかな～？

森 グキ
「いいわけないでしょー。」

第11話 ピック・ヒスケープ（その1）

A · D · 2205 9 · 11 · 13 · 32 ブリタイ艦内

古代達三人は、ボドルザーとの会見後再び艦内の一室に閉じ込められていた。そして話題は自然と先程の古代と未沙がキスした事により、彼らゼントラーディー人が何故あれだけの事で驚いたのか…と言ふ話になっていた。

「しかし…大佐と中尉がキスしたくらいでの連中驚いてたんですかね？」

「本当ね…星の一つや二つくらいあつてこいつ間に潰せるくらいの戦力を持つているのにね…」

「あの時、連中が言つてた“プロトカルチャー”って一体何でしょうかね？」

「分からなーいわ……とにかくロンド・ベルに戻れてこのデータを分析できればいいけど……」

「戻れたら……か……」

未沙とコウの会話を聞きながら、古代はしばらく考えていた。

あの時未沙を助けるためとはいえ、キスをしてしまった事に後悔の念に苛まれつづかった。

（例え帰れたとしても、この事に關してはコキに口が裂けても言えやしない……それよりもどうやってここから逃げ出せるかを考えないと……）

同日 同時刻 ブリタイ艦内ブリーフィングルーム

「さつきのは一体何だつたのだ…」

「何故あれほどの事を見てショックを受けるのでしょうか?」

ボドルザーとブリタイは、先程見た古代と未沙のキスについて話をしていた。彼らにとつて初めてみる行為はかなりのショックな出来事であった。

そんな中、落ち着きを取り戻したエキセドルは冷静に先程の事を分析していた。

「我々の眠っていた潜在意識が反応するのかもしないですね…」「なるほど…潜在意識か…」

ボドルザーが答えるのと同時に、ロリーが質問を始めた。

「ボドルザー閣下…プロトカルチャーとは一体何ですか…?」

「うむ…プロトカルチャーと言うのは我々の遠い祖先の事だ…」「祖先…ー?」

「そうだ…プロトカルチャーの時代には我々のサイズはマイクローンのサイズだった…男と女が共に暮らし、“文化”と言うものがあつたそうだ…しかしそれがどのような世界であつたかは記録が失われたために、はつきりした事が分からんのだ…そしてプロトカルチャーと接触した艦隊は戦闘能力を失い、滅びてしまったと言つ事だ…」

ボドルザーの説明に一同は思わず沈黙していた。

もしかしたら自分達も同じ道を歩みつつあるのか

一同の不安が高まりつつあつた時、ボドルザーがある提案をあげて

いた。

「「」の際だ…我々の敵であるマイクローン部隊……“ロンド・ベル”にスパイを送つてみよつと頼つ……」

「スパイですか？お言葉ですが、わざわざマイクローンになって“ロンド・ベル”に潜入できる者がおりますかな？」

エキセドルが不安気な面持ちでボドルザーに進言していくと、ロリ一達三人が立ち上がつていた。

「その役目、是非私達にやらせてくれ！」

第11話 ヒック・ヒスケープ（その1）（後書き）

37年前（1974年）の昨日10月6日は、宇宙戦艦ヤマトパート1の初放映の日でした。

と言つてもその当時、ヤマトのヤの字も知らずに裏番組（アルプスの少女ハイジ）を見ていたのを記憶しています。

ヤマトを初めて知ったのは本放映から二年後…
たまたま見た特番でヤマトをやっており、その内容に衝撃を受けた
のがきっかけで現在に至っています……

次回、タイトル同様古代達の脱出劇が開始されます！

第11話 ピック・エスケープ（その2）

同日 13:39 ブリタイ艦内

「とにかく、ここから脱出しましょ！」

しばらくの間考えていたコウが、意を決して古代と未沙に切り出していた。

「それはいいんだが、どうやつて……？」

「さつきの会見で大佐と中尉がキスさせられた時、巨人達がもの凄く驚いてましたよね……“プロトカルチャー”って……」

「ああ……驚き過ぎて動けない状態だつたよな……」

「ええ……それを利用するんです……いくら巨人達でも食事の差し入れはするでしょうから、その時を狙つてもう一度大佐と中尉がキスすれば……」

「それはいい名案ね……」

コウの提案に未沙が同調したものの、古代が慌てふためいて反対していた。

「ちょっと待て！そのためにもう一度俺と早瀬君がキスするのか？
冗談じゃない！いいか、キスってのはな愛し合つ者同士がするもんなんだ！好きでもない人とそうそう出来るものじゃないんだ！」

「それはまあ……そうです……」

古代の話にコウは思わず納得したものの、未沙はなぜか顔を赤くしながら切り出していた。

「私は別に構いませんよ……」これから逃げ出せるのであればもう一度大佐とキスしても……それにこのマイクロビデオを重大な証拠として持ち帰るのが私達の重要な任務なんですから……」

「まあ……確かに早瀬君の言つ通りだな……とにかくやるしかないな……」

未沙の説得に古代も渋々同意したもの、今度はコウが心配顔をしておりそれを見た未沙が尋ねていた。

「どうしたのウラキ少尉？」

「いえ……今ふと思つたんですが……巨人達の食事つてどんなのが出るんでしょうね？まさか二ンジン出て来ませんよね？」

「……お前……こんな所に来ても二ンジンの心配か……？」

コウの余計な心配に古代が思わず呆れ果てていると、“ドスン”という物音が外から聞こえていた。

「予定よりも早いなーウラキ、君はドアの側にー！」

「了解ー！」

「早瀬君……いつでもいいな？」

「はい……大佐……」

古代と未沙が唇を重ねると同時にドアが開き、立っていた敵兵は驚いたかのように動く気配を見せようとはしなかった。

「やつた！ー！」

「よし今だ、脱出するぞー！」

古代達三人は敵兵が動搖している隙に外に出ようとした時、上から

聞き覚えのある声が聞こえて来た。

『大佐、僕です！マックスです！』

そこにいたのは敵兵の制服を上から着込んだマックスのバルキリーであつた。

マックス機はフォッカー達と別れた後、ブリタイ艦の破損箇所から内部に侵入し、たまたま出くわしたゼントラーディ兵を倒してその制服を身にまとい、古代達の救出時期を伺っていた。

「それにしてもマックス、何て格好しているんだ？」

『詳しい話は後です！』

古代の問い掛けにマックスが答えると、倒した兵士を部屋の中に入れて自機もドアを閉めていた。

『しかし意外ですね…古代大佐には森大尉と言つ婚約者がいるのに…早瀬中尉とそんな関係にあつたなんて…』

「おひマックス！それは誤解だつて！」

「そうよー…これは逃げ出すための作戦……」

古代と末沙が慌てて否定したものの、マックスは何やら意味あり気に入切り返していた。

『大丈夫ですよ大佐！この事はロンド・ベルに戻つても内緒にしておきますよ…とにかくポケットの中に隠れもらいますか…』

マックス機は右ポケットにコウを、左ポケットには古代と末沙を入れ、そのままドアを開け外へと歩き始めた。

すぐさま一人のゼントラーディ兵とすれ違い、何事もなくその場を

やり過ごすかと思った時、今までいた部屋を開けたその兵士が何事かを叫んでいた。

『見つかったようです！揺れますので辛抱して下さい！』

マックスは手元のレバーを押してガウォーク形態に変形させ、飛び交う銃弾の中をかい潜りブリタイ艦内をひたすら逃避行していた。

第11話 ピック・エスケープ（その2）（後書き）

ここでもニンジンの話題が出ました。
それにもゼントラーティ人がニンジンを食べているとしたら、
大きねはどのくらいになるやう……

第11話 ビッグ・エスケープ（その3）

同日 13:45 ブリタイ艦内メインブリッジ

ブリタイ艦内のメインブリッジでは、ブリーフィングルームから移動したボドルザーがブリタイとエキセドルにある不安を切り出していた。

「あの三人で大丈夫なのかブリタイ？」

「一度でも敵の様子を垣間見たのであれば大丈夫でしょう…あの三人ならば必ずやり遂げるはずです…」

「ふむ…それならばいいのだが…」

その時ブリッジ後方にあるモニターに通信が入っていた。

『ブリタイ司令！マイクローンの捕虜が脱走しました！』

「何だと！？直ちに捕まえるんだ！」

その兵士からの通信が終わりかけた時、何やら戦闘機の轟音が鳴り響き、ブリタイ達が周囲を見渡しているとモニターを突き破り、マックスのバルキリーが出現しそのまま飛び去つて行つた。それを見たボドルザーは直ちに指令を下していた。

「奴らは一体何をしてかしやがる！何が何でも捕まえるんだ！」

マックス機は銃弾を浴びつつ艦内をあちこち飛行していたものの、たまたま入ったエレベーター内で動かなくなっていた。

「ダメです、全然動きません！」

「分かった！こうなつたら強行突破するしかない！エレベーターが止まつたら走るぞ！」

「了解！！！」

古代の決断に全員が同意し、エレベーターが止まるとき同時に走り出そうとした時、待ち構えていたゼントラーディ兵が飛び掛かる所をすんでの所で四人はすり抜け、古代と末沙、コウとマックスの一組に別れて逃走を開始していた。

同時にマックスのバルキリーは大爆発を起こし、その兵士も巻き添えになつていた。

同日 14:02 ブリタイ艦内メインブリッジ

その頃、ブリタイ艦内のメインブリッジでは、ボドルザーが苛々した様子で椅子に座りブリタイを叱責していた。

「奴らはまだ見つからんのか！？」

「はい…何しろ奴らは小さすぎるるので捜索に困難が出ているようだ

…」

「ブリタイ…この責任、取られればならんようだな……しばりくの間第一線を退いて貰おう…」

「……………はい…」

「それではスペイを送り込む作戦はどうするおつもつで……？」

エキセドルが疑問をぶつけると、ボドルザーは即座に切り返していた。

「直衛艦隊のラプラミーズ隊にでも当たらせるつもりだ……それだけこの作戦は重要なのでな……」

第11話 ビッグ・エスケープ（その4）

同日 14:09 ブリタイ艦内

古代と未沙はブリタイ艦内をひた走り、ある一室に身を潜めていた。

「ウラキ少尉達、大丈夫かしら…」

「あいつらなら大丈夫だろう…それにしてもここは一体…早瀬君、あれを！？」

未沙は古代の指差す方向に目を向けると、思わず息を飲みつつもマイクロビデオを操作していた。

「巨人が小さくなつて行く…」

それはゼントラー＝ディの所有しているマイクローラン装置であり、スパイに志願したロリー＝達三人が装置内で巨人の姿から古代達と同じサイズへと縮小されていた。

二人はもつとその様子を見ようとした時、ゼントラー＝ディ兵がその装置に近付きつつあつたため、足早にその場を離れ再び艦内を歩き始めていた。

やがて二人は武器倉庫らしき場所にたどり着き、身を潜めていた。

「あれが巨人達の言つてた“マイクローン”何ですね…」

「ああ…大変なデータを手に入れたようだな…」

「大佐、私思うんですけど…あの巨人達は元々私達と同じサイズじゃなかつたんでしょうか…そして監察軍と言う敵と戦うために自分

達の体を改造したんでしょうね…」

「まさか…そんな事がある訳が…」

「いいえ…あります…そうでなければバルキリー やガンダムと互角に戦える人間が、自然に生まれる訳がないんですから…」「もしかして遺伝子改造でもしたんだろうか?」

「おそらくは…こうして巨人からマイクローンが作れるのなら、反対に私達のサイズから巨人が作れてもおかしくないはずです…そしてもしかしたら巨人達の言う“プロトカルチャー”って、彼らがまだ私達と同じサイズだった頃の文明の事を言つのかも… ! ! ?」

その時、未沙の後ろからゼントラーディ兵の手が伸び、彼女を掴み持ち上げようとしていた。

古代は、果敢にもそのゼントラーディ兵に立ち向かっていたものの、足で蹴り飛ばされていた。

その様子を見た未沙は、ふとした弾みで手にしていたマイクロビデオを落としていた。

そのゼントラーディ兵が立ち去ろうとした時、古代が自分の体よりも大きなライフルを持ち上げ、全身の力を込めて引き金を引いて銃弾を何発か発射すると、ゼントラーディ兵は床に倒れ込んでいた。それを確認した古代は未沙の元へと駆け寄っていた。

「未沙！大丈夫か！」

古代は自分でも気付かないうちにいつもの“早瀬君”ではなく“未沙”と呼んでいた。

「……古代さん…私はもう駄目…あなただけでも逃げて下さ…」「何を言つんだ！敵がやつて来る！早くしないと…」

「ビデオカメラを落としてしまって……データが無くなつたら私、助かつても仕方がない……」

「そんな物が無くとも、俺達自身が見たり聞いたりした物をそのまま報告すればいいじゃないか！？」

「だったら尚の事……あなただけでも逃げて下さい……」

「馬鹿！諦めるな！こんな時こそ、生き抜かなければならなんだ！だから早く！」

古代は末沙をゼントラー＝ディ兵の中から救い出すと、手を取り合つて走り出していた。後方からは複数のゼントラー＝ディ兵が銃撃を加え、一人は銃撃によって生じた破壊口から下へと落ちていった。

第11話 ビッグ・エスケープ（その4）（後書き）

本日10月9日、ガンダムシリーズ最新作「機動戦士ガンダム揚げ」
もとい、「機動戦士ガンダムAGE」の初OAの日です。

親子三世代に渡る初の“大河ガンダム”……さてどうなりますやら

……

それはともかく、劇中の古代が久々に“熱かった”……
未沙を助けようと自分の危険も顧みずに行動する所は、ヤマトパー
トーをイメージして描きました。

未沙との仲は今後どうなるか……是非お楽しみに……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4770v/>

銀河伝説 鋼鉄の咆哮

2011年10月9日18時15分発行